

304
Ma86



0001396000

0001396-000

304-Ma86ウ

興亜の大業

松岡洋右・著

第一公論社

昭和16

AAC

MA86

304
MA86

興亞の大業

松岡洋右著

大業

第一公論社版



興亞の大業

松岡洋右



目次

第一章 大陸日本への道

革新断行と青年の力……………	五
外國依存から自主獨立へ……………	三〇
喪場としての大陸……………	三〇
滿洲事變以後の日本……………	三七

目次

二

第二章 開拓者としての大和民族

歴史に見る開拓精神……………	五一
積極主義の日本精神……………	六六
滿洲事變の意義……………	七四
バイオニヤーの血……………	九七
感激性と持久力……………	一〇八

第三章 大陸の先驅者滿鐵を語る

滿洲國成立と滿鐵社員……………	一一一
滿鐵と三先人……………	一三〇

滿鐵の國策的意義……………一四九

滿鐵の將來……………一九二

第四章 興亞の大業

興亞大業の意義……………二二二

日清戦争の回想……………二三四

團匪事件と日本……………二四三

民族協和……………二五一

日・滿・支の關係……………二六六

皇道による世界救済……………二七三

興亞の大任と吾等の覺悟……………二八二

目次 三

目次 四

第五章 み民吾れ

眞の日本人たれ……………三〇三

榛名艦上の聖容……………三一三

み民吾れ生ける驗あり……………三三五

裝幀 横山大觀

興亞の大業

第一章 大陸日本への道

革新斷行と青年の力

私は全ての希望を青年に懸けて居る。之は決しておだてや、おべんちやらではない。何も私は青年諸君をおだてたり、青年諸君におべんちやらを言つたりしななければならぬ義務もなければ亦其の意志もない。自分の偽らざる氣持を、そして諸君への期待を、率直に表明するだけである。「國家の興隆は青年の手にあり」とは昔から言ひ古された言葉である。皇國は今や空前の國難に直面して居るのであるが、それは同時に亦大和民族の發展史上、未曾有の大飛躍の機會だとも考へられるのである。否、私は今こそ大和民族の大發展の絶好の機會であつて、此の機會を失つたら、皇國は衰亡とは言はない迄も、當分——それも尠くとも二、三百年以上と見ねばならぬが——は大和民族は屏息の外ないのではないかとさへ考へ

るものである。眞に皇國は危急存亡の秋であり、大和民族は興廢の岐路に立つて居るのである。而して此の興廢の決は一に青年諸君の自覺に、勇氣に、信念に、實力に、而して活動に懸つて居ると謂はねばならぬのである。

此の非常時局に臨む皇國が是非共なきねばならぬことは、少くとも二つある。其の一つは現に總力戰態勢と稱はれて居るものであつて、之は表現の言葉は違つて居たが、私がジュネーヴから歸還以來、國民に呼びかけて來たところのものである。私は何も先見の明を誇るのではないが、當時既に今日の危機を豫見したが故に、どうしても皇國がそれに備へる爲には、國內に於ける凡ゆる不合理を清算し、相剋摩擦を解消し、國論を統一し、全國民の總力を一丸として、來るべき難局の打開と、國威の發揚とに備へねばならぬと考へ、其の爲には全ての非皇國的名ものをきれいさつぱりと洗ひ去つて本來の日本人の眞面目に還ることである。

即ち思想革新であり、精神の革新であり、一切の非皇國的な制度——政治的經濟的、社會的、文化的——の革新に俟たねばならぬと考へた。斯様な革新は老人や老人に近い壯年者で出来るものではない。革新は専ら青年の任務である。青年とは革新的である者のことである。曆の上の年齢がどんなに若くても、精神的に革新性を有たぬ者は青年ではないのである。それで私は青年に呼びかけたのである。之が私の政黨解消の運動であつたのである。私は政黨解消を振り翳して全國を巡禮して廻つたが、それは私が常に言ふ通り精神運動であつて、全國の青年に革新の自覺を吹き込み、又全國の革新青年を發見して廻ると謂ふことを以て、最大のそして最終の目的としたのである。之は決して私がいいころ加減のことを言ふのではない、松岡は如何なる場合にも嘘と偽善だけは持合せがない。此のことは全國の政黨解消運動に關係した程の青年達は認めて呉れて居ると信ずる。又現に眞

に私の意のある處を正しく捉へて呉れた、全國の青年の中の同志達とは今日に到る迄、全く其の信念と、思想と、行動とを一にして居り、亦一にせんことを誓つて居るのである。此の意味に於て、私自身も亦青年である。話が細くなり過ぎたが、兎に角私は世界危機に直面し、東亞民族復興の使命を以て、皇國が敢然として立ち、且最後の勝利を確保することが出来る爲には、滿洲事變直前に於て日本の上下を支配し、滿洲建國に關聯して、日本がジュネーヴの檜舞臺で聯盟脱退と謂ふ大芝居を打つた後に於てさへも、猶且解消し切れなくて居た——否、嚴格に言へば今日と雖も果してそれが完全に解消出來て居るかどうか頗る怪しいのであるが——様な國內の態たらくでは到底望みがないので、何を措いても國內の統一を期せねばならぬが、其の統一は思想、精神、制度の革新に俟たねばならぬと考へ、之等の革新を遂行するには青年に依る外ないと謂ふ結論に達したのである。皇國の青年諸君が、先づ此の革新の意氣に燃えたと謂ふことが何よりも大切である。

革新は青年の性質だと謂つたが、唯現状を打破すればいいと謂ふのではない。革新には積極的の目標がなければならぬ。革新の理念と謂ふものが必要である。而して諸君の革新の目標、革新の理念、革新の指導原理は何か？ それは曩にも一寸觸れたが皇國體の正しき認識であり、眞の日本精神の體得である。惟神道の絶対遵奉である。即ち私が政黨解消運動の機關誌に「昭和維新」と名づけた所以もそこにあつたのである。我國に於ては偉大な國家的革新の行はるる時には、常に先づ此の皇國體の正しき認識があり、そして日本精神の發揚があつたのである。最も近い例は明治維新である。遡つては建武の中興も、大化の改新も亦皇國體への反省と日本精神の發揮に依て行はれたのである。けれども此の指導原理に就て

の細説詳解を試みることは後に譲ることとする。此處で諸君の反省と再認識とを求めて置き度いことは、正しき指導原理の上に立つた、青年に依る國內革新が、國難の打開、國威の興隆、國運の發展の先決條件であると謂ふことである。之は大切な二つのことと謂つたものの中の第一の要件である。

第二は生々潑刺として外に展び擴つて行く力である。百折不撓の國民の氣力である。膨脹し、横溢し、氾濫する、民族の生命力である。此の力は外に表れては武力ともなり、又經濟力ともなる。皇軍は既に聖戰五年に及んで、陸に海に赫々たる戦果を擧げ續けて居る。又我國の産業や經濟の持久力は、支那事變の勃發當時に於て、歐米の専門家達は恐らくは半年は續くまいと謂ふ推定をして居たにも拘らず、五年間に戦ひ續け乍ら、消耗し盡される様なことはないのである。英米は日本の經濟的實力を過少に評價し、既に戦ふ力がないかの様に故意に宣傳して居るが、此んなことでびくともするものではない。未だ我國には食糧の不安等と謂ふ様なものはない。炭や砂糖や或は米が切符制になるのは當然である。四年も五年も戦争を續けて置いて、國民の主食物である米の切符制さへも、つひ最近迄は行はれて居なかつたと謂ふ、此んなベラボウなことは世界の何處にもあり得るものではない。日本だからこそ夫れが出来て來たのである。直接の戦争資材にしても少しも心配することはない。鐵や鋼等が主として米國依存であつたし、我國の石油の生産が問題にならぬ程貧弱であること等が周知の事實である爲に、英米は日本を見くびり、國民の中にも或は不安を抱く者があるかも知れぬが、東亞の安定勢力を以て任じ、大東亞共榮圈の指導者であることを自任する杯いふことが、何等の用意なくして、出来るものではない。國民は意を安んじて可なりである。と謂つても私は決して國民は手を束ねて居ていいと謂ふのではない。爲政者

も亦無爲無策でやつて行けると謂ふのではない。國を擧げて非常な覺悟を定め無駄を省き、贅澤や奢侈を去り、消費の欲望を制し、勤儉し、節約し、一切を擧げて生産設備の擴充に充て、國民擧つて國防産業の發展に協力せねばならぬことは謂ふ迄もない。或意味に於ては吾々は元寇以上の國難に直面せるものと見なければならぬが、今日の日本の國力は北條時宗時代の比ではないのである。要するに、武力に於ては固より、經濟力に於ても、日本は國民をして不安を感ぜしめねばならぬ程弱つては居ないと謂ふことを言ひ度いのである。それは何に因るかと言へば、幸にして大和民族が未だ未だ昇り坂にあるからである。御覽なさい、此の事變前迄の日本の産業の素晴らしい躍進と、世界進出を。

國際聯盟脫退當時の日本の人達の心配の主たるものは何んであつたか、それは經濟斷交をやられはせぬかと謂ふことであつた。私は後になつてから言ふのではない、其の時から言つて居たが、なほに日本が固い決意を以て立てば經濟斷交などは怖れるに足らぬ、又國際聯盟には其の勇氣も力もないことを私は見抜いて、國民に大きな口をきいたのであつた。果して國際的な經濟斷交が來なかつた許りではない。世界は不況で青息吐息の最中に、日本の生産はどんどん躍進し、貿易は毀登りに盛んになり日本の商品は世界市場到る處に氾濫して行き、世界中が脅威を感じて益々關稅障壁を高くし出したが、其の突破不可能と思はれる障壁をも押切つてどんどん發展して行つたではないか。

勿論日本の生産工業や海外貿易の躍進と謂つても、其の大部分は輕工業に基礎を置くものであつて、所謂重工業部門が必ずしもそれと歩調を合せて擴大強化されたのではなかつた。國防上から考へても之は弱點をなすものであつて、我國民の十分な自覺反省を要する處である。私はジュネーヴ行の途次ロシアに立寄つた

のであるが、當時のソヴェート・ロシア國民の消費生活は實に慘憺たるもので、道を歩いて居る女や子供は皆蒼い顔色をして、ひよろひよろして居る有様であつた。それにも拘らずスターリンは實に頑強な鐵の意志を以て、何の假借するところなく、第一次、第二次の五箇年計畫を強行する。國民も亦世界に類のない彼のスラヴ魂を以て辛抱強く耐へて行く、當時ウクライナ地方の大饑饉では何百萬の人が餓死したと謂ははれるが、政府も國民もびくともしない。そして遂々第一次、第二次、第三次と次から次に大きな國家統制の力で計畫經濟をやり上げてしまつた。其の爲に凡ゆる重工業面の劃期的な、否革命的な大發展を遂げたのである。其の結果が即ち、御承知の如くノモンハン^{ノモンハン}の戰爭に現はれて來たのである。彼的大量な新銳の武器、彼の完全な近代的な輸送の整備は、皆そこから來たのである。誠忠果敢な皇軍の將兵なればこそ、それを迎へて敵の心膽を寒からしめる様な豪勇無比な戰爭が出来たのである。歐米自由主義國の人々は皆ソ聯國民の消費生活の悲惨を憐み、或は密かに嗤笑さへもして居た、否、我々日本國民も之等の民主主義國家の尻馬に乗つて、我々の日常生活の豊かさを誇り奢侈に耽つて、大に優越を感じてさへも居たのであるが、スラヴ魂は兎に角萬難を排してそれをやり上げた。我々日本國民は大にそれを學ばねばならぬ。特に青年諸君は物の不足や、生活の不自由等に對して、不平不満を訴へるが如きことが假りにもあつてはならぬ。お隣りのソ聯の女や子供にさへも笑はれる。

それは兎に角、國防の必要から考へても、産業全體の強化から考へても重工業擴充は何よりも必要であるが、我國の海外貿易は從來輕工業を基礎として居たので、重工業は比較的立遅れた。英米兩國はそこに日本の弱點を見出して居る。特に日本は支那事變に因て、既に莫大な消耗をして居るのだから——前に述べた

様に英米の専門家は日本は支那事變半年にして經濟的に行詰りを來たすものと見て居た——武力を用ゐないでも、經濟封鎖に因て日本を參らせることが出來ると誤算した。現に米國は曩には通商條約廢棄で日本を虐めやうとかかり、現に今では學國撥英と相俟つて凡ゆる商品の對日禁輸を斷行して居る。之こそ支那事變發生以來彼が幾度か柄を叩き、鯉口を切つて我に擬せんとした傳家の寶刀であつた。鞘が遂に拂はれた、日本はびくともしないのである。脅かされて引込む様な日本人ではない。それほど日本精神は腐つては居ない。さればとて單なる負け嫌ひで癡腕を捲つて居るのではない。既に述べた様に米國の禁輸に依て窒息せねばならぬ程我々は不用意ではない。スクラップアイアンでも、飛行機用ガンリンでも、何でも勝手に禁輸なさるがよい。私は國防上の機密になるから、我に用意あり安民は安心して居ていいと謂ふことを重ねて斷言する。

私は今こそ日本の重工業の躍進の絶好機會であることを信ずる。遺威乍ら過去に於ける日本の重工業は米國依存であつたと謂ふことは之を認めねばならぬ。何事に依らず、どうにか人頼みでやつて行ける間は仲々獨立は出來ないものである。赤ン坊は親が押切つて乳離れさせぬと、齒が生へて飯が食へるやうになつても、お乳を離れやうとしないものである。其の様に日本の重工業——例へば製鐵や製鋼業でも立派に獨立が出來る様になつて居るに拘らず、アメリカの屑鐵が手に入る間はそれに依存して離れられなかつたのである。母親の乳なら未だしも、他所の屑鐵で大切な軍艦や大砲の原である鋼を製造するとは何事か。人或は經濟の原則を知らぬと笑ふかも知れぬ、けれ共日本精神は到る處に發揮されねばならぬ、唯精神々々ただけ言つて居たらそれは空念佛だ、寢言だ。日本精神は日本人

の全ての行動の上に具體的に發揮されて初めて生きて來るのである。外交、軍事、政治、經濟、産業の上に大規模に日本精神を發動せねばならぬ。儲けがよい、安上りである、手間がかからぬで全てを考へることは皇道主義經濟のやり方ではない。

私は滿洲事變を以て日本精神の爆發だと謂つた。日本人は明治維新以來餘りに長く歐米追従になり、外國崇拜になり、屬國根性になり、自主獨立の氣魄を喪失して居た。けれ共日本精神は決して死滅して居たのではない、それが爆發して滿洲事變となつたのである。私は滿洲事變以來、國民に向つて敗北宗の廢棄、追隨外交の清算、歐米依存の屬國根性の徹底的解消を叫び續けて來た。幸にも滿洲時變に於て一度爆發した日本精神は一團の焔となつて燃え上つて來た。けれどもハイカラの反動勢力は未だ未だ絶滅はしない。外交も遺憾乍らジュネーヴの聯盟脱退に依て一大轉換を與へられた方向に向つて、一氣に押し進められはしなかつた。否、徒に逡巡し、彷徨し、低徊した。國內の革新も亦五・一五、二・二六等大きな犠牲が拂はれたにも拘らず、未だ徹底して居るとは言ひ難い。だが一度燃え上つた精神の火は消へはしないのだ。個人主義、自由主義の思想は未だ何處かで燻つては居る。共產主義の不逞思想も亦少しは地下に潛んで残つては居る。けれ共、最早や夫等は反動思想でしかない。曾つて夫等は純粹無垢な大和魂を、崇高偉大な日本精神を、微の生へた反動思想と嘲笑して、神聖な日本の國土にのさばり散らして居た思想であつたが、今や完全に所を換へてしまつた。私は全國を行脚して、此の思想の新舊の顛倒を説いて廻つた昭和八年の頃を追懐して多少の感なきを得ないものである。

外國依存から自主獨立へ

兎まれ、滿洲事變以來日本人の腰は決つた。文化に、思想に、政治に、外交に、決して十分であるとも、完全であるとも言ひ得ないが、兎に角滿洲事變前に比すれば、一應方向轉換をしたことだけは事實である。屬國根性、外國依存、歐米崇拜を排撃し、眞の日本精神に目覺め、獨立獨行、自己の信ずる處を敢然として斷行すると謂ふ國民的態度が出て來たことは確かである。そして其の中にあつて我國の重工業の特に重要な部分が、依然としてアメリカ依存の儘に放置されて居たのである。之は何としても遺憾なことに謂はねばならぬ。私は心からそれを憂ひた。けれ共唯憂ひてのみは居なかつた。自分の力で出来るだけのことはして來たつもりである。即ち滿鐵副總裁の時代には故山本總裁の指導の下に、撫順にオイル・セールの工場を設け、鞍山製鐵所の擴充並銑鋼一貫の計畫を樹てた。又獨逸から石炭液化のバテントを買取つて滿洲に於て之を工業化することも考へた。昭和十年滿鐵總裁を拜命するに及んで、此のオイル・セールの増産計畫を進め、石炭液化の研究を激勵鞭撻して、撫順に試験工場を建設する迄漕ぎつけた。更に滿鐵独自のプランに依る純鐵の生産を企て、滿鐵の營業とは何等直接の關係はないが、國策の立場から合成ゴムの研究に手をつけ、漸く其の試験に成功するに到る等々、些か微力を致して來たのである。之は決して自己宣傳の意味で書いて居るのではない。滿鐵の如き國策會社が率先して、國防産業の自主獨立化の爲に貢獻するは蓋し當然だからである。唯惜しいと思ふのは日本全體の重工業が今少し早く目覺めて其の編成替を斷行して居なかつたことである。

けれども物事は全て機運が熟さなければ決して成るものではない。私は樂天主

義者であり、皇國の天祐を信する者であり、神風を疑はない者であるから何時も独自の悟りを開いて居るのであるが、日本の重工業の場合でも少しも悲觀をしない。丁度絶好の立直しの機會が今現に到來したものだと思つて居る。私がさう考へる理由を説いて見やう。日支事變の勃發した時から、之は困つた、日本の準備は未だ十分に出來上つて居ないと謂ふことを心配した者は、恐らく日本國中に随分あつたのである。けれども蘆溝橋事件は支那軍の不法な攻撃に因て起り、支那事變は國民の欲すると欲せざるとに拘らず擴大して行き、遂々長期戦に發展して了つた。今でも、もう少し滿洲の開發が進んでからやればよかつたと死兒の齡を數へる諦めの悪い人が何處かに居りはせぬか。戦争は相手のある仕事であるから、さう我方の都合の好いやうに許りは行かない。けれ共果して準備が整ふと謂ふのは何の程度のことを言ふのか、又支那事變が五年前に始まつて居なかつたら、果してどれだけ世界相手の戦争準備が出來て居たか？（日本には世界は愚か、支

那を相手としても戦争をしかける意志はなかつた、假りに其の意志があつたとしての話である）私は後に説くやうに滿洲國の開發に世界無比の日本人の開拓精神を見出し、其のスピードの早いのに嬉しい驚きを有つた者であるが、其の日本人の開拓力を以てしても、戦争の刺戟の伴はない過去五年の間に、果して何れだけの準備が出來て居たかを疑ふものである。何故かと謂へば滿洲が如何に國防本位であると謂つても、平時の産業開發は平時の基礎條件の上に行はれるからである。固より事變が起らなかつたら、生産設備に必要な資材が豊富に外國から供給されたかも知れない。けれども之も假定である。何故ならば支那事變の有無に拘らず、歐洲の第二次大戦は早晩起つたに相違ないからである。其の場合は獨逸から輸入が出來なくても或一部の人達の希望した様に、開發資材も、製造工場も、生

産機械も、そして技術者や資本さへもそつくりアメリカから来たかも知れない。併し此の假定が實現されたにしても決して無條件ではなかつたに違ひない。さすれば滿洲事變の爆發に依て、折角日本精神を回復し、外國依存と屬國根性とを清算しかけた日本國民は、其の外ならぬ滿洲の地に於て、産業的には、假令如何なる形式を探らうとも、米國人の支配を容さねばならぬと謂ふことになりはしなかつたらうか。

固より日本人が狂人でない以上、先づ滿洲國の開發が相當に進み、準備が或點迄出來上つた後に、支那事變は起つて呉れたらよかつたにと考へない者は一人も居ない。私と雖も誰よりも眞先にそれを希望したのである。私はジュネーヴに使用し、現在の人類文化の段階に於ては、國際聯盟の如き組織に依て世界の平和を維持せんとすることは空虚な夢であつて、常識としては世界の強國が夫々責任を取つて、地域別に平和の保持に任ずると謂ふ方式に由る以外には、當分世界平和の確立は望むべくもないと謂ふ、自分の平素の考へに一層確信を得て歸つたのであるが、昭和八年十一月の或る講演で此の考へから次の如く語つたのである。

外交は常識で手品ではない。私は聯盟に使用して今回愈以て此の考へを強うした。世界平和を繼ぎ止めるには常識で考へる外ない。日本は兎も角東亞全局の安定に向つて一路邁進するが宜しい。斯様に考ふるとき私は若い時から信じて居るのであるが、滿蒙は極東平和の鍵である、我々は飽く迄滿蒙の開發に専念努力し、滿洲に立派な國を造り出さねばならぬ。向ふ十年我々は滿蒙だけで澤山だ。全部の支那問題は今の我國力に過ぎる。日本人と謂ふ國民は動もすると、力を散漫に用ゆる、兎角氣が散つて困る。支那本土の事は氣の毒であるが暫く放つて置くの外ない。萬已むを得ない限り手を出さぬが宜しい。日本の力は

それ程はない。東奔西走して、唯奔命に疲れることは御免蒙り度い。先づ滿蒙を安定させねばならぬ。滿蒙こそ東亞安定の礎石であり、鍵である。私は昔からさう主張して居るのであるが、此の頃同感の人も出来た。が、全國民を擧げてよく徹底しなければいかぬ。過去の散漫な外交に再び歸つてはならない。

之は勿論外交を中心にして言つたことであつたが、我々の希望の有無に拘らず、賣られた喧嘩は買はねばならぬから、日本軍は立つた。戦争は支那どころは措いて世界大に擴つた。

日本も獨り、滿蒙や支那だけではなしに、大東亞共榮圈全體の責任ある指導者となつた。又獨自の立場と判断から獨伊と盟んで、確りと世界新秩序建設の同志となつた。従つて英米の日本に對する共同戦線は目を逐ふて強化された。けれ共、日本は微動だもしない。而も有難いことには、それが刺戟となり、原動力となつて、大規模な戦争の遂行と新東亞の文化建設と謂ふ、此の二つの動きの取れない要請に依り、日本の重工業は從來の外國依存から脱離して、嫌やでも應うでも獨力で大發展を遂げて行かねばならなくなつたのである。愉快ではないか。

「松岡の奴愉快だなんてよくも呑氣なことを言ふて居れるものだ」と考へる者があれば、それは憶病風に遇かれて居る者か、英米第五列の催眠術にかかつた者である。何故愉快だと謂ふか。それには二つの理由がある。日本の重工業が完全な獨立が出来ないで居たとすれば、其の大きな原因の一つは、米國が獨立させたがらなかつたと謂ふ處にあるのだと私は考へる。丁度、赤ン坊は立派に齒が出揃つて固い御飯を欲しがつてるのに肉體的に乳離れをさせたがらない母親がある様に、又息子や娘は相當な年齢になつて獨立の判断や行動を欲して居るのに、それをさせたがらない、即ち我が子に心理的な離乳をさせ得ない父親がある様に、ア

メリカは屑鐵と謂ふ不味いオツバイを離したがらなかつたのである。それが今度は日本を虐めるつもりで供給の手を切つた。日本は參らない。御覽なさい、大冶の鑛石は従來のレコードを破つてどしどしと輸送されて居るではないか。

第二に重工業は其の生産品の供給範囲が大きくなければ健全な發達は遂げられるものではない。従來日本の重工業の弱點はそこにあつたのだと思ふ。ソ聯の様な國であれば、經濟の原則を無視して強行することも出来るであらうが、否、ロシアと雖も決して徒らに無理を強行して居るのではなく、彼の豊かな資源と、廣大な土地と、そして一億八千萬の人口との基礎があるのである。日本は現に戰爭の必要から、如何に重工業を擴充してもし切れない状態にあるが、戰爭が終熄しても廣大な、そして幾らでも開發を要する滿洲、支那、並大東亞共榮圈を控へて居る。而も其處には鐵、石炭、石油其の他の鑛産資源が無盡藏に埋藏されて居るのである。實に我が重工業の前途は洋々たるものだと言はねばならぬ。而して尙考へなければならぬことは、重工業の場合に於ては特に其の生産量の増進に比例して、生産物の品質が向上されると謂ふことである。日本の重工業が大規模になればなる程、大切な武器や機械類製作の原料たる鋼の品質も益々向上することになるのである。之に反してアメリカはどうか？ 今や自國の狂氣じみた軍備擴張と、正氣の沙汰とも思はれぬ援英政策の爲に、重工業は彌が上にも股賑を極めて居る。けれども戰爭が終熄したら何うなるか。日本は固より全アジアは最早やアメリカに依存しない。何となれば、日本に於て戰爭目的の爲に擴充された生産設備は、各種の大規模な平和産業に振り向けられるからである。アメリカは曾つて支那事變前に於てさうであつた様に、否それにも幾層倍して、多くの工場の操短又は閉鎖を行はねばならなくなり、又最近のデプレッションの場合以上の失業者を出さ

ねばならぬことになるであらう。斯う謂ふ風に見て來ると、早きに失したと考へられた支那事變の發生も、アメリカをしてしすましたりと思はせた經濟封鎖も、實は日本の重工業の健全急速な發達の爲に加へられた愛の鞭であつたと謂ふことになる。之が天祐でなくして何んであらうか。神風でなくして何んであらうか。

蹊場としての大衆

大陸に志す青年諸君に對して、私の専門でもない重工業問題に就ての長談議を試みたのは、決して調子に乗つて餘計な饒舌を弄した譯ではない。私は此の重工業の問題を通して、日本の存續と發展とは大陸を離れては考へられないことを言はうとしたのである。私は曩に少しく觸れ、又後に詳説するであらう様に、世界人類を其の破滅の運命から救ひ、現代文化の危機を超克し得るものは、獨り大和民族あるのみであることを確信するものである。其の爲には日本が内に向つては其の世界救済原理たる日本精神、皇道精神に徹すると共に、外に向つては大に其の國力の充實と増大とを圖らねばならないのである。如何に皇道が卓越した世界觀であつても、又如何に尊い救世の要道であつても、それを宣布し、それを承服せしむるだけの力を日本國家と日本國民が、現實に有つて居なければ道は行はれないからである。力は正義ではない。それは宜しい、けれ共力を伴はざる正義も亦正義ではないのだ。何んとなれば凡そ貫徹せられざる正義は意味をなさないからである。コーランは劍と共にあらねばならぬ。然り而して、日本皇國をして強大をなさしめる道は、唯一つ大陸の開拓あるのみである。大陸進出あるのみである。大陸から切り離された日本、大陸に足場を有たざる日本、東海の小島に跼蹐するのみの日本は、如何に手を張り、足を張つても、如何に背伸びをし爪立ちをして

も、最早や今日以上に膨張のし様はないのである。

私は其の一つの説明材料として、日本の重工業と大陸との關係を語つたのであるが、次に日本の農業を見てみよう。日本の百姓の如く勤勉で、日本の百姓の如く器用な農民は世界の何處にも居ない。彼等は徳川三百年の鎖國と封建の治下に於て、限られた狭い土地を相手に、倦まず、撓まず農事にいそしんだ先祖達の血を承け継ぎ、それに新しき近代農法の知識をも採入れて、世界に類のない程の多角集約農業を營んで居る。そして増産また増産、「收穫遞減」の法則を無視するか
の如きレコードを作つた。けれども彼等の力にも、狭い日本の國土の如くに、又
自ら^{その上}限度がある。今日の日本の人口は、彼等の勤勉と器用のみを以てしては、
既に養ひ切れない處迄、早くから來て居るのである。

彼等の或る者は、北米に往き、南米に行つた。曾つては彼等の行くべき天地は、
之等遠隔の外國以外には得られなかつたからである。けれ共今や滿蒙の曠野は、
日本農民の來り拓くのを懷を擴げて待つて居るのである。聽て支那本土が彼等を
迎へるであらう。人或は支那本土には日本農民を容れる餘地なしと謂ふかも知れ
ない。支那本土には殆ど未耕の土地なく、支那の農村位人口の稠密な處は世界中
に滅多にないと謂ふかも知れない、一應はさうであらう。けれども支那本土の農
業は餘りにも原始的である、又ダムを設け、溝を掘り、堤防を築き、濕地を乾拓
する、等々の途を講ずるならば、地域に依ては今日に殆ど倍するの耕地を得るこ
とも決して難くはない。私は黄河の治水の如きをも心に大きく描いて居るのであ
る。私は又日本人の農民が混住することによつて、却つて大陸の農業生産の向上
を達成し得る餘地が大にあるとも考へる。又私としては其の適性の故に出來るだ
け支那人を工業労働者たらしめ、日本の農民を大陸に移動せしむべしとの持論を

有するのであるが、茲には詳説を避ける。

私は日本の農村の現状を見る時、本土に於て破壊、或は亡滅されんとして居る農村を、大陸に於て維持發展せしむるの必要を切に痛感するものである。日本の農村が破壊又は亡滅せしめられんとして居ると謂ふのは、農村の子弟が盛に都市に吸収され、工場に動員されて居る事實のみを指すのではない。其のことも勿論問題であるが、それ以上の大問題があるからである。それは農村が文化的に都會に蠶食され、農民が心理的に、都市的商業主義に侵害されつゝあることを指すのである。日本は土地が餘りに狭く、機械文明化が餘りに速かであつた爲に、都會の文化は最も安價にして粗末な形で農村に侵入した。そして農村の空氣を甚しく残毒した。更に悲しむべきことは、都市的商業主義の侵入である、即ち農村の土地に對する觀念は、先祖の墳墓の地として之を尊び、我が生命を託するの土地として之を愛し、儲からうが儲かるまいが、一畝一畝を之に加へて汗と脂の報酬として、自らを又妻子眷族を養ふ糧を得ることを感謝して天を祈り、塵勞を樂しみ、生に安んじて來た處にあるのである。然るに都會の商業主義の侵入の結果、農民は次第に土地を營利の對象物として見ることを覺えたのである。彼等にとつて、土地は今や利潤を生む資本として考へらるゝ様になりつゝあるのである。此の事實に思ひ到る時、私は寒心を禁じ能はぬものである。

農村は何と謂つても、健全な國民精神の水源地である。皇國の精神は其の剛健と素朴と、質實と、そして非打算的な奉仕や感恩の心と、自らなる忠孝の念と、愛郷心等を、農村の郷土共同體の生活に仰がねばならぬのである。然るに、都市的商業主義の侵すところとなつた農村は、肺病に見舞はれた結核處女地の如く、脆く人心を荒廢せしめられるのである。何と謂つても日本は狭い。其の意味に於て

上、經濟上からさう考へて用ゐたのであるが、其の後滿洲事變の爆發を契機として、新しく日本精神が燃え上つたのを見て、精神的な意味に於ても、滿蒙が我が生命線であることを覺つたのである。即ち私は昭和八年の滿洲事變記念日の講演に於て、此の感想を發表したのである。私は先づ滿洲事變が契機となつて、日本國民は次第に其の敗北宗を超克するに到つたこと、外に向つては獨自の立場から敢然滿洲國を承認し、國際聯盟を脱退したこと、又内に於ては其の善し惡しの論は別として、五・一五事件の如きものが起つたが、それは悉く日本精神の昂揚であることを語つた後、次の如く附け加へたのである。

で、斯う謂ふ様に考へて見ますと、先程私が述べました意味だけじやない、此の九月十八日の事變を偶々契機として、我が國民が此の日、復活の途に上つたのである、日本精神に甦り始めたのである。既に甦りつゝあつたから起つたのであるが、それに拍車をかけて更に其の速度を増したのである。一般國民は此の事變に刺戟されて、さうして、愈々はつきり意識して日本精神に甦る方向に突進したのである。假に滿蒙がどうならうとも、蓋し之だけでもが、此の事變は我が大和民族史上にえらい光彩を放つものではあるまいか。次で滿洲國承認を斷行したのではないか。それから更に聯盟脱退を敢行したではないか。之等は皆日本精神に甦りつゝある立派な證據である。之等の事象——此の二年間に起つた之等の事象を以て、諸君は何を物語るものであると思ふか。即ち我が國民が日本精神に甦りつゝあると謂ふ事實を物語るものではないか。唯我が生命線を守り且東亞全局保持の國策を遂行するの途に上つたと謂ふだけのことでなく、實に之を契機として、精神的に消極であつたものが積極に變り、退却が進出となり、生氣潑刺の心地に移り、漸く自主の氣持に轉じて自己の使命に目

覺め來たつたのである。斯くなりてこそ初めて 明治大帝の御遺策を奉ずるに 稍庶幾からんかと謂ふことになるのではないか。私は從來、滿蒙は我が生命線なりと、御承知の様に叫んで來た。が、其の時は主に國防上、經濟上さう考へたのである。何ぞ知らん、今日になつて見れば、滿蒙は精神的にも亦我が國の生命線であると謂ふことに氣が付いた。斯く考へますれば益々以て此の日は記念せざらんと欲するもせざるを得ない。

以上の如く、滿洲事變を契機として日本精神が發揚され、大和民族が自分自らを取戻したと謂ふ意味に於て、此の事變の精神的意義の重要性があるのであるが、此の滿蒙の地、延ては支那大陸全土が常時に日本精神を鍛錬し陶冶し、涵養する爲の環境としても亦大切な場所であることを忘れてはならない。

以上の經濟的に考へても亦精神的意味に考へても——そして國防的重要性に至つては説く迄もないことであるが——日本民族の大陸進出、大陸發展は必然であり、不可避であると共に又當局としても萬難を排して之を決行せねばならぬものであると私は信じ、自ら大陸主義者、大日本主義者を以て任じて居る者である。私は必然であり、不可避であると謂つたが、それは我々が敗北宗でなく、退嬰主義でないことを前提としてのことである。敗北宗、消極論、退嬰主義も亦立派に一つの國策として成立つのである。之を小日本主義と名付け島國日本主義と名づけることが出来るであらう。それは亦一つの立派な主義である。

祖國日本の風光は實に明媚であり、氣候は寔に温和である。米は水晶の如く麗しく、野菜は新鮮潤澤に、河海の魚類は美味である。土地廣からずと雖も人口の増殖を抑へ、軍備を制限し、原始經濟生活にでも歸つたならば、豊かに又安樂に子孫を養ふには事缺かない。否、トルストイの寓話の如く世界に率先して軍備を徹

廢し、絶對無抵抗主義の樂園を築き上げて、此の小さく美しいお伽噺の島だけを、温順無害な善い子の褒美として分けて頂いて満足するならば、日本國民は現世乍らの極樂世界を享樂することが出来るであらう。野に咲く花、空を飛ぶ鳥の幸福を以て満足し得る者は其の慶しき平安を選ぶがよい。他人のお情けに縋つて安逸を樂しむることの出来る者はそれに満足するが宜しい。小日本主義の道は、トルストイの寓話の様な縁遠い架空な談を要しない。現に滿洲事變前の日本の歩んだ途は、それに稍々近かつたのであるが、日本皇國がバルカン諸邦以下の小國に成り下り、大和民族が第四流民族に墮することを厭はないならば、それは明日からでも直に實現され得るのである。即ちベルサイユ平和會議に於て、勝手に英米本位に描き上げられた世界地圖を、絶對的、最終的に、そして唯神意的に決定された萬古不易なものとして承認し、九箇國條約を遵奉し、國家の勢力には消長があり、民族の生命には成長と老衰ありと謂ふ生きた事實を否定し、滿洲國は解消せしめ、支那全土からは撤兵し、そして支那は英米諸國の共同管理なり分割なりに委せてしまひ、三國同盟を離脱し、徳川時代の版圖に朝鮮、臺灣、南樺太を加へた地域に引込んで了つて、英米の願使に甘んじ、其の御情けに縋つて生きる道が即ち夫れである。

若し、それを敢てし得たならば、日本人は明日からでも平和愛好民族、人道主義の民族として、英米の絶對を博することが出来るに違ひない。經濟封鎖も立地たちどころになくなるであらう。米國の名家の出で又優れた聞秀人類學者であるルス・ベネデイクト夫人は、近著「人種」の中で、「日本は西歐世界に對比を見ない様な平和と非侵略の歴史を有つて居る。其の記録的歴史の始まつてからの最初の十一世紀の間に、日本は唯一回對外戦争に携つたのみである。實に此の唯一の戦争は西曆一

五九八年に終り、それ以來一八五三年外部世界に對して交通の門戸を開く迄は、其の獨立政策の確保を目的とする幕府の命令に依て、外洋航海向の船舶の建造が禁止されて居たのである。日本人の儀禮の正しいこと、明朝快活なこと、美的鑑識の高いこと等は、其の民族素質の眞髓として久しく認められた處である。日本は一八五三年以來五回の對外戦争に携はり、そして世界中に於ける最も侵略的、好戦民族の一に立派になりつつある。云々」と謂つて居る。

ルス・ベネディクトは冷靜な學者として、第三者の眼に映じた客觀的事實を有の儘に記述して居るのであつて、少しも感情的なものを交へては居ない。外國の學者の眼から見れば寔に其の通りであつて、私はむきになつて之を否定すべきを見出さない。又彼の支那最負の女流作家バトル・バックは支那事變の最初に當つて「私は自分の知つて居る曾つての日本、私の夢に描いた美しい日本をこよなく愛

するものである」と謂ふことを告白した。米國人に愛される日本とは如何なる日本であるか。ルス・ベネディクト夫人の記述した鎖國時代の日本である。フジャマとサクラと、ゲイシャ・ガールと、藝の家、紙の障子と、茶の湯、活テイ・セリ・ホニ・アラウ・アレ・カクシ花との日本である。觀賞に適する日本であり、愛玩に値する日本人である。それは外から眺める者の眼にこそ、何時迄も斯くてあらま欲しきロマンスであらうが、我々日本人は自らを倭小優雅、賞美すべき鉢植の花卉たらしめる譯には行かぬ。我々はアングロサクソンの爲にあるのではない。曾つての日本に彼等の後塵を拜し精粕を嘗め、彼等に追隨し精神的には彼等に隸屬して居たでもあらう。滿洲事變後の日本は全く其の面目を改めた日本である。滿洲事變後の日本は彼自身を自覺し、彼自身の本質を取戻した日本である。滿洲事變後の日本はアングロサクソンの從屬者どころか、彼等を以て其の代表とし、支配者とする墮落せる西歐文化の

慘毒から、世界人類を救済し得る者は我が皇道文化の他にはない事を確信し、其の手始めとしての東亞新秩序建設の指導者たることを以て自任するものである。

大和民族は独自の信念と、独自の使命感と、独自の理想と、独自の世界観とを以て進む。大和民族は困難と障碍とを恐れぬ。迫害と糺弾とを意としない。大和民族はアングロサクソンの下風に立つて、快樂と幸福との分配に與らんことを欲するものではない。それは大和民族が自らの理想を捨て、誇りを空しくし、使命を蹂躪することだからである。我々は安逸の故に理想を捨て、快適の爲に誇りを空しくし、易きを選んで使命を抛擲することは出来ない。大和民族の血がそれを許さないからである。大和民族は、柳條溝の爆發に、既にルビコンを越えたのである。退却の途は最早やない。前進、唯前進あるのみだ。青年諸君、諸君は人類救済の使命を擔ふ大和民族の第一陣を承る戦士達である。

青年諸君、諸君は新東亞建設の重責を自ら選び取つた、大和民族の先頭を切つて進む選手達である。諸君が此の光榮ある使命と、誇るべき義務とを欲しないと謂ふならば又何をか言はんやである。が、若しも諸君が進んでそれを取持たうと謂ふならば——そして私は諸君が一人残らず夫れを欲するであらうことを信ずるが——然らば諸君は全て先驅者の歩んだ道を歩み、開拓者の選んだ道を選ばねばならぬ。

諸君、安逸と怯懦を愧ぢよ、諸君を中から驅り立てるものの驅り立てる儘に、山嶺く、水清き大八洲を後に、大陸へ大陸へと進まねばならぬ。全日本の青年諸君、大陸こそ眞に諸君が、當に進み、切り拓き、打建て築き上げるのを待つ契約の地であるのだ。諸君の腕は鳴り、脚ははづまぬか。

麗しき日本、けれ共それは諸君の猛々しい心を繋ぐには餘りに柔軟に過ぎる。

美しき日本、けれ共それは諸君のはち切れる生命力を盛るには餘りに狹隘である。

日本の空は如何に清澄であらうとも、諸君の奔放自在な空想を天驅らしめるには餘りに小さく、日本の野は如何に爽かに日本の水は如何に清冽に、日本の山峰は如何に秀麗であらうとも、諸君の若い潑刺たる肉體に包まれた、大きな野心を驅け廻らせるには應はぬ侏儒の運動場でしかない。大八洲國日本（オセチヤ）を老人達の隠居所たらしめよ、幼な子達の遊園たらしめよ、病み傷けるもののサナトリウムたらしめよ。そして日本を唯先祖達の安らかに眠る墳墓の地たらしめよ。

全日本の青年諸君、大陸こそ君等の天地である。そして大陸のみが諸君の天地である。

第二章 開拓者としての大和民族

歴史に見る開拓精神

青年諸君、大和民族が激潮たる生命力を有し、人類救済の使命感を持ち且又第一等國民としての誇りを失はず、他民族の下風に立ち其の後塵を拜し其の願使に甘んずる事を欲せざる以上、吾々は決して水清く山青く、四時の景美はしく、氣候快適なる大和島根に戀々たるべきではないこと、特に青年諸君は、諸君を内から驅り立てる衝迫のまにまに高き目的、遠大なる理想に向つて進まねばならぬこと、其の進み行くや大陸であらねばならぬことを、私は前章に於て説いたのである。大陸とは勿論大洋をも含意するのである。即ち小日本、島國日本に甘んぜずして海外遠く雄飛せんとするの壯圖を、「大陸に志す」として表現したる迄である。それを開拓先驅者の精神——バイオニア・スピリットと名づけるならば、我が大和

民族こそ、實に祖先代々最も偉大なる、最も果敢なる、而して最も飽くことを知らざる開拓先驅民族であつたのである。不幸にして徳川幕府の鎖國政策は、全べての近代西歐諸國民が勃興し、發展し、海外に雄飛し、本國に於ては近代民族國家を完成し、外に在りて領土を廣め、植民地を建設し上げた時代に、それ等に先驅けて海外に雄飛し發展したる、我が民族の膨脹を壓へてしまつたのである。が、青年諸君、諸君の中には三百年に亘つて抑制され、鬱積された祖先の尊い血がうづいて居るに違ひないのである。いでや諸君と共に、國史の古き部分を披いて見ようではないか。

大和民族は元來どえらい開拓民族であつたのである。古事記や、日本書紀に據ると、天照大御神は皇孫瓊々杵尊を「葦原中國」即ち日本全國土の統治者として高天原から御降しになつたのである。大御神が天孫の御門出を祝福して、下し給ふたのが、

「豊葦原千五百秋之瑞穂國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣。寶祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮り無かるべし。」（日本書紀卷二）

の御神勅であつた。尊は大御神の大詔を奉じて、「築紫日向高千穂肆觸之峯」に降臨し給ふたとあるが、記紀の日向は今日の薩隅日三州の地方全土を含むのである。高天原は今日何れの地と定むる由もないが、我が大和民族は、天孫に隨つて遙かに遠い原住地から大移動を敢行した開拓精神の旺盛な民族であつたことを知り得るのである。

瓊々杵尊は今日の薩摩國加世田附近の地方に皇居を御構へになつたものと思はれる。尊と大山津見神の女木花之佐久夜毘賣との間に日子穗々手見命が生れ給

ひ、日子穗々手見命は更に綿津見神の女豊玉毘賣を娶りて后となし、鵜葺草葺不合命を生み給ふた。此の鵜葺草葺不合命と、綿津見神の女玉依毘賣との間に生れ給ふた、神倭伊波禮毘古命こそ、後の神武天皇であらせられるのである。尙大山津見神と、綿津見神は共に國神即ち其の地方の豪族であるが、天孫人種の首長たる神々達が之等の國神達と婚を結んで、平和の裡に皇化をしき給ふたことは、寔に意味深い太古史の事實と申さねばならぬ。學者は或は之を以て、天孫人種即ち大和民族の原始社會は、族外婚の風習を有つて居たのだとの推定を下すかも知れぬ。或はそうであつたでもあらう。それが事實であつたとしても、天孫民族の平和主義と偉大な同化力を證明こそすれ之を否定する材料とはならない。

神武天皇の御代に至つて更に遠く御東征が行はれ、天皇は大和の橿原に都を奠め、天業恢弘の鴻基を据え給ふたことは史に明かである。

尙ほ古事記其の他の傳ふるところに據れば、天照大御神の御弟建速須佐之男命は、咎によつて高天原を追はれ、「根國」と稱せられた出雲地方にお降りになり、國神の女櫛名田比賣を娶り給ひ、漸次四方を招服開拓遊ばされたのである。

皇室を中心とする大和民族の開拓精神は、後代に及んでは、日本武尊の熊襲征伐や、東征の御事跡となつて表れて居る。

以上は、何れも日本國內に於ける開拓の御事蹟であるが、大和民族の大陸經營の最初の歴史に於て、燦として輝くものは、有名な神功皇后の三韓征伐（紀元八〇〇年代）である。日本書紀卷六によると、更に遡つて垂仁天皇の九十年（紀元七二一年）には、多遲摩毛理なる者を常世國に御遣はしになつて、「トキジクノカグの木實」を求めしめ給ふた、と謂ふ注目すべき史實がある。常世國が今日の南洋群島であることは、右書紀卷六の末文をみても明かだ。「トキジクノ木

「實」は熱帯産の果物であらう、と推定されて居るが、實に驚くべきことである。上代に於て斯くも旺盛に發揮された、大和民族の開拓精神は、歴史の上に一時其の姿をかくしてしまひ、僅に遣隨使、遣唐使の往復、僧侶の支那留學等に其の意氣を留めたが、それが再び勃興して來たのは室町時代から、戦國時代を経て、徳川幕府の鎖國直前にかけてであつた。それは實に盛觀そのものであつた。日本人の南洋方面に於ける發展が如何に早く、且如何に目覺ましいものであつたかに就ては、秋山謙藏君が、在留外人の爲に講じた「日本の歴史」の、「世界の地圖」と謂ふ興味深き章の中に於て、次の如くに敘べて居られる。

千年前の世界は、五百年前に於ては非常に遠ふ形になつてゐた。其の五百年前の世界が、其の後、絶えず其の相貌を變じつゝ、其の間にドイツ、イタリヤ、ポルトガル、スペイン或はオランダ、續いてイギリス、フランス、またアメリカ等の活躍の跡を、はつきりと地圖の上に表現したのである。そこに、時代と共に、色々様々の色彩を以て、夫々の政治的支配の地域を塗つた世界地圖を形成する事情があつた。しかし、それは何處までも西洋的世界を示す地圖であり、此の西洋的世界の示すものと、或る部分は重なり、或る部分は全く別に、いま一つの世界地圖があつたことを知らなければならぬ。それは今日尙昔の儘に遺つてゐる金閣、鳳凰堂、源氏物語、奈良大佛、日本書紀等々によつて表現される日本の文化、其の日本文化の發展に極めて大きな貢獻をなして居る東洋諸國を基礎とする世界地圖である。それは、金閣を建立した人々の居た當時の日本が、多くの商船を海外各地に進出させ、ポルトガル人が印度に進出した時、そこで彼等を最初に驚駭させたのが、此の地方に進出してゐた日本商人の強靱な活躍であることを、ポルトガル王エマヌエルに報告してゐるのによつても知

られよう。印度からマラツカに進出したポルトガル人は、こゝから日本商人に誘導されて支那に来ることが出来たのである。

日本を發見したのはポルトガル人であると謂はれてゐるが、それはヨーロッパ的の表現であり、實はポルトガル人の東進が日本人に誘導されたものであることを知る人は少いのである。之は日本の歴史、東洋の歴史、特に東西交渉の歴史に於ても極めて注目すべき點である。

最近十數年に亘る私の研究によれば、ヴァスコ・ダ・ガマがポルトガル商船によつて始めて印度を訪れた時よりも二百年前から、既に日本人は、此の印度以東の海上に、年々歳々、一定の組織を持つ商船隊を派遣してゐた。シャム・ジヤバ・マラツカ・スマトラ・安南等、夫々獨立してゐた之等の國々へ、多くの商船隊を派遣してゐたのである。日本より南方の各地へ進んだ商船は、先づ琉球——今日の沖繩縣——へ派遣され、こゝから別の商船を仕立て、南方へ向つた。之等の史實は、最近發見された琉球の「歴代寶案」と謂ふ外交文書を集成したものでよつて、極めて明確になつたのである。當時、荒れ狂ふ怒濤を乗り越えて南方の各地に向つた商船隊は、すべて平和に、之等の地方の物資を運び來つた。其の爲には支那との貿易も續けた。日本及支那の物資を、南方の國々に賣り、それに代へて、南方の香料其の他の物資を購入した。そして更にそれを日本に持ち歸り、其の一部を支那及朝鮮の地方へ賣り捌いた。それらの史實も、「李朝實錄」と謂ふ朝鮮の文獻にこまかく記録されて居る。其の中間の利潤が著しく國富を増加し、日本人の生活を各方面に於て豊かにしたのである。金閣や銀閣が作られ、能狂言等が流行したのは、此の時期のことである。此のやうに隆昌を極めてゐた海外發展の時代を受け、一般には、豊太閤と呼ば

れてゐる豊臣秀吉が、後陽成天皇を奉じて自ら支那に渡り、東洋全體に亘る帝國の建設を意圖したのである。其の次の時代に、所謂「御朱印船」の貿易、即ち渡航の特許状を持つ幾百の日本商船が南方の各地に渡り、シヤムやジャバ等には「日本人町」と謂はれた日本人の特別居住地を構築してゐたのである。従つて、此の時代に東進し來つたポルトガル人は、日本人と協力せず、東洋の問題に立ち入ることは不可能であるとし、それを懇願した手紙を豊臣秀吉に送つてゐる。之は今日も尙京都の妙法院に所藏されてゐる。

實に盛んな開拓精神の發揚であり、又活躍であつたと謂はねばならぬ。殊に豊太閤の大陸進出に刺戟された日本の冒險商人達は、徳川幕府の鎖國迄の間には、スマトラ海峡の以東凡ゆる方面に往來し、シヤム、安南、カムボヂヤ、ルスン、ジャワ、ボルネオ等を通商區域とし、隨所に居留地を設定してゐたのである。それ等の人々の内には最も有名な山田長政を初めとして、角倉了以、同與一、呂宋助左衛門、荒木宗太郎、茶屋四郎次郎、末吉孫左衛門、西村太郎右衛門、天竺徳兵衛、角屋七郎兵衛、暹羅屋勘兵衛、島井宗室、神屋宗湛、西頼子、大澤四郎右衛門、大賀九郎左衛門、末次平藏、船本彌七郎、後藤宗仰、糸屋隨右衛門等々枚擧に暇ない程多數の紳商、其の他名も知られざる先驅者達が、何等國家の後援を頼まずして盛んに商權を擴張したのである。而も之等の人々は、スペインやオランダ等武力の背景を有つた商業資本の進出に對しては、又武力を以て對抗し、敢へて譲るところがなかつたのである。彼の濱田彌兵衛が、オランダの長官の胸に日本刀をつきつけて邦人壓迫の不義を責め、我方の主張を貫徹せしめた痛快な逸話は餘りにも有名である。

不幸にして寛永十三年（紀元二二九六年）徳川幕府の發した鎖國令は、さしも

盛大を極めた邦人の海外発展の氣勢を頓挫せしめ、折角築き上げた彼等の商權を、水泡の如くはかなく消へ去らしめたのである。再び秋山君の表現を借用すれば、「いま、で絶大なる苦心によつて開拓された南方の各地には、彼等の祖國が自分で勝手に變更した政策の爲に、もはや歸國することの出来なくなつた多くの日本人——海國日本の開拓者であつた日本人が、東北の空を眺めつゝ淋しく死んだ。其の生前に、戀々の情を彼等の親族や友人に書き送つた手紙は、嚴重に張られた鎖國の網の目をくぐつて、今日も數多く遺つてゐる」のである。誰れか涙なくして之を見ることが出来ようか。若も徳川幕府の鎖國なかりせば、今日の海峽植民地も、蘭印も、佛印もなく、従つて現に我等の直面する、東亞共榮圈内の面倒な南方問題などは、初めから起り得なかつたに違ひないのである。

徳川三百年の鎖國政策の結果は、決して悪弊を残すのみであつたとは謂はれない。此の三百年の間には、外に向つての國力の發展はなかつた代りに、内部に於てはそれが充實され、收約され、蓄積されて、來る可き時代の爲に備へをなしたと謂ふことも出来るのである。現に外國との交通を斷ち、外來物資の輸入を杜絶し、國民生活を専ら國內の狭い土地に依存せしめ、而もそれに加へて諸國諸大名の苛斂誅求は甚しいものであつたから、特に農民にあつては勤勉忍従以て強靱無比な生活力を陶冶したのである。今日北米に、南米諸國に、或は最近には北滿に、我農民の發揮しつゝある開拓の偉力は、主として此の二百五十年の間に養はれたものと謂ひ得る。家内工業と國內商業に従事する、商工階級の間にも亦實質、律儀の風を馴致し、殊に三百年に亘る大平のお蔭で、庶民階級にも漸く學問が普及し、心學一派の社會教育運動等も盛んに行はれたので、それらが相俟つて、豪壯雄大ではあつたが、戰國時代の餘弊を受けて、ともすれば粗暴、放縱に流れた前

代に較べると、殆んど見違へる迄に國民の一般教養を高めたのである。特に此の間に、完璧と謂つてもいい迄に郷土共同體的な生活組織が出来上り、明治以後外國との交通が開けた後に至つても、眞に日本的なものとして、長く歐米人からも羨望愛著された、風雅な文化は、其の多くが此の三百年の間に育まれ、又は仕上げをされたものである。

又武士階級にあつては、独自の封建組織の下に、君臣の分、上下の別を正しくし、厳格な武士道規律の中に、温雅・剛健・質樸な生活の實踐的型式フォームが完成した。又幕府の自家擁護策の一としての儒學の奨励により、武を練ると共に文を勵むの風が興り、四民の頭首として鍊成され教養された爲、所謂武士の嗜としての一の典雅な風格が生れたのである。

けれども、何と謂つても鎖國政策が我々が大和民族の進取、敢爲の氣質、開拓の精神を衰頹せしめた罪は、之を蔽ふことが出来ない。國民の發展力の指標となるものは人口の増加率であるが、専門學者の研究によると日本の人口が始めて全国的に調査されたのは享保六年、即ち徳川八代將軍吉宗の時であつた。吉宗の時代と謂へば鎖國の禁の愈々嚴重になつた時代である。此の頃から徳川の末期に至る百二、三十年の長期に亘つて、我國の人口は殆ど増加するところなく、僅に二千六百萬乃至二千七百萬の間を出入して居たに過ぎないと謂はれて居る。それが明治維新以來僅に七十年にして、今日では日本内地だけで約八千萬と謂ふ數にのぼつて居るのである。我々が「三千餘萬の同胞共よ」と謂ふ歌を歌つて居たのはほんの昨日のやうな氣がするのに、何時の間にか、それが八千萬に上つたと謂ふことは、實に驚く可き増加である。如何に我が大和民族が發展力に充ちた若い民族であるかを、此の一事を見ても知ることが出来ると共に、此の民族の膨脹力が、徳

川幕府の無理な鎖國政策によつて、如何に抑制されて居たかを悟ることが出来るであらう。徳富翁の如きも「……二百五十年の鎖國令は、日本國民をして野人より教養ある士人たらしめた。其の爲に小廉曲溢となつた。其の爲に島國根性は愈根を張り來つた。其の爲に動もすれば天真爛漫の氣象を喪失した」と書いて居られる。玩味して貰ひたい。

積極主義の日本精神

以上、吾々は上古から徳川期に至る迄の我が大和民族の開拓先驅者精神の隆替の跡を見て來たのである。浦賀灣頭一發の砲聲に、二百五十年に亘る鎖國甘睡の夢は醒され、幕府は大政を奉還し奉つて輝かしき明治維新の幕が披かれた。若き明治維新の日本が見出したものは何であつたか、それは印度を侵し、南洋を奪ひ、支那を傷つけて今や四方より日本に襲ひかゝつて來た、西歐人の侵略の魔手であつたと共に、彼等を強大ならしめた唯一の武器たる機械文明の偉力であつた。其の當時の西洋文明の持つて居た技術の進歩の程度は、今日から考へると寔に幼稚なものであつたが、當時の日本人から見たら、燦然として眼を奪ふものであつたに違ひないのである。

明治の日本は何を措いても此の西歐の「文明開化」に追及することに目もこれ足らざる有様であつた。嘗つて其の遠い先祖達が隋唐の文化に隨喜し、印度の文化に憧憬れたやうに、又徳川時代の儒者達が自己を没却して支那の學問に低頭したやうに、明治の日本はひた向きに歐化を急いだ。其の風は大正、昭和を通じて外國思想崇拜の姿に於て持續された。自由主義も、民主主義も、個人主義も、社會主義も、共產主義も、無政府主義も、一切合財來るが儘に之を受け容れて、我

が國體と氷炭相容れざるものがあり、我が傳統的精神と到底並立すべからざるものがあることも氣付かれさへもしなかつたのである。

後に詳述するやうに、滿洲事變は此の底止するところを知らぬ外國崇拜、西洋思想かぶれ、歐米追隨に對する日本精神の反撥、大和魂の爆發として、實に歇むに歇まれずして起つたものである。従つて今、吾々が何を措いても先づ爲さねばならぬことは、内に向つては我が國體と根源に於て相容れざる外來思想の排撃であり、我が國民性並傳統を無視したる外國制度の盲目的模倣の斷絶である。

夫れと共に吾々が忘れてはならぬことは、飽く迄も外に向つて展び擴つて行く力の助長である。其の意味に於て、日本民族は如何なることがあつても固陋になり、退嬰に陥つてはならない。飽く迄も進取であり、何處迄も積極主義でなければならぬ。唯何でも大和魂、日本精神で小さく凝り固まつて了つては不可い。私は今、外來思想を排撃せよと謂ひ、又外來制度の模倣を斷絶せよと謂つたが、それはカブレては不可い、それに毒せられてはいけな、自分の本來の面目を失つてはいけな、自分の本質を忘れてはいけなと謂ふのであつて、外國の物は何もかも一切駄目だ、日本の物でさえあれば何でもよい、と謂ふのではない。私は左様な思ひ上りや、偏狹な自負心は最も嫌ひである。何れの國民にも長所もあれば短所もある。外國の長所、他民族の美點は幾らでも學ぶがよい。吾々はまた外國から學ばねばならぬものが大にある。又自を反省し、是正し、克服しなければならぬ國民としての短所、民族としての缺點もある。それを忘れてはいけな。それを忘れたら民族の向上も國家の發展も止つて了ふの外ないのである、偉大な民族程思ひ上るものではない。個人の場合でも同じである、自信を有つと謂ふことと、己惚れると謂ふこととは其の差は紙一重であつて、而も全く正反對なもの

である、自信のある者は大に他の長所美點を認めてそれを學びもし、取り容れもするのである、己惚れたらもうおしまいである。日本は明治維新以後盛んに歐米の制度文物を攝り入れた、貪慾と謂つてもいゝ位にそれを學んだ、そして何時の間にか自分のものとして了つた。科學文明に於ても、まだく及ばないものもあるが、或點では本家本元の歐米をすら追ひ越さんとするもの、或は既に追ひ越したもののさへもある、諸々の技術や學術に於ても亦然りである。

之に反してお隣りの支那はどうか？ 彼等は三千年來中華を誇負し、徒に世界最古の文明に己惚れて、敢て歐米の長所を學ぼうとはしなかつた。又歐米の文化を攝り入れるにしても、それを自國民の手によらうとはしなかつた。一切を外國人任せにして、其の結果を享受することだけしかしなかつた。鐵道を敷くにしても、建築をするにしても、外國人の技師にやらせて置く、又銀行、會社の經營でも外國の支配人に任せて置く、政府の行政や、財政や、教育や、軍事も外國人の顧問に任せて置くと謂ふ風である。それが、明治維新以來七十年の間に日本が今日の如く躍進し、支那が現在の如き状態に止つて居なければならなかつた理由である。少くとも最も主要な原因の一つが其處にあると謂はねばならぬ。私は決して支那を侮辱するつもりで之を謂ふのではない、否それは私が謂ふのではなくして、冷靜な立場にある歐米の批評家達が、日支を比較して異口同音に唱へて居るところである。人間は他から學ぶ所が一つもなくなつたらもうおしまいである、それは個人の場合でも、國民の場合でもそうである。けれ共長所は又即ち缺點で、日本人は旺盛な外來文化吸収力の爲に、驚異に値する發展も遂げることが出來たが、無差別に外來思想や、歐米の制度を採り入れた結果消化不良に陥つて了つた、そこで私は純粹の日本精神に歸れと呼び續けて來たのである。我々が純粹な大和

魂に目覺めて、それを主人とし外來思想や、歐米文化を僕婢の如くに驅使するこ
とが出来さへすれば、少しも怖れることはないのである。否却つて毒を變じて良
薬となすことさへも出来るのである。

此日本人の旺盛な文化の攝取力は、旺盛な民族の生命力を示して居るものであ
る、新しきものに憧憬れる力、新奇なものに對する關心、新しい經驗への興味は
若い旺盛な生命力の特徴である。それが唯消極的に働けば外國崇拜となり、受け
身に働けば外國カブレになるが、それは決してそれだけに終るものではない、必
ず積極性を有つて居るのである。其の積極的に表れたものが即ち私の所謂バイオ
ニア・スピリットであり、開拓先驅者の精神である。此の開拓精神は必ずしも形
而下のものとして表れるものとは限らない。例へば彼の「細菌の獵人」と稱はれ
たフランスの生物學者バスタールの如きは、精神的な意味に於けるバイオニア・
スピリットの把持者の好典型である。バスタールは新しい發見から更に新しい探
究へと追ひ進んで飽く事を知らなかつた人である。斯くの如く、主として個人の
手に依つて爲される科學上の新研究や發見の如きも、開拓精神の一つの表れであ
ると見ることが出来る。

けれ共私の今茲に問題として居るバイオニア・スピリットは、もつと形而下の
もの、集團的なもの、或は生物社會學的なもの、即ち旺盛な民族の發展力である、
進取敢爲の民族精神である。然らば昭和青年は果して十分に旺盛なる開拓精神先
驅者としての氣魄を備へて居るか、私は其の疑問に對してハッキリ「然り」と答
へるものである。而して其の答を爲し得ることを欣ぶものである。實は私は、其
の窮まるところ遂に滿洲事變の爆發となつた傳統的な退嬰外交や、滿洲事變直前
迄の朝野の氣分等を考へて、之はひよつとすると、徳川幕府の鎖國政策と、三百

年に近い泰平の爲に、遺憾乍ら我が大和民族は骨抜きにされたのではあるまいか、と謂ふ一種の寂しさを感ぜざるを得なかつたのである。

それが滿洲事變を契機として全く面目を改めたのである、青年諸君は、我が大和民族に一大方向轉換を與へた此の滿洲事變と、此の事變の意味とをよく知らねばならぬ、そして決してそれを忘れてはならぬ。それで諄いやうであるが、此處のところはよく念を入れて、私は大陸に志す青年諸君に語つて置き度いと思ふ。

滿洲事變の意義

昭和六年九月十八日と謂ふ日は、吾々日本國民の忘れることの出来ない、極めて嚴肅なる意義を持つて居る日である。私は信ずる、此の日は、我が大和民族史上、永久に燦たる光輝を放つべき日である。何となれば此の日我が生命線確保の爲に、日本國民は蹶起したのである。支那兵の不法なる鐵路破壊に對して、我が關東軍が久しき隱忍自重の勘忍袋の緒を切つて蹶起したのであるが、之は獨り關東軍のみが蹶起したのではなくて、日本國民が蹶起したと謂ふべきである。即ち日本精神が爆發したのである。單にそれだけではない、私の見方からすれば、我が國の生命線確保の爲に蹶起しただけではなしに、此の日を門出の日として、我が大和民族は、明治大帝の御遺策であり、我が國の一大國是である所の東亞全局保持、東亞全局を安定させると謂ふ大方針に向つて一路邁進することゝなつたのである。

此の意味に於て、昭和六年九月十八日と謂ふ日は、我が大和民族史上に偉大な光彩を止める日である、と私は謂ふのである。

試みに思へ、此の滿洲事變發生前の我が國は如何なる有様であつたか、殊に滿

蒙問題に就てはどうであつたか、日支の關係に於てはどうであつたか、對世界の關係に於てどうであつたか、之等の事を考へて見ると實に隔世の感があるのである。デファイチズムと謂ふものは御承知の如く獨り日本のみではなく歐米にも唱へられて居たけれ共、私の見る所では、苟くも國家の重責に任じて居るやうな人國の運命を或る程度まで擔ふて居るやうな責任ある地位にある人の間に、之を信奉し實行せんとするやうな人は、當時歐米にはなかつた。勿論氣紛れ者や、呑氣に何でも口にし得るやうな人々の間にはデファイチズムはあつた、然るに不思議にも、我が國に於ては責任ある人の間に迄此のデファイチズムが侵入して來た。そして之を實行にさへ移さうとした人がある。時代相とでも謂ふのであらうか。尙此處で一言挿んで置く、近頃アンドレ・モロアの「フランスは敗れたり」や、ジュール・ロマンの「ヨーロッパの七つの謎」等の翻譯本が非常に賣れて居る、それを讀んだ人々は、フランスの責任ある政治家達の中にはデファイチズムが蔓延してゐたのではないかと謂ふかも知れぬ、それはあつた。けれ共滿洲事變前に於ける我が國の或一部の政治家達の有つて居たデファイチズムは、其の程度のものではなかつた、唯日本には何と謂つても 天皇陛下の御稜威がある、そして彼の滿洲事變となつて爆發した大和民族の血がある。そこに日本の百戰不敗と、フランス大敗北の秘密があるのである。フランスを敗北せしめたものは政治家のデファイチズムのみではない、之だけを參考の爲に斷つて置く。

兎に角、滿洲事變前の日本には、思ひ出してもゾットするやうな恐るべきデファイチズムがあつたのである。當時私共が口をすつぱくして滿蒙の重大性を説き、我が國の拂つた犠牲を指摘して呼びかけて見ても、國民は滿蒙問題に對して一向氣乗りがしなかつた。當時朝野の多くの識者の間に於ては吾々の叫びは寧ろ頑迷

固陋の徒の言の如くに蔑まれてさへ居た、之は事實である。國民も亦至極存氣であつた、二回迄も 明治大帝の下に戦ひ、血を流し、十萬の同胞を之が爲に犠牲とした程の深い関係のある滿蒙に就てすら、全く無關心と謂つて宜しいやうな有様であつた。情ないことには我が國の有識者の間に於ては、滿蒙放棄論さへも遠慮會釋なく唱へられたのである。

當時の我が國朝野のデフイチイズムの病は全く膏肓に入つて居たのである。デフイチイズムは直譯すれば敗北主義であるが、私は之をお宗旨と考へてゐる、即ち敗北宗である、敗北宗のお題目たる、平和と國際協調は寔に美しい、誰が人間として平和を愛し、各國の協調を冀はざるものがあらうか。然し吾々は同時に、我が大和民族の使命を考へて見なければならぬ、又我が民族の自活自存と謂ふことをも考へて見なければならぬ。平和と謂ひ、協調と謂ひ、如何に美名麗辭を並べても、結局は我が國の名譽と、利益とを犠牲にして譲り退くのである。朝に一城を割き夕に一砦を讓る、唯退却あるを知つて進取を欲せない、それが敗北宗の正音である。

私共は當時の日本朝野の有様を見、情けない世相を見て眞に深い憂を抱いた。斯やうな有様で祖國日本は何處に行くであらうか。之はどうしても、直接又は間接に 明治大帝の御息がかゝつて育つた吾々の目の黒い間に此の問題を解決して置かねばならぬ、そうでなかつたら吾々の息子孫は滿蒙から退いてしまふだらう、と謂ふ考へが益々切實になつたのである。

故に私は此の自分の深憂を屢々有志の間に語りもし、亦微力乍ら滿蒙問題を擧げて日本全國の輿論を喚起する爲には、著書の廣告の形を藉りて汎く訴へると謂ふ方法さえも取つたのである。所が圖らざりき、昭和六年九月十八日夜半柳條溝の

附近に於て爆發した——日支兵の衝突が起つた、私が「爆發した」と謂ふのは、此の衝突に藉りて爆發したと謂ふのだ。何が爆發したか、日本精神が爆發したのだ。

此の爆發を契機とし、日本を中心として起つた世界的な激動と、大轉換はどうであつたか、大和民族の積極的活動は全滿蒙を被つた。越えて翌七年の早春には既に滿洲國が出来上つてしまつた、二十世紀の三十年代に於て滿洲に全く新しい一つの獨立國が生れたのである、誰が夢にでもそれを豫想し得たらうか。我が國は續いて之を承認した。此の滿洲國の承認すら當時の我が國に於ては逡巡躊躇したのであるが、時の勢と國民の元氣は政府當局をして餘儀なく滿洲國承認を執行せしめた。

國際聯盟の干渉は當然の事である。世界は「認めぬ」と謂ふ、「そんなことは構はん、我は認める」、と我が國民は答へ、毅然たる態度を取つたのである。

日本が世界に對して毅然として、勝手に或る一國の獨立を認める等と謂ふことは、滿洲事變以前に於ては全く思ひも寄らぬことであつた。青年諸君此の一事を考へて見た丈けでも、此の事變によつてどれだけの變化が起つたかお解りであらう、まだある、とうとう日本が聯盟へ行つて、

「あなた方がそんなに解らねば御免を蒙りませう」

と謂つて、さつさと引揚げた。之亦今日は國民が狎れて當時のことを忘れて了つて、當然のことのやうに思つて居るが、聯盟脱退など、謂ふことは、天でも落ちて來るやうに思つた人が、日本に、殊に有識者の間には、非常に多かつた、國が亡びると謂ふやうに恐れて居た人が少なくなかつた。併し、大和民族はものを直感する、それが大和民族の特長だ。人間としての純真さを多量に有ち、直感的に行

動し得る所の我が大和民族全體としては、毅然として聯盟脱退を敢行することが出来たのである。

世間では松岡が聯盟を脱退して来たやうに考へたものが多かつた。よしそれが今日では御手柄であると謂ふことに決定して居たとしても、それは何等私の功績ではない。私は日本の首席全權としてジュネーブに使した、そして國民諸君が脱退せると仰言るから「はいさうします」と謂つて引揚げて来たゞけである。まあ種々な経緯はあるが、一口に謂へばさうなる、即ちもう其の時分には、そろ／＼日本國民は本來の大和民族の面目を取り戻して来たのである。勿論、日本國民が奮起したと謂つても、一人残らず奮起したと考へたら大間違ひである、殊に上層有識階級の中には、其の頃でも、まだ敗北宗の信者は居た。今日でもそれが根こそぎなくなつては居ない、知らず識らずに英米第五列になつてゐるものがないとは謂はれぬ。どうかして敗北宗だけは、根こそぎ此の日本國にはないやうにしななければならない。

私は説いて此處迄来ると、つくづく大和民族の血と謂ふものを考へざるを得ない。私が大和民族の血と謂ふことを謂ひ出したのは、ナチス獨逸の真似ではない。私は特に他の思想の糟粕を嘗めることは嫌ひである。日本にはよく御下りの好きな思想家が多い、彼等は英米追従でなければ獨逸崇拜である。私はさう謂ふ人達と混同され度くはない、否混同する者があればそれはお勝手であるが、此の「大和民族の血」と謂ふ大切な問題は、外國の借物の思想などで他所の真似として説明されては不可いのである。餘談になつたが、日本國民の思想と行動の上に方向轉換を與へ、長く我が大和民族史上に偉大なる光彩を放つ滿洲事變とは何かと謂へば、それは天の攝理である、之を契機として日本國民が眞我の再認識に甦つた

のである。

更に言葉を換へて謂へば、滿洲事變の意義は何かと謂へば、それは歐米追従、若くばデファイチズムに對する日本精神の發奮であり反撃である。此の反撃發奮によつて日本が甦つたのであると謂ふことが出来る。けれ共それは矢張り初に述べたやうに血である。大和民族の血の中に歐米への追従、デファイチズム又退却と謂ふやうなことを長く許さない、何ものかゞ流れて居るからである。此の大和民族の血が躍動したのである。此の事變に於ける我が將兵の躍動其のものは血が承知しないからであるが、更にそれが日本國民全體の血に反應を起さしめたのである。國民の中には一時は色々と誤解もし、又意義の解らない人達もあつた。が、其の自己の血が承知しない、彼等の血管の中の祖先の血が彼等を驅り立て、遂に國民總立ちとなつて我が軍の行動を後援するに至らしめ、とう／＼國際聯盟脱退と迄なつて了つたのである。

之を若し疑ふ者あらば我が二千六百年史を繙いて見るがよい、必ずよく解る。我が日本國民は随分支那カブレしたこともある。

日本國民は偉いところもあり、又缺點もある、實によく外國カブレをする周。知の如く昔の漢學者の中には支那と謂へば、牛溲馬渤も有難く、王道と皇道を履き違へた論さへも盛にした者がある。

先人の書物を繙くと王道と皇道をゴツチャにしたり、王道を皇道の憲法で、もあるかの如く扱つたものがある。然し皇道は王道以上のものである、否、その性質には根本的の相違がある。日本で王道を建てるなどと謂ふ人があるならば、私は徹頭徹尾反對する。支那の王道といふのは、有徳の者が、天の命を受けて帝王となるのであつて、そこで禪讓放伐の問題が起る、堯舜禹は禪讓であつて湯武は

放伐である、此の一事を見れば明かである、日本に於ては斷じて斯くの如きことは容されない、我が國は永久に萬世一系の天子によつて皇統が繼がれるのである。君臣の別は神代の昔から柄として明かである、然るに吾々の先祖はすつかり支那カブレした時代がある。到底日本は支那に及ばずと爲し、我が國體と其の根源に於て絶対に相容れざる王道にまでカブレて了まつたのである。徳川時代などにはそんな學者が幾人も出た。それから遡つて佛教が入つて來ると馬鹿に天竺カブレして、日本の神様は佛教の爲に潰されかかつた。之も亦日本人の短所たる性格乃自心理から來て居る。然し有難いことには、我が皇室に危難が生ずると和氣清麿が出て來る、國が危くなると北條時宗が出て來る、神風が吹く。今時の若い人達は「神風が吹く」と謂つたら可笑しいことを謂ふと思ふかも知れないが、實は僅かばかりの淺薄な科學知識を以て總てが解ると考へる人の方が、私から謂はすれば餘程可笑しいのである、私は日本の國に神風があると信ずる。滿洲事變其のものは神風だ、聯盟脫退に至つたのも神風だ、更に七十年前に遡つて考へて見ても彼の難局を切抜けて明治維新の大業を全うしたのも神風だ。そして前章に説いたやうに、現に吾々が空前未曾有の國難——或る意味に於て元寇以上の國難に直面して居ることが、之亦神風であることを私は確信する。神風は獨り元寇の役にのみ限つてあつたのではない。眞の日本人ならば此の私の謂ふ事が解る筈である。そして此の神風は主として日本人の血から吹き出るのである。「血」と私は繰返して謂ふ、一體犬にしてさへも、ブルドックの血を享けないものは如何にしてもブルドックになる氣遣ひはなく、又テリアの血の流れて居ない犬をどう育てて見ても所詮テリアになりはしない。日本人の血を有たないものを幾ら教育して見ても日本人になりつこない。

私は御承知の如く特に滿洲事變以來、口をすつばくして日本精神を取り戻せと叫び續けて居るが、日本人の血を享けて居る以上それは望みがあるから謂ふのであつて、日本人の血を持つて居らぬ者に「爾日本精神を取戻せ」とか、「汝に日本精神を植えてやらう」と、私は左様なばかなことは謂はぬのである。思はずも「大和民族の血」の論が長くなつて了つたが、民族本然の性質と謂ふものは矢張り争はれないものである。滿洲事變によつて、一度勃然として興つた日本精神は、滿洲建國後に於ける開發事業の上にも、見事に開花して、大和民族が世界中の何れの民族と比較しても決して劣らない、否最も優れた開拓民族として自他共に許すアングロサクソンに較べてさへも、寧ろ勝つた開拓先驅民族であると謂ふことを實證したのである。私は、昭和十年八月圖らずも滿鐵總裁を拜命して滿洲の現地に臨み、其の事實を見出して、何とも謂ふことの出来ない喜びを感じたのである。今それを諸君に語らう。

國際聯盟を脱退して歸國してから暫くして舍田に引込んだ後、私は感ずるところあつて政黨解消の運動を掲げて、全國を行脚し、主として青年諸君に志を訴へ、又青年諸君の考へを叩いて廻つたのであるが、所期の目的も大體に於て達成することが出来たと信ずる時期に到つたので、滿鐵總裁を御引受けすることにしたのである。實は早くから交渉を受けて居り百方固辭したのであるが、當時の南關東軍司令官に對する私自身の友情に於ても否み難きものがあり、又私の如も者でも當時の内外の狀勢から見ても、滿鐵總裁を引受けすることに依つて、國家に御奉公が出来ると考へ、且自分が滿洲問題に關聯してジュネーブに使し、聯盟脱退をした以上、其の始末を滿洲に於てつけねばならぬとも考へて、之を承諾することにしたのであつた。斯うして三度滿鐵に御奉公することとなり、昭和十年八月赴任し

たのであるが、私は滿洲の現場に臨んで何を見出したかと謂へば、曩に述べた如く我が大和民族の旺盛な開拓精神の發露を發見したのである。之は實に私に取つて喜ぶべき發見であり、且又驚異でもあつたのである。

之は外ならぬ松岡の驚異であるから大に意味があるだと、私は自分でそう思つてゐる。諸君は己惚れの強い男だと呆れるかも知れぬが、それは己惚れでも何でもない、私がそう謂ふのは自分が比較研究の出来る立場に居るからである、全て物事は比較と謂ふことを離れては、科學的合理的な研究と謂ふものは出来ないものである、そして事實の認識の關する限りに於ては、科學的な研究を経なければ、何事も主張するだけの價値はないのである。元來私は二十七歳の時關東都督府外事課長として渡滿して以來、前述の如く前後三回に亘る滿鐵での御奉公を含めて、滿蒙の現場に於て相當永く働いて來たものである。又外交官としても多くは支那問題、其の中でも特に滿蒙問題に關係したのであつて、アメリカや歐洲に行つても、支那問題と離れたことがないものである、斯くの如く何處に行つても滿蒙の問題に携はつて居り、又人一倍關心も持つて居る以上其の経過は大體に知つて居るのであるから、時代時代を分けて歴史的に比較することが出来るのである。さう謂ふものの眼を以て、昭和十年滿鐵總裁として滿洲を見直した私がビックリ驚天してしまつたのである。私は滿洲事變直後の數年間に行はれた滿洲の變化を見て、夢ではないかと謂ふやうな氣持がし、人間業のやうには思はれなかつたのである。神様以外に期様なドエライ事業があつた短時日に出来るものではない、と謂ふやうな氣がしたのである。此の當時の私の感じから見て、其の感じの基礎を爲す見方の一端を、昭和十一年滿洲を訪れた、全日本青年代表の諸君に乞はれる儘に「バイオニアとしての大和民族」の題で講演したことがある、此の講演は今日

に於ても尙大陸に志す青年諸君に、そつくり其の儘を訴へても可いものであると信するから、私は大體に於てそれを骨子とし、其の當時の私の新鮮な第一印象と感激をも、出来るだけ有りの儘を傳へるやうに、話を進めて見たいと思ふ。

私が滿鐵總裁として赴任して先づ驚いたのは匪賊清掃の好成績であつた、當時は東京等では滿洲は匪賊討伐の成績が上らぬやうに謂ひ觸らされて居たので、私の如く相當の滿蒙通を以て自ら任ずる者すら多少迷はされざるを得なかつたのである。然るに私は昭和十年八月滿洲に赴任し、十月初め飛行機で熱河を振り出しに北滿を飛び廻り、現場を見て大變に話の間違つて居ることを確めたのである。私が考へて見るのに、僅かに三、四年内外の間に——昭和六年の秋から七年一杯位は滿洲の治安は渾沌としてゐたのであつて、愈々匪賊剿討の工作に力が入つて來たのは爾後僅かに三、四年そこそこの事であつたから——日本の二倍半大の地域、大部分は未開の地域であるが、かう謂ふ地域に亘つて治安肅清の爲日夜討匪を續ける兵士は殆ど總て生れてから初めて滿洲に來た人達で、土地不案内であるし、將校の大部分もそうなのである。之に反して匪賊は自分の掌を指すが如くに山も河も詳しく知つて居る、従つて之を相手とせねばならぬ將兵の苦心は全く想像に餘りあるのである、然るに僅か三、四年の間に此の廣大な地域に亘つて、私の如く昔の滿洲を知つて居る者の眼から見れば、眞は隔世の感ある程度迄匪賊を剿討したのである。全く僅かの間に驚くべき掃討振りだ、コザツクはウラルを越え、そうして西部シベリアの鐵道を敷設したが、此の鐵道援護の任務を果す上に於て實に三十何年も戦ひ續けたのである。白人はアメリカの大陸を横斷するに就て、百年乃至百五十年間もアメリカ、インディアンと戦ひ續けたのである、僅か三年位戦つて、未だ匪賊が一人も居ないと謂ふ状態にならぬことを咎める人があれ

ば、其の人こそどうかして居るのである。イギリス人杯はインドの北邊に於て年
がら年中討伐を續けて居るのである、唯イギリス人は利巧だから新聞にも出さず、
従つて餘り人が知らない丈けである。イギリスが印度に乗り込んで東印度會社を
立てたのは西曆一六〇〇年である、而も猶インドの北邊ではイギリスの兵隊は倦
まず撓まず土人と戦ひ續けて居るのである。そして國民も亦それを何とも謂つて
は居ない、大英帝國は、之あるが故に世界の四分の一を領有することが出来、今
日も尙どうにかこうにか其の地位を保つて居るのである。

日本人は餘りに神経過敏過ぎはせぬか、現に滿洲でも、張作霖や張學良が頑張
つて居た頃は馬賊はまだまだ盛んに横行して居たが、非常な重大事件でない限り、
日本の新聞には載つたことがなかつた、又十餘年前には現に滿鐵の本線で汽車の
中に馬賊の出たこともあるが、現場の者は氣にもしなかつたのである。其のやう
な小賊は何處にでも出るものである。現に東京の真中で、アメリカ張りのギャン
グ騒ぎが一時あつたではないか、馬賊などは環境の産物として、氣にもかけない
で居る位のことが出来ないでどうするか。私は二十八歳の春まだ寒い時に馬に乗
つて五日間山の中にもぐり込んだことがある。其の時北風の凜烈たる中を、とあ
る小山の頂上に駆け登り馬首を立てて下の人家を見下した塗場、ヒョット馬賊を
やらうと謂ふ氣分になつたことを思ひ出すのである、之は冗談ではなく、本氣で
ヒョットそう思つたのである。私は其の瞬間、滿洲に馬賊の出るのは無理からぬ
ことであると考へた。即ち滿洲の馬賊は、何のことはない環境の産物であるとも
考へられるのである、私は諸君に向つて馬賊になることは勧めはせぬが、青年は
誰でも進んで馬賊になる位の氣魄と、馬賊の頭目になれる位の元氣とを持つて居
なければならぬと思ふ、それ丈けの氣魄がなくては大陸への進出も、新天地の開

拓も出来るものではない。一體白人達がアメリカを拓いた時はどうであつたか、さきに述べた様に、インデアンとの戦ひの連続であつたのである。私が未だ子供の時には、太平洋沿岸の田舎では住民がピストルを持つて居て、何かと謂ふと直ぐそれを振り廻はすと謂ふ風であつた。現に今日でも歐米の大都會の真中に於て、自分の身は自分で守ると謂ふことがハッキリしてゐる、寝る時には弾込めのピストルがちやんと枕の下に忍ばせてある。諸君は寧ろ法治國の西洋人にして此のとあるを驚くであらうが、西洋人は自分の身は自分で守るものと考へて居る、それが亦動物の本能でもあるのだ、日本人は餘りに法治國民になり切つた爲に自分の身體は自分で護らなければならぬものだ、と謂ふ此の本能性に基く覺悟までも忘れて了つた。之が滿蒙問題が遅々として進まなかつた最大の原因の一つであつたのである。世人がどうも此の事を氣づかないで居る。

バイオニヤの血

私が曾て小學校長を集めて、野蠻人を作る教育をせよと謂つたのも皆此の意味なのであつて、自分の一身は自分で護らなければならない。日本人が此の本能を忘れたのは多分反動だらうと惟ふ、封建時代の日本武士は皆二本刀を差して生命の取り合ひをし、町人と雖、旅に出る時など腰に一本打込んで、決して丸腰では歩かなかつたものである。男ばかりではない女と雖ちやんと懷劍を放さなかつた俺の身體は俺自身で護るのだ、之が動物の本能的性質である、之を忘れてはならない。此の本能を没却して了つた日本人の根性を叩き直さない限りは、大陸問題も其の一部分である滿蒙問題も到底解決しないと私は考へる、私は十四の時にアメリカでルンペンになつた、何時も之だけは自慢して居るが、同じルンペンでも私

のは世界的のルンペンで、それを十四の時から始めたのである。従つて私は日本だけで育つた青年諸君の知らないやうな事を知りもし、子供の頃から見ても來て居る。そう謂ふ境遇に於て育てられ後に暫くの間外交官としての生活をやつた結果、日本民族を白人其の他の異民族と常に比較するのである。曩にも述べた如く、此の比較以外に物を知る道はないのである、自分と異ふものと比較して見めて初めて自分と謂ふものが判るのである。私は變なことを謂ふやうだが、自分が日本人の一人であると謂ふことを確信して居る、日本人とは如何なるものであるかと謂ふことを他と比較して見て知つて居るからである。日本だけで育つて、外の民族を餘り見ないと、日本人とは如何なるものであるかと謂ふことを知る道がない。

私は若い時から、色々なものと比較して、日本人を研究して來た結果一つの結論を得た。夫れは斯う謂ふ事である、吾々は實に偉い有能な民族である、が併し其の有能振りが甚だ芳ばしくない、白人其の他が拓いた新天地に、後から乗り込んで行つて偉い處を發揮する。現にアメリカの太平洋岸其の他に於ても、後から行つて其の偉力を發揮するから、白人達はうっかりすると自分達は追ひ出されはせぬか、との恐怖から排日が起るのである。日本人は如何なる處に行つても發展するから、初め之を劣等民族視して馬鹿にして居た白人達も、日本人の優秀性を見出すと俄かに周章てるのは無理も無いのである。アメリカ人と雖、先祖代々拓いて來た大切な土地を日本民族が如何に優秀なりとは謂つても、そつくり空け渡す義務は無いと考へるのは、人情として當然の事である。諸君と雖、そんな事はしないに違ひない。

まだ有る、私は若い時上海に居た、日露戦争の最中二十五歳で領事館補として行つたのである。當時の上海はイギリス人の發展が素張らしく、日本人の勢力は

極めて小さかつたので、せめて上海丈だけでも日本人の發展を圖り度いと考へ、其の後領事として赴任した時も、皆と一緒になつて大いに畫策したのである。然るに昭和九年、私は所謂上海事變に關して上海に行つて實に驚いたのである。昔の共同租界即ち居留地は、イギリス人が大勢力を張つて治めて居て、日本人杯何處に居るか判らない程であつたのが、夫れ等のイギリス人に近い大きな勢力を持つ様になつて居る。白人の後に行つて日本人が此處でも亦悉らゝい發展をして居る。

私はずつと前から居て、其の時も未だ残つて居たイギリス人の領事から聞いたのであるが、既に不動産の所有高は、日本人がイギリス人と伯仲すると謂ふ處迄になつて居り、而も工業部門に於てはイギリス人が企及し得ない迄に、日本人が活躍して居ると謂ふのである。之をイギリス人から見たら決して好い氣持はしない、日本人と謂ふ奴はおかしな奴だ、なりは小さいが肚の中はなかなか大きいのだ、油断は出来ないと謂ふ事が判り出したのである。私は他の場所で詳しく述べた通り、積りであるが、日本が非常時に直面せねばならぬ原因の一つは、此の日本民族が偉い力を持つて居ると謂ふ處に有るのだ、と斷する外ないと考へるのである。

喬木には風は強く當るものである。夫れは偕ておき、そこで私は考へる、之は我々の中に尊い祖先の血が流れて居るのだ。バイオニアの血が流れて居るのだ、吾々が大和民族は曾つて日向の一隅から東漸して行つて、遂に日本全土を開拓した。大和民族は、元から大八洲の全土に擴つて居た異民族を、何時の間にか征服し、同化してしまつた、ど偉いバイオニアであり、開拓の先驅者であつたのである。斯様に、歴史は明かに我々の祖先が開拓の先驅者であつた事實を立證して居る。然らば、今日の日本人は如何か？ 今日日本人を見るに、此の祖先の先驅者振りは餘り發揮しない、他人の拓いた後に行つて、其處で有能振りを大いに發揮す

が故に、人に嫌がられるのである。夫れよりは前人未踏の地に行つて、自ら自力で開拓すべきである。日露戦争の當時、花大人花田中佐の如き人は、滿洲義軍を率ゐ、馬賊の様なものを指揮して、軍の側面援助をなし、又露軍の後方で大いに活躍されて、我々の血を躍らせたものである。昔は滿洲には日本人の馬賊の頭目か居たものであるが、何時の間にか一人も居なくなつてしまつて居る。私は馬賊が良いと謂ふのでは無い。

併し日本青年の中に一人や二人は馬賊の頭目となつて、滿洲の曠野を自由自在に馳驅する元氣と、氣魄の有るものが出て来ても良いのではないか、日本人は何時の間に斯うも變つて仕舞つたのであらうか？ 我々の血管の中には昔我々の祖先の持つて居たバイオニアの血が流れて居る筈だ。夫れが徳川三百年の鎖國政策の爲に抑へられて、冷却し、枯涸してしまつたのではないだらうか？ どうも今の日本人には祖先の豊かに持つて居たバイオニアの血が無さそうだ。バイオニアと謂ふものは、人の拓いた後から行くものではない。人の拓いた後から喰つ追いて行つて、如何に有能振りを發揮しても、人に嫌がられても満足して居るのは、バイオニアのやり方ではない、もつとくく大和民族に應はしい、男らしい新天地開拓の血は流れて居ないのか？ 之は實に私にとつて、不愉快なる大疑問であつたのである。ところが我々の血管の中に祖先の血が無いのではない、夫れがちやんと有るのだと謂ふ事を、私は前に述べた昭和十年十月の滿洲現地視察に依つて悟つたのである。少し氣を付けて、滿洲事變以後に於ける日本人の發展振りを眺めて居れば、夫れが判る筈であるのだが、百聞一見に如かずで、二十臺から滿洲に關係して居る私でも、親しく實地を見る迄は判らなかつた。不敏と謂へば不敏、鈍と謂へば鈍であるが、私はそこで始めて半生の大疑問が解けて非常に愉快になつたのであ

る。申す迄もなく、我々の血管の中には、祖先の持つて居たバイオニアの血が、今でも脈々として流れて居るのだ、之迄は、唯夫れる發揮する環境が出来なかつたに過ぎないのである。血は持つて居る、充分に持つて居る、滿洲事變が偶々その契機となつて、我々がバイオニアたる性質を發揮し得る環境が其處に生れて来たから、こんなに、ど偉い事業がやれたのである。

これからは猶も之を大陸に進めて行つて、益々祖先の血を取り返し取り返し進めて行つて、我々が、人類史上に曾つて無い有能なバイオニアであることを實證するのである。實に愉快ではないか。

私は敢へて斷言する。人類の五千年史に於て、事變後の五箇年に吾が大和民族が滿洲國に於て成し遂げた様な、開拓の先驅者としての偉業を、左様な短期間に遂行したと謂ふ事實は、世界の何處にも無いのである。

アングロサクソンが、御承知の如く、近代史に於ける世界第一のバイオニアであると相場が決まつて居る。が、其のアングロサクソンさへも、未だ曾つて成し得なかつた程度に於て、而も極めて短期間に——昭和十年に私が見た時は、建設事業に向つてから僅かに三年であるが——此の三年間にどえらい開拓事業を、吾が大和民族が敢行して居るのである。而も屢々謂ふ通り、日本の二倍半の廣さを持つ滿洲の土地に於てである。斯くの如き事實は、人類史上未だ曾つて無かつたと謂ふ事に就ては、歐米の歴史家と雖、反駁の餘地は無いと私は確信して居る。昔のイギリス人やアメリカ人に今の様な文明の利器を與へたら、もつと大きな事をしたに違ひない、アメリカはもつと早く開拓されて居たに違ひないと論ずる人はある。百年前に今日の様な文明の利器が有つたら、或はそうであつたかも知れない、併しその理由又は原因がどうであらうと、かゝる驚異に値ひするバイオ

ニア的事實が歴史上何處にある？ 有つたら持つて来て見せて貰ひ度い、僅々五年間に於ける滿洲國の開拓事業の如きものは、人類史上未だ曾つて無かつたのである。英語にマン・ビハインド・ゼ・ガンと謂ふ言葉がある、夫れは、「大砲の背後の人」と謂ふ意味である。如何に優秀な大砲が有つても、大砲は自分獨りでは發射しない、之を撃つのは人である、と謂ふ意味である。どうしても大砲だけではいけない、兵隊が必要だ、文明の利器を支配する者は人間だ、之を振り廻はす人が無ければ用を爲さない、如何に優秀な飛行機が有つても、又五哩やそこいらのレールは一日で敷くと謂ふ、性能の高い延べ機械が有つても何んにもならぬ。然らば、滿洲で此の文明の利器を振り廻はして來たのは誰れであるか、吾が大和民族である。重ねて謂ふ、我々大和民族の血には世界に比類のないバイオニア、即ち開拓の先驅者たる血が充分に流れて居るのである。滿洲事變以來僅かの年月の間に、滿洲に展開された事象が、之を立證して居る、實に愉快ではないか。

尙一つ、滿洲事變後僅かな年月の間に、斯くも速かに達成された開發事業の、其の驚くべき快速度、超スピードは何に歸因するか。單に大和民族の中に、祖先の卓越したバイオニア・スピリットの血が流れて居るからだと謂ふ丈けでは、何かまだ説明の足らぬものが有るのでは無いかと考へて見た結果、私は更に一つの説明を掴んだのであつた、之も私の大和民族論の重要なポイントの一つを成すものであるから、諸君に傳へて置き度いと思ふ。夫れは滿洲事變以來三、四年の間は、現地の日本人達が無我夢中であつたからと謂ふ事である。よく聞く様に、火事の時など、びつくりして跳ね起きた途端に、平常の時だと到底かつぎ上げる事も出来ない様な重量の物を易々と運び出して居る、後になつて考へて見ても、何處からそんな力が出て來たか譯が判らないと謂ふ話があるが、簡単に話せば唯そ

れなんである。滿洲事變がガンと来て、唯もう直感的に、感激的に、無我夢中に突き進んだ、夫れだからこそどえらい事が出来たのだ。私は、之は人間業ではないと思ふ、正しく神業だ、大和民族には偉い血がある、其の大和民族でも年がら年中、斯様な事が出来るものではない。無我夢中になつて突進したからこそ出来たのである。之が私の第二の説明である。

感激性と持久力

私は考へる、人間と謂ふ動物は、インスピレーション——英語ではインスピレーションと謂ふが、神がゝりて動く場合が屢々ある。此の神がゝりになつた時、本當にど偉い事をやる、東郷さんがロシアの艦隊は對島海峡を通過すると斷言した、之がインスピレーションである。和氣清麿が宇佐八幡宮に行つて皇室の急を救つた、之が神がゝりと謂ふものである。

私は關東軍が意を決して、暴戻なる張學良の軍隊に一撃を加へた時、それは人間業ではなく、神がゝりであつたと見るのである。(私の謂ふのはよく民間に流行つて居る様な、あんな人を迷はすインチキな事をやる神憑りではない)此のインスピレーション——神がゝりてやつた事は後で説明は着かぬ、何れの民族でも此のインスピレーションの下に一番大きな仕事をしてゐる。其の中でも、我が大和民族の持つて居る長所は、神がゝりて行く、無我夢中で行く事にある。私が全國を行脚して歩いた時、屢々青年諸君に向つて説いた様に、直感的に、感激的に進んだ時大和民族は一番大きな事をしてゐる。これなんだ、之が他民族に較べて、大和民族の最も優れて居る點である事を、私は信じて疑はない。

然りインスピレーションである、神がゝりである。よく田舎等に行くと昔人柱

を沈めて、川を堰き止めたとか、土手を築いたとか謂ふ話が傳はつて居る。けなげにも、うら若い庄屋の娘か何かで進んで人柱に立つて驚く立派な工事が出来上つたと謂ふ話がある。今の者は一口に野蠻だ、莫迦だ、とけなすが一體何が野蠻だ、何が莫迦だ、夫れは今日の日本の歐米かぶれをした人達の、間違つた思ひ上りと謂ふものだ。昔の人をして、如何しても之は人柱が必要であると思ひ込ませ、凝り固まらせて仕舞つて、無我夢中にならせたればこそ、初めて、人間業では出来ない様な大事業が出来上つたのである。之がインスピレーション——神がゝりである。インスピレーションと謂ふものは、寝そべつて、仰向いて紙煙草でも吹かせてゐる中に、ひよいと思ひつく様な、そんな安價な空想や、出鱈目な妄想を指すのではない。そこで滿洲事變から、事變直後三、四年間の超スピードの開拓事業はインスピレーションであり、神がゝりで行かなければ、あれ丈けの大事業はやれる筈のものではなかつたと私は信するのである。此の點は青年諸君に判つて頂けると思ふ。既に神がゝりであり、無我夢中でやつた事であるから、後から見つて缺陷の有る事は判りきつた話である。之を非難する者があるとすれば、その人が如何かして居るのである。然るに随分、當時日本のインテリの間には非難があつたのである。一體日本の知識階級は、自分では縦の物を横にしようともしない癖に、亦出来もせぬ癖に、他人の仕た事の批判ばかりを以て能事とする度し難い習癖の所有者である。否、獨り知識階級と謂はず、一體日本人と謂ふ者は、私から見ると、世界の文明人の中で一番胃の腑の悪い民族の様である。何でも他人のした事は其の儘呑み込む事が出来ず、何とかして非難したがる、も少し健胃劑でも嚙んで癒さなければならぬのではないか。どうも日本人は人を褒める事を嫌ふ、直ぐ悪口を謂ふ。之は我々が一日も早く驅逐しなければならぬ民族的短所である。

借餘談は置いて、最後に一言付け加へて置きたいと考へるのは、如何に日本人と雖、十年も二十年も神が、りでは居られない。否失れば五年とは續かなかつたのである。夫れが當然である。もう一度大火事があつて家が焼けて無我夢中になるのを待つか、そうは參らぬ、我々は大陸に足を踏み出した以上一步と雖、退く事は許されない。ハッキリした意識の下に、長期計畫を樹て、無我夢中でやつて来た爲に生じた缺陷を是正しつゝ進んで行かねばならぬ。現に我々は、滿洲に於て夫れをやつて居る。神が、りに依つて拵へる事の出来た基礎の上に、五箇年計畫、修正五箇年計畫と、確りしたプランを樹て、着々とやつて来て居るのである。殊に支那事變が發展し、日獨伊三國同盟が結ばれ、英米の共同戦線が敷かれ、我國の産業を脅威せんが爲に假借する處なき對日禁輸の強行を見るに至つて、之等の事態に即應して、日滿支を打つて一丸とする、周密なる經濟提携、經濟計畫の案を樹て、著々として之を進めつゝあるのである。否、日滿を一體不可分とし、日滿支を連ねて有無相通する共存經濟を確立せざる限り、東亞は立ち行かないのであつて、夫れ等の計畫は既に以前から爲されて居たのであるが、我が國直前の事態は層一層その進捗に拍車を掛けつゝあると謂ふのが實相である。固より過去十年間に於ても幾多の困難があり、蹉跌があり、豫期せざる事情の發生もあつたけれ共、苦難來らば來れ、障碍起らば起れ、蹉跌あらばあれ、我等は益々勇氣百倍して忍耐強く進まねばならぬ。

今や吾々は支那事變完遂を通じて、大東亞共榮圈の確保に邁進しつゝある、其の爲に兎もすれば、滿蒙の方はもう片着いて仕舞つた様な錯覺にかゝつて居る者が少くない。決してさうではない、我が大和民族の大陸經營の第一歩であり、その足場で有る處の滿洲建設は、また僅に基礎工作を了へたに過ぎないのである。

それを忘れてはならぬ。我々は大陸政策を考へる時、十年や二十年を單位とする様な事では、到底此の大事業は成し遂げられるものではない、宜敷く百年、二百年の大計を立て、倦まず撓まず進まねばならぬ、私杯も史上の人物を拉し來つても、家康や武田信玄の様なのは嫌らひである、如何にしても好きにはなれない。信玄よりは謙信の様な人物が好きだ、川中島の戦を見て、も、大將自ら單騎覆面して敵の陣中に乗り込んで敵將に一太刀浴せかけ、アッしまった、と謂ふや馬に乗つた儘で一人で居城春日山に歸つてしまつた。如何にも其のやり方が好きだ、日本人の粹だと思ふ。又秀吉と家康を較べると、秀吉は何處となく明るくて日本人の代表みたいな氣がする。織田信長亦然り、何處か英姿颯爽たる處がある。家康等も本當に偉い人だと思ふけれ共、どうも蟲が好かぬ、家康が好きで秀吉が嫌ひだと謂ふ人は、日本人には餘り無い様である。けれ共これからは家康の様な信念の強い、さうして百年、二百年の後を見て物事をやる人が必要である。青年諸君今大陸に必要とする者は、開拓先驅者の意氣益々旺盛であると共に、この家康型の人物、獅噛みついたらどんな事があつても、決して手を放さないと謂ふ人が必要である。そして私は心から諸君に夫れを期待するものである。

青年諸君、私は茲數年にして世界に於ける日本の運命が極るのではないか、否、アジア大陸に於ける日本の運命が決するので有ると確信して居る。私は滿洲事變前後から「滿蒙は我國の生命線なり」と叫んだ、私は今尙滿蒙は我國の生命線である事を確信して居る。猫も杓子も今では生命線々々と謂ふ事を謂ふから、メン、と意味が變化して來て、滿蒙は我國の生命線である、と謂ふ本當の意味が今尙掴めない人がある。生命線とは讀んで字の如く、此の線を切られたら日本は參つて仕舞ふと謂ふ事である。我大陸經營の表玄關たる、滿蒙に於ける大和民族の

發展それを基礎とした處の護りを確立せずして、萬一我々が此處からさへも退却しなければならなく成つた時、即ち此の線を切られた時は吾が日本、我大和民族の運命の窮まる時である。端的に謂へば參る時である。青年諸君は先づこの事をハッキリと心に留めて貰ひ度い。此の爲には如何なる犠牲を拂つても如何なる苦難を忍んでも、我々はやらねばならぬ。況んや先づ滿蒙から支那全土に及ぼし、極東の平和を確立し、進んでアジア民族を解放すると謂ふ聖業が、尙我々に有るのである。まだ登山ならば一合目にしか辿り着いては居ないのである。前途猶、遼遠である。

そんな事は嫌やだと謂ふならば、小さい日本の島に歸つてサンガー夫人を頼んで來る可し、そして青年諸君は生涯娶らず嫁がす子供を産まぬことだ、日本人の往くべき道は二つに一つだ。前章の終りに於ても既に述べた様に、サンガー夫人の産兒制限を實行し、彼の小さい日本の島だけで、あの美しい景色を楽しみ世界中の人から羨まれ乍ら、物質的には裕福な生涯を送る、之が一つ。之も又一つの國策には違ひない。それから今一つは、どんな犠牲を拂ふとも、たとへ如何程物質の窮乏を來たし、如何に生活の困苦を極め様とも、我々は、神武天皇の御神勅を奉じ「六合を兼ねて以て都を開き、八紘を捲ふて宇と爲さん事亦可ならずや」の意氣を以て進まねばならぬ。我々は眞の世界平和を確立して行かねばならぬ。之が日本の皇道である、之を遂行せんが爲には如何なる犠牲をも避けてはならぬ。如何なる險難にもたじろいてはならぬ。自分達は其の爲に死んでも良い、三度の食事を二度に減らしても我々は斷じてやる、之が一つ。此の二つの方針、二つの國策の中で一つを選ぶとなれば、日本人たる限りそれはもう判つきりして居る。もう後へは絶対に引く事は出來ない、退けば足を掛けなかつた昔よりもつと

我々は悲境に陥らざるを得ない。現に我々の直面せる事態の重大性は、もう改めて玆に繰返す迄もない。之を要するに、非常な決心を以て立向はざる限り、甚だ恐れ多い事であるが、明治天皇の御聖旨を奉じて遺憾なきを期すると謂ふ事には參らぬのではないか、斯様に私は思ふのである。青年諸君、此れは因より全日本國民の責任であり、特に我々の如く現に成人である者の責任であるが、將來に掛けて、此の大和民族の使命遂行に任じて行かねばならぬ。青年諸君の責任は、夫れにも増して一層重いのである。

青年諸君、我々は全く諸君に期待し、諸君に矚目し、總べての望みを諸君の上に懸けて居るのである。

第三章 大陸の先驅者滿鐵を語る

滿洲國成立と滿鐵社員

青年諸君、私は前章に於て自分が滿鐵總裁として現地に臨み、開拓先驅民族としての日本人の優越性の喜ぶ可き發見を爲したことを述べた。而して滿洲事變直後の數年間に於ける滿蒙の開發の超速度の成績は、東西の歴史の上に會つて記録されたことのないものであることを語つたのである。それに附加へて私は言つた、如何に大和民族が優れた開拓先驅民族であると謂つても、それだけでは此の超スピードの説明はつかぬ、それは、特に日本民族の長所であるインスピレーション——神がかりで無我夢中でやつたから、あれだけのことが出來たのであると謂ふ第二の説明を自分で發見したと謂ふことをも申した。そして更にそれに添へて、最早無我夢中で事を運ぶ段階はとづくに過ぎたのであるから、飽迄も百年の

大計畫を立て、長期建設の意氣込でやらねばならぬと謂ふことを申したのである。茲に私は更に今一つの私の考へを語り度いと思ふ。それは此の滿洲建國と滿洲開發の好成绩の基本的な原因を求むれば、現代の日本人の血の中に流れて居る祖先のバイオニア・スピリットであり、それに日本人特有の直感性、感激性がドラッグをかけた事にあるのであるが、更に第三の原因力として、過去三十餘年に亘つて滿鐵に於て養はれ、積上げられて來た知識、經驗、人材等々を含む総合的な實力、特に滿鐵の傳統の持つ底力と謂ふものを考慮に入れなければ十分に説明がつかないと謂ふ事である。或人々は私を以て滿鐵禮讚或はお自慢に過ぎると謂ふかも知れぬが、私は滿洲事變は關東軍と滿鐵とでやつたものであり、滿洲建國は滿鐵によつて養はれた人材があり、滿鐵の有つて居た滿蒙に對する基本調査や研究があつたから、現に見るが如き好成绩を示して居るのだと確信するものである。

滿洲事變は關東軍と滿鐵でやつたと謂ふことは決して言ひ過ぎではないと思ふ。何となれば、先づ第一にあの軍の迅速な用兵は滿鐵の鐵道線路がなければ出來ないことであつたからである。滿鐵社員は關東軍と同時に立ち上つた。晝夜を別たす兵隊や軍需品の輸送に當つた。無腰の滿鐵社員は或は暗夜敵中を物ともせずして先驅車を走らせ、或は砲彈のうなる中を装甲車を運轉して常に軍と共にあり、軍の先頭にあつた。彈丸雨注の中にあつて沈着勇敢に線路の破壊箇所を修理し、燒却された鐵橋を迅速に架設した。軍の連絡の爲に不可欠な電信電話線の架設や、修理の工事を敗殘兵の出沒する中を、そして凍てつくやうな寒さの中を恐れずたじろかすして敢然としてやつてのけた。貴重な滿鐵社員の鮮血は幾度となぐ鐵道線路を亦北滿の雪原を赤く染めたのである。此の武装せざる戦士達の剛膽と勇氣とは、流石の皇軍將兵をして常に舌を卷かせ、軍は意を安んじて一切を滿

鐵社員に託し、専ら軍事行動に力を集中することが出来たのである。滿鐵の久しい間に養つて居た支那語の自由に話せる日本人、日本語の巧みな支那人が諜報や連絡に活躍し、滿鐵の有つて居た地形的、地質的探査其の他の資料の調査研究が、直接に軍の運用に役立つ功績も決して尠しとしないのである。特に何と謂つても見事であつたのは軍と滿鐵との同心一體の同志的結合の精神であつた。

滿洲國が生れた。多くの滿鐵社員は勇躍挺身して之に参加した。建國草創の當時は何ら先きの見透しは立たず、待遇の如きも全く不明であつたのであるが、使命威に燃えた滿鐵社員中一人もそれを顧る者がなかつた滿鐵の内部に於ては經濟調査會を設け全知能を總動員して、滿洲國指導の責に任ずる關東軍に協力し其の専門的知識を以て之を援助した。滿鐵は滿洲國鐵道の經營を引受けて管理建設の一切の重責に任じた。世界の鐵道敷設史上に驚異的新記録を留めた新線の建設は零下三十度、四十度、否北滿の北部に於ては零下五十度以下にも達する寒氣と幾度となく繰返された匪賊襲撃を冒して決行されたのである。僅かに之等の事例を擧げただけでも、滿洲事變と其の後の建設は關東軍と滿鐵とによつて行はれたと謂ふ私の言が輕卒でもなければ誇張でもないことを認めて貰へると信するのである。然らば滿鐵の斯くの如き實力と、滿鐵社員の此の國家的精神は抑々何處から來たものであるか。此の間に答へるものは、滿鐵の誇る大陸の先驅者としての歴史と傳統であると、私は信ずるものである。いでや暫し此の大陸の先驅者としての歴史と傳統に就て語り併せて會社の現在及將來に關して極めて簡単に述べ度いと思ふ。大陸に志す青年諸君——そして私の茲に話しかけて居る青年諸君の多くは現に若き滿鐵社員であり、或は社員の卵であられると思ふが——諸君は先づ第一に「滿鐵とは何ぞや」と謂ふことをはつきり知つて頂き度いのである。私は茲

に、諸君の前に、昭和十年八月二十九日、私自身が満鐵總裁として滿洲の地に足を踏み入れた日に直ちに私の親愛なる社員諸君に對してなした新任挨拶に於て述べた言葉の一節を再び茲に引用し度いと思ふ。

「満鐵と謂ふ會社は純然たる民間の商事會社とは違ふ、申す迄もなく重大な國家的使命を負ふて居るのであります。社員諸君もそれに就ては自負心を以ておいでになるであらうと思ひます。而し此の會社は、私の常に申しますやうに、明治大帝の御遺産であります。さうして十萬の同胞の屍の上に築かれた會社であります。私の會社でもなければ諸君會社員の會社でもない。之は 陛下のもので御座居ますが、さう謂ふことを我々の間で論ずることは畏れ多いので避けますが、其の次には全國民のものであります。

我々は全國民からの委託を受けて居るのであります。一言にして言へば我満鐵は神聖なものである。是を傷けるが如きことは斷じて許さるべきではありません。せん。満鐵創立の時の目的乃至使命、其の目的乃至使命の或る部分は環境の變化によつてそれ程重きを置く必要がなくなつたと謂ふ様なこともありませう、併し出發點に於て持つて居た使命の中で主として經濟的使命、大和民族の少くとも今日に於きましては東北亞細亞に於ける經濟的進展を助け、或は指導して行くと謂ふこの國家的使命、之が私は最初から一番重要な使命であつたと信じて居りますが、此の點今日及今日以後に於て益々重きを加へるものと確信して居ります。それであります以上之に對するだけの力を保持する満鐵でなければならぬことは申すまでもないことであります。而して今申しました如く此の會社は 明治大帝の御遺産であります。之に傷をつけるやうな者があるならば、少くも私が總裁をして居る間は私は如何なる人に向つても闘ひます。肯きませ

ぬ。さう謂ふ様に御考へなさるならば外で何だかんだと噂があつた所で氣にする必要はありません。もつと貴下方も自負心を御持なさい。又是が傷つけられるものでも、崩されるものでもありません。」

而して私が此の末尾に於けるが如く社員を鼓舞する言葉を加へたのは、當時一種の満鐵解體論が一部に行はれて居て社員の心を或程度迄不安に陥れて居たからである。満鐵が 明治大帝の御遺産であると謂ふのは、私の信念であつて單なる修辭や形容の言葉ではないのである。此の 明治大帝の治下に於て日清、日露の兩役は滿洲の地に於て戦はれたのである。然もそれは國家の危急存亡の懸る戦役であつたのである。祖宗の國を御生命よりも大切な思召し臣民を生みの子の如く慈み給ひ、而も神の如き大御心を以て東洋の平和をのみ祈念遊ばされる 明治大帝は、此の兩度の戦役に於て如何ばかり宸襟を惱まし給ふたか拜察に餘るのである甚だ畏れ多いことであるが、私は或は其の爲に尊き御生命迄も御縮めさせ給ふたのではないかとさえ窺かに思ふことがあるのである。而して我が満鐵は此の兩役に於ける赫々たる勝利の殆んど唯一の勝利品であり、 明治天皇の御念頭を一日と雖去る事なかつた新東亞建設への唯一の足場として残されたものである。之をしも 明治天皇の御遺産と謂ひ御遺策と申上ずして何をか申すべきであらうか。

満鐵を思ふ時、 明治天皇は申す迄もないが、 明治天皇の下に粉骨碎身して日清日露の兩役に偉勳を立てて後満鐵創立の下拵へをされた二人の偉大な明治の功臣見玉大將と小村侯爵、並初代總裁として大きなスケールを以て今日の大満鐵の基礎を据えられた後藤新平伯の不滅の功績を、獨り満鐵社員と謂はず全日本國民は忘れることは断じて許さる可きでないことを信するものである。私は次に此の三人の満鐵の産みの親達の夫々の偉大な貢獻の跡を、出来るだけ簡潔を旨として

傳へ、諸君と共に之を感謝し且先人の跡を踏んで之を穢すことなからんことを誓ひ度いと思ふ。

滿鐵と三先人

日露戦争が始つて、皇軍はやつと鴨綠江を越へて安東縣の地を踏んだ許りの時である。其の時に於て當時の參謀次長兒玉大將は、早くも既に戦争に勝つて、或る地點迄東清鐵道を占領し、遂に我が有に歸したならば又歸せしめなければならぬが、其の曉には此の鐵道を根幹として如何なることをしなければならぬか、且一度日露戦争に勝つても、必ず露西亞は復讐戦を何時かは行ふであらう、それに對して如何なることをして之を防がなければならぬか、防げない場合は、如何にして第二の日露戦争に打勝つべき準備をしなければならぬかと謂ふことを御考へになつたのである。我々常人の到底夢想も出来ない所である。未だ鴨綠江を渡つた許りで、勝つか負けるかさへ判らない、是は日本人は勝つと決め込んで居たらうか、冷靜に考へて勝つか負けるか、何處迄行けるか分らない、其の時既に兒玉大將は、今申したやうな點に就て思ひを廻らされたのであつた。

而して大將の通譯官として従いて居つた上田恭輔と謂ふ人に向つて——茲で一才説明して置きますが、此の上田恭輔と謂ふ人は私の若い時からの友達で、一緒に役人をしたこともあり亦滿鐵に於て長く秘書役をしてゐた人で、なかなかの物識りである——それを臺灣總督時代から兒玉閣下は連れておるでになつたのである。此の人に向つて、一日大將が「お前は東印度會社のことを知つちよるか」と尋ねられた。そうすると物識りの上田君のことだから、「それは誰でも知つて居ります」と答へた。「そうか、そんならばあの會社の骨組を書いて置いて呉れ」と謂

はれた。上田君は、戦争が始まつた許りの時に、何を兒玉大將考へて居られるのかと訝りながら、命令であるからそれを陣中で書いて置いたと謂ふことである。是は私が上田君から直接聞いた話であるから間違ひはない。

さうすると日露戦争は御承知のやうな結果に終つて、さうして茲に發案されたものが滿鐵會社と謂ふものである。是は東印度會社に象つて、而も同時に滿蒙の當時の現状に出来るだけ當嵌めるやうに、又將來のことを考へ、且其の中には先程述べた露西亞の復讐戦に備へると謂ふ見地から編み出された案であつて、一言にして謂へば、我が兒玉大將の頭の中から出て來たのである。東印度會社を参考にされるにはされたが、要するに大將の頭から編み出されたものである。

私の承つて居る所に依ると、當時大擱みに兒玉大將は斯う考へられたと謂ふ話である。それは何うしても露西亞が復讐戦をやるであらう、劍附鐵砲だけで之に備へることは出来るものでない。荒涼たる滿蒙の野、まるで開發も何もしてない、是は何うしても東印度會社に似寄つたやうな會社の力に依つて、先づ經濟開發に邁進しなければならぬ、而して我が國の國防第一線の基礎を固めなければならぬ、而して當時の情況を顧みると、此の滿鐵を主宰する所の人は、獨り經濟開發の任に堪へる能力を有つて居るのみならず、其の經濟力を基礎として、對露對支の外交にも任するだけの人でなければならぬ、斯う考へられたと謂ふ話である。

そこで後藤新平男を初代の總裁に、之は兒玉閣下が自ら決められたのである。次いで兒玉大將は既に斯う謂ふ考へを以て滿鐵會社を造るのであるから、國家は非常な決心を以て、國家と謂ふよりも、日本政府は非常な決心を以て之に腰を入らなければならぬ。引合ふとか引合はぬとか、そんなことは考へる餘地すらもない。引合はなくてもやらなければならぬ、之は國防の基礎を造るものである。そ

こで大綱みに、毎年日本政府は五千萬圓の補助を滿鐵に向つて交付しなければならぬ、と謂ふ御考へであつたと謂ふことである。

茲で一寸私の觀る所を挿入し度い——と謂ふ譯は青年諸君に判らない當時のことに就て話をして置き度いと思ふ、私は日露戦争中にやつと外交官の玉子になつた人間である。當時の狀況も殊に玉子ながら外交の一部には携はつたので、臆氣ながら知つて居るのであるが、多くの人が普通知らないことがある。それは滿鐵がベイするなぞと思つた人は日本國中元老始め一人もなかつたと謂ふことである。それは財政通の井上侯の如き人ですら、さうは思つて居なかつたと謂ふことが事實であるらしいのである。現に日露戦争が終るか終らんかに、未だ一方ボーツマス談判を亞米利加でやつて居る最中に日本に渡つて來たハリマンとの交渉の經過などを見て肯かれるのである。此のハリマンの話は諸君にとつて興味があると思ふから簡單に述べやうと思ふ。

ハリマンは當時アメリカ有數の鐵道會社グレート、ノーザンの社長で、大きな夢を見た、それは亞米利加大陸をグレート、ノーザンで横斷して、太平洋には既にグレート、ノーザン系の汽船會社がある。此の自分の會社の汽船に乗つて日本に渡り、更に滿洲に渡つて滿鐵を握り、次いで西比利亞鐵道を全部手に入れて、而してどれか一ツ歐羅巴鐵道を其の有に歸せしめ、そして大西洋を自分の船に乗つて一周して亞米利加に歸ると謂ふ夢——私は夢を見るなら日本もそれ位の夢を見るが宜いと思つて居るが、それは兎も角として——ハリマンはそう謂ふ夢を見た。何も日本の物を取上げやうと謂ふやうなケチな考へではない、それでお嬢さんを連れて、表面は日本見物と謂ふことに名を藉りて、飄然と日本に來たのであつた。當時ハリマンが横濱のグラントホテルに著くと、我が朝野の名士は、恰も

何處かの王侯が日本を訪問したかの如き感で、恭しくグランドホテルに伺候したのである。今日そう謂ふことを謂ふと、諸君は笑ふかも知れぬが、其の頃は未だ日本は日露戦争にやつと勝つた許りで、外國と謂ふものが偉く見へた、又怖けもしたらうと思ふ、所が井上侯始め財政方面の人は怖けたのでは決してない、大喜びをした。あの鐵道を長春迄取つたが兒玉は軍人だからあゝ謂ふ算盤に合はない譯の判らないことを謂ふが、逆もやつて行けるものではない、と謂つて頭痛鉢巻であつた。そこへハリマンが金は亞米利加で出して合辨でやらうと謂つたので、渡りに船と喜んだ、天佑とでも思つたらしい。大喜びで直ぐ其の助け船(?)に乗らうとしたのである。マンマと喰はせるとか、喰はせぬとか謂ふ所か桂侯や井上侯を始め當時の政府當路者は大喜びで、此のハリマンの提案に乗つたのである。而して、時の興業銀行總裁の添田壽一氏を間に立たせて譲り渡すと謂ふ覺書を作つてハリマンに渡した。ハリマンは苟くも日本の總理大臣が同意した覺書、それを大喜びで存外樂に成功したと謂ふ調子で、之をポケットに入れて、日附を忘れたが、確かサイベリヤ號だつたかで、横濱を立つて亞米利加への歸途に就いた。中一日置いて小村全權が、ポーツマス談判を濟ませて未だ全く癒えない病軀を提げて横濱に歸り著かれたのである。而して侯は初めて此のことを知られたのである。小村侯の驚きと憤りは察するに餘りあるのであるが、私の最も畏敬する外交界の先輩であり、現に駐支大使として老軀を提げて働いて居られる本多熊太郎氏は、小村侯の秘書官として侯の最も身近に居りポーツマスにも隨行し、共に横濱に歸られたのであるが、本多大使の書かれた「小村侯と滿洲」と謂ふ一文に當時の小村侯の面目が躍如として居るので、それを此の青年諸君に是非讀んで貰ひ度いと思つて借用することゝする。

ポーツマス會議から北京條約、病軀を提げて半歳の久しきに亘れる侯の働きは誰しも知る所である。紐育出發の當時は脚も立たず、すつと病褥の儘の旅行であった。漸く横濱著船の三日前から杖をついて甲板を徐ろ歩きせられるやうになつたのだつた。

而も其の病床中から絶えず自分を呼んで幾多の意見を口述し、殆ど連日政府に電報せられた、伊藤侯を韓國に煩し、侯自身は北京に行くと言ふ譯で、伊藤侯の締結せらるべき韓國保護條約案、侯自身の商議すべき日清滿洲條約案等、何れもカナダの田舎の或る驛から政府へ電報せられた後に調印された兩條約とも大體其の案通になつてゐる。

船中では亦更に滿韓經營計畫綱要なる口述筆記をさせた、横濱著の前夜特に自分を船室に呼ばれ、

「未だ御腰も立たぬ病軀を以て歸朝を急いだのは此の書類に載せある方針を廟議で決定させ、せめて實施の礎石だけでも自分で据えて置き度いと考へたからだ、横濱上陸の曉、まあさう謂ふ事もありますまいが私の身邊に何か不慮の變でも起るやうな事が萬一にもあつたならば、私の事は、あなた顧みなくて宜しい、此の書類を御承知の通二通こしらへて貰つたが、一通は私の懐に納め、一通はあなたに預けて置きますから横濱で若し爆裂彈でも飛んだ時には、あなたは私の事に構ひなく此の書類を全ふして身を以て逃れて下さい。そして歸京の上之を山座君（當時の政務局長山座圓次郎氏）に渡して總理へ取次がれるやうにして下さい」

と命ぜられ、それから卓上の葡萄酒を一啖せられた後、

「私も一介の書生から國事に志し、幸ひに聖恩に依り自分が國家の爲に研究し

抱負したところを、責任の地位に立つて不十分ながら先づ一通り實行し得たのです、自分一個の情から謂へば是で遺憾ないとも謂へるでせう」

と述懐的に附言せられた、今にして追想するも自分は無限の感慨覚えず双行の紅涙となるのである。王臣塞々匪躬之故とは實に侯の如きをこそ謂ふのだ。

斯くて横濱に著くと幾多の出迎人中、山座局長が素早く何人よりも先に侯の船室に入られ、中からドアに鍵をかけられた、十分許りの後二人は出て來られた。山座君の面上には形容すべからざる感慨の色が現れ、侯の眉宇には平常の冷靜に似ず、何となく一種緊張味が漂ふてゐた。後で知ると、山座君が例のハリマン協定の事を侯に告げたので、侯は文字通り立上つて卓を叩き、

「そんな事があるかも知れぬと思つたから、俺は脚腰も立たぬ病氣を押して急いで歸つて來たのだ、よし、之から直ぐに其の打壊しにかゝる」

と謂はれたのであつた。さうして直に其の日の午後から大活動をされて、ハリマン協定を打壊されたのだ、滿洲が今日あるのは侯の力である。

此の本多氏の短章の中に、一代の大外交家誠忠無比の國士たる侯の不惜身命の烈々たる面目が目にあたりに見るが如く躍如として描き出されて居るではないか、宜なるかな、本多氏は此の一節に「塞々匪躬の大節」と謂ふ見出しをつけて居られるのである。

何う謂ふ行違ひか知らぬが、又何う謂ふ経緯かは知らぬが、小村全權の同意は得て居なかつた。そこで小村全權は本多氏の文章にあるやうな経緯で其の事實を知られた後の最初の閣議に於て、之に對して絶對反對を唱へられたのである。

あの謹嚴な小村侯が、時の内閣が敢て之をやると謂ふことならば、自分は遺憾ながら骸骨を乞ふて、自分の所信を國民に披瀝して懇へると謂ふことを、其の通

の言葉を使はれたか何うか知らぬが、さう謂ふ意味の激語を吐かれたと謂ふ話である。後に同僚であつた大浦兼武氏が人に向つて、あの時の小村の態度は神の如き威をさせたと言懐されたと言ふことを、私は又聞きに聞いたのである。其の時小村侯は結論として、あの時の戦ひで日本は何を得たか、殆ど得たものはない、唯一つ此の鐵道を得た丈けである。それをすら外國に渡すと謂ふならば何を以て上 陛下に應へ、何の顔せを以て下我が國民に見へんとするか、と謂ふ事を謂つて詰寄られたさうである。又聞きであるから多少間違ひはあるかも知れぬが、併しきもあつたらうと想像出来るのである。

外交に就ては、當時山縣公始め桂公は殆ど絶対に小村侯の意見を容れられたのであつた。それだけの權威を有つて居られた此の小村侯の意見に遂に桂總理大臣以下閣僚も聽いて、それちや君に委すから君の意見のやうにやつてくれと謂ふことになつた、小村侯は我に案ありとして、其の善後處置に著手されたのである。ハリマンは何にも知らないで横濱から太平洋を渡つて桑港に歸り著いた。桑港に著くと日本の領事がやつて来て、實は外務大臣から斯様な電報が參つた、貴方に傳達しろと謂ふことであると謂つてそれを渡した。其の電報は、あの覺書の趣旨は、日本政府が合辨を考慮すると謂ふことで同意したと謂ふのではない、未だ詮議中であるが何分の議は追て申上げると謂ふことであつた。驚いたのはハリマンだ、折角、今の滿鐵ですが、其の當時の露西亞から日本が譲り受けた東清鐵道の一部、即ち長春から旅大（旅順大連）までをポケットに入れたと思つたが、あれは未だ極めたのではない、あれは考慮中なんだと謂ふ電報、私は當時のハリマンの驚き、且憤慨は非常なものであつたと想像致すのである。實に日本と謂ふ國は不信な國だと思つたらう。そして紐育に著くと興銀總裁添田壽一氏から長い二度

目の電報を接手した。確か其の後に郵便も追送されたかに記憶するが、結論は要するに小便をして了つたと謂ふことである。

茲迄話して來ると、此の満鐵と謂ふものを夢みて生み出したものは、我が兒王大將である。併し小村全權がポーツマスから歸られた頃はまだ出産はしてゐなかつた。未だ母親の胎内にあつて危く流産せんとしてたのだ。少くとも生れたら人にやること或はドクトル、ハリマンの巧妙なる手術によつて、中途から混血兒に變せしめられて、出産せんとしてたと謂ふ方が當つてるかも知れない、それを流産もさせず、混血兒にもさせず、純血なる大和男の子として安産させ、且生れた後他家に養子にも呉れずに濟むやうに手配をした者が、我が小村侯であつた。若し日本に一人の小村壽太郎と謂ふ人が生れて居なかつたならば、果して今日の満鐵はあつたらうか？ 私は此の経緯を追想する毎にいつも背汗を覺ゆるのである。満洲事變なんて謂ふものもなかつたらう、満鐵を擁護する譯には行かない。如何に軍人でもない權益は擁護出来ないのである。我が軍人と雖も、まさか亞米利加の權益の爲に戦つて死にはすまい。

さう謂ふやうに考へると實に危機一發であつたのだ。此の一史實を追懐しても我が國は實に神國であると熟々感ぜられる。何時もこう謂ふ國の危機又は畏いが皇室の危機と謂ふやうな時には、和氣清麿みたやうな人が出る。此の危機に小村壽太郎と謂ふ人が出て來た。假りに小村侯が一生無能であつたとしても、唯此の一事だけで不朽の名を竹帛に垂れるに充分だと信ずる。小村侯は實に此の爲に日本に生れて來られたのであるとさへ謂へやう。

斯くして、辛うじて我が日本は二十億の國帑を費し、十萬の英靈を犠牲とし、實に國を賭して獲た殆ど唯一のものを掌中に收めんとしたハリマンの企圖を粉碎

することを得たのである。それは日本として殆ど食言に等しい高い不名譽の代價を拂はざるを得なかつたのであるが、その代りに、日本は其の生命線滿蒙の確保に向つて、漸次進展し得たのであつて、小村侯のこの一舉は、實に、大陸に於ける日本の運命を決したものであることは申す迄もないことであるが、私を以て之を觀れば此の一舉は更に米國をも救つたのである。何故米國をも救つたと謂ふのであるか、それは日米戦争をも之に依つて防ぎ得たからである。米國が利權の爲にアジアで闘ふことは、それは邪道に墮することであつて、即ちこの邪道に陥る危険から、米國は小村侯の爲に救はれた結果となつたのである。苟も清教徒の血が米國の何處かに尙流れてゐるなら、米國たるもの三十餘年の過去を追憶し、小村侯の此の舉とその後の成行を見て感謝すべきであらう。

米國人から見ると、日本人がハリマンを裏切つたと謂ふ感が起らぬでもなからうが、併し少しく反省するならば、日本と戦はずに濟んだと謂ふことは、一利權と比較にならぬ程大きな福祉であつたと悟り得るであらうことを私は疑はぬのである。若、當時ハリマンが成功して、米國人が滿洲に乗り込み、日米共同經營でも行はれたとすれば、その後如何になり行つたであらうか、當時に於ける日米間の資本、技術、人的要素等の差から考へて見て、米人が必ずや勢力を占めたであらうし、又彼等の無邪氣な傍若無人の氣質から考へて、其の勢は非常なものとなつたであらうことは想像に難くない。そこで滿洲は事實上重要な米國の植民地化した、若くは化せんとしたであらうことも想像に難くはあるまい。斯かる事態が招來された時に、日本人は果して黙して之を座視し得たであらうか、私は否と答ふるに躊躇しない、露西亞の滿洲占據は排撃するが、米國のそれは許すと謂ふ事があり得ようか。

我が生命線たる満洲に横暴を働く國は、其の何國たるを問はず、日本は等しく排撃するのである。それが露であらうが、米であらうが、英であらうが、結局は之と戦ひ之を斥くるにきまつてゐる。何人が如何やうに意識しやうが、さうなるのが運命であり、歴史的必然であるのである。即ち小村侯の一舉が圖らずも日米戦争を豫防したのであつて小村侯は實に米國民からも感謝されてもよいと思ふ。再び話は兒玉大將に歸へるが、兒玉大將の様な考へであり、そして前述の如く、當時我が朝野を舉げて此の會社が算盤にのると思つた人は、恐らく一人もなると謂ふ状態であつた。爲に政府は緊急勅令を出して六分の配當保證をしたのであるが、一度此の勅令が出ると、非常な勢で應募者が出たのである。斯様にして六分の配當保證が、満鐵創立に當つてなされた一事を見ても、私の前きに述べた兒玉大將のお考への一端は窺ふことが出來やうと思ふ。

満鐵の國策的意義

そこで考へて見ると、我々ははつきりと満鐵に就て把握して置かなければならない觀念がある。それは満鐵と謂ふものは、前來申述べたやうな譯で出來上つたものであつて、此の考へ方に誤りが無いとするならば、満鐵が引き合ふ、引き合はないと謂ふことは問題にならなくなるのである。勿論出來るだけ満鐵を擔當して居る人達は算盤がとれるやうに、引き合ふやうに、政府に迷惑を掛けないで尙且満鐵使命を遂行し得るやうに心掛け、努力を致さなければならぬのである。が、窮極する所満鐵は唯普通の算盤に乗る經濟機關として作つたものではない。實は我が國の大陸に於ける國防第一線の基礎を作る、と謂つたら語弊があるかも知れぬが、少なくともそれを強化する爲に、出來上つたものなのである。それは

當時世間の聞へが悪いから、純然たる經濟機關なりと謂つて居たが、實は此の謂ひ分は當時から世界流行のヒボクリシー（偽善）のお付合ひをしたまでで、それを又信する程のお人好しは世界中何處にも居なかつたらうと思ふ。併し日本には時々あつたやうだ。無論一應は經濟機關に相違ない。そして滿鐵の志す所は經濟開發を主とするものではある。滿鐵が平常何も直接軍事に與る譯のものでもないが、併し其の經濟開發も大きく考ふれば、實に我が國防第一線の基礎を造り、若は之を強化するにあつたのである。苟くも茲に滿鐵の主要使命があるのならば、其の使命を果すに就いて若し損が立つと謂ふならばそれは己むを得ない。而して之に對して其の使命を果すべく眞黒になつて之を激勵し、腰を入れるものは我が國民全部でなければならぬ筈だ。我が國の政府は固より、其の損位之を填補せねばならぬものと私は固く信じて居る者である。私は先に代議士をしてた時代、議會で當時の拓相松田源治君に此の點に就て質問したことがあります。一體近來滿鐵が算盤に合ふとか、合はぬとか謂つて滿鐵幹部も頭痛鉢巻、政府も氣にして居られるやうだが、損がいくならば滿鐵を止めて滿蒙から日本人は徹退するののかと謂ふ意味のことを質問したのであります。謂ひ抜けるといふ語弊がありますが、議會では政府の諸大臣は何時も要領を得ぬ答辯をすることを能事として居る傾きがあります。唯一言イエスかノー即ち然るか然らざるかの返事が欲しいと謂つて追求致しましたところ、損がいつても斷じて引き揚げませぬと謂ふ明答を得ませんでした。私は非常に欣快に存すると謂ふて置きましたことがあります。私から見ると此の點を多くの人がはつきりしないからして、色々な惑ひが生ずる、愚論が発生するのであります。起源の話からして座談的でありますので知らず知らず已に私のメモに書いて來た項目中「滿鐵の使命」と謂ふものに就ても之で話が終りま

した。偕て其の後何う謂ふ風に此の使命が變つたか、又變つて居らぬかと謂ふことを互ひに検討して見たい。

先程申述べましたやうに滿鐵の主要使命と謂ふものは何としても滿蒙の經濟開發を促進するにあるのであります。併しながら同時に環境に顧みて、苟くもそれだけのことを大陸で行ふ所の滿鐵なり、滿鐵總裁は、其の經濟力の上に立つて支那も始終注視して居なければならぬ、露西亞も注視して居なければならぬ。創業の當時滿鐵の理事は屢々露都に出かけて行つたのである。私も外交官として當時露都に駐在して居たが、能く滿鐵理事は露都に来て露西亞側と折衝を行つて居た。初代總裁後藤伯は滿鐵總裁の任に就くや直ちに當時の清國の首都である北京に乗り込まれた。又滿蒙の現地に於いても、僅か七百哩の鐵道線路の外は、所々に附屬地に市街が出来て居たが、それ以外は日本から謂へば、皆直接力の及ばない外國領土であつたのである。さうしてそれは我々よりもズット慳巧な支那人といふものが統治して居た。滿鐵初代から滿洲事變迄の滿鐵當局者、又社員が、此の現場に於ける支那側との交渉、之との關ひには實に容易ならぬ辛酸を嘗めさせられたのである。斯ふ謂ふ外交的な折衝の如きことも、亦當時は滿鐵使命の一部を爲して居つたのである。併しそれが滿洲事變に因て劃期的時代が作られた。今日は最早滿鐵として昔日程に支那側（今日は滿洲國側）との關係、露西亞との關係を直接考慮する必要はなくなつた。

尤もそんな考慮は全然不要とは謂へぬ。唯程度に非常の差が生じたと謂ふのである。今日でも滿鐵の幹部は須く單り支那だけではない、露西亞だけではない、歐米の形勢も睨んで居つて、さうして此の地での自分達の仕事を手加減をし、決定遂行して行かなければならないものであると私は思つて居る。

滿蒙放棄論を堂々と演説したといふ始末、それで世間も別に不思議とも思はなかつた。其の程度迄國民を擧げて自分等の拂つた犠牲を忘れ、又滿蒙が我が國に取つて如何なる交渉を持つかと謂ふことをも忘れて來たのである。「滿蒙は我が國の生命線である」と謂ふ意義と、滿蒙の爲に拂つた我が國の巨大なる犠牲に就て國民に懇へやうと思つて、私は行脚までして見たが耳を傾ける者は多くはなかつた。之に反して支那側は此の日本の態度を觀て日に月に非常に増長して來て、遂に我々は堪へることが出来なくなつて來た。滿洲事變前は此の租借地國際公法學者、殊に日本の公法學者に謂はせると、九十九箇年の租借と謂ふことは領土の割讓である、即ち日本の領土の一部であると謂ふことになるのだが、現に見るが如く關東州廳あり、滿鐵本社が在る所であるに拘らず―當時は關東軍司令部も亦旅順に在つた―此の旅順や大連に居る日本人でさへ浮足になつた。或は日本に引揚げなければならぬはすまいかと謂ふ様な氣分になつて來たのである―今謂ふと嘘のやうに聞えるが、南滿洲、即ち露西亞との協定に依て我が勢力範圍であるとされ、事實上世界も亦左様に認めてた南滿洲の中心である奉天に於てすら白晝小學校に通ふ我が兒童は屢々擲られたり、石を投げられたり、非道い目に遭はされた。青年諸君は今後渡滿したら、或は現に滿洲にあつて大きな顔をして歩くことゝ思ふが、當時は日本人の女、子供等は白晝ですら安心して奉天の街上を歩くことが出来なかつたのだ。それでも日本の政府も國民も一向無關心であつた。彼處にころ／＼して居るのは何れ滿ごろだ、なかに滿洲は放棄するが宜いと謂ふ氣分であるで無關心であつた。幾ら土足で踏んでも蹴つても、日本人は最早悲鳴も揚げる事が出来んぞ、是ならば追ひ出すことが出来るぞと謂ふ錯覺に掛つたのが張學良であつた。併しそれは當時の日本の態度よりすれば無理からぬ事であ

つて、實は張學良や一般支那人が悪いのではない、それは日本人がかゝる錯覺に彼等を陥らしたのである。踏んでも蹴つても日本人は悲鳴さへ上げ切らぬ。東京では自ら進んで放棄論さへ高調して来る。叩けば叩く程引つ込み且退却する。さうして議會で時の外相は、滿蒙に於て日本に對する空氣は俺が外相になつてから餘程改善されたと仰言る。女、子供までやられても黙つて引つ込んでることを平穩無事と心得て、空氣が好くなつたと觀たらしい。

私はそれは觀察が間違つて居る。必ず近い將來に於て大爆發を致しますと當時言明して置いたが、間もなく爆發に至つた。即ち滿洲事變が勃發したのである。日本朝野の大部分が餘りにも滿蒙に無關心であつた爲に、最初はその爆發の意味が全く判らなかつたのである。最初は軍部以外の者は錯覺にかゝつて居た。始めは出先の若い軍人共が輕率に我武者羅の事をやつた、是は國を誤まるものだと謂ふのが、恐らく我が國の元老重臣以下内閣諸公の大多數、東京邊のインテリ大部分の感想であつたらうと思ふ。それは私は記録を以てしても立證して見せることが出来る。最初の二週間位はインテリも政府も附いて來ない、全く錯覺にかゝつて居た。事の真相は在滿二十萬の同胞が其の數年前からして已に憤激の極に達して居つたので、唯本國の國民も政府も冷淡であり、理解すらしないので、其の憤激を具體化する方法を發見するに苦しんで居たのである。そして極度に隱忍してたのである。然るに愈々以て支那側の壓迫に堪えられなくなつて來た、もう此の儘で行つたならば退却し滿蒙を引き拂ふより外はない。退くのか進むのか、本國に憩えても所詮駄目だ、併し退くことは出來ない。然らば起つて撃つの外ない、と謂ふ當時在滿二十萬の同胞憤激の雰圍氣を代表して、已むを得ず決然として劍を抜いて起つたのが我が關東軍であつたのだ。こう判つて居たら、日本政府

も、インテリも最初から些の狐疑逡巡もなく、關東軍の行動を双手を舉げて支持したであらう。然し悲しいことには目と鼻の先の滿洲の事態でありながら、無關心なりし爲其の真相が判らなかつたのである。私は昭和四年の八月に滿鐵副總裁を罷めて東京に歸つたのであるが、昂々溪迄鐵道を延べて置いたが、實の處支那側との交渉に於て恐らく私程隱忍した者はあるまいと信じて居るが、其の私ですら當時已に旋毛を曲げて歸つたのである。其の後滿鐵社員中、心ある者は東京に私を尋ねて来て「先生もう駄目です拳固しかありません」と何れも異口同音に憤慨してたのである。それが我が政府の者やインテリには耳に這入らなかつた。支那側の横暴は實に言語に絶して居た。在滿二十萬の同胞は已に事變の數年前から憤慨の極に達して居たのに、それを政府も民間もまるで我不關焉であつた。かゝる際に突如として事變が爆發したのだ。常々今申した様に無關心だつたので驚いた。皆目譯が判らない、そして面喰つた。だから出先の若い軍人等が無茶なことをしたと誤認したのである。爆發當時、少くとも東京邊のインテリの間のこれが定論であつたのだ。それはさうではないのだと謂つて、微力ながら私は諷しにかかつて見たが、始めの二週間位は多く耳を藉さなかつたと謂ふ有様であつた。是は話が少し細かくなつたが、當時の遺憾な印象が今尙私の腦裡に焼印の様に焼き付けられてるのでつい愚痴つたのであります。

今迄話したところで滿鐵の使命がどういふ風に變化して來たかと謂ふことは略判つたこと、思ふが、前には僅か七百哩の鐵道沿線、しかも極めて狭小な附屬地に押込められ、日露戦後日を経るに従つて活動範圍を縮められたのである。日本人といふ者は實に好人物で、十年も経つたら日露戦争の犠牲を忘れ、支那人が横暴なことをしてもそれは仕方がないと諦めるやうになつた。そして歐米殊に英米

本位の平和論とやらにかぶれて外國に向つて我が利權を放棄し、我が權利を讓つて、一步一步退くことが外交の要訣でもあるかの様に考へ、且振舞ひ出したのである。それは外務省だけのことではない。日本、殊に東京邊の有識者の大部分がさう考へたのだ。其の頃の外務省は唯其の雰囲気我代表したまでである、それを反映したに過ぎないのだ。さう謂ふ傾向で以て日に月に、ズン／＼南滿洲でも鐵道附屬地に蟄息せしめられて手も足も出ない有様となつた。従つて使ふにも資金の使ひ様がなかつたのである。

それに加へて、南滿洲に關する限りは、と謂つても、浦鹽斯徳が北にはあるけれども、それを外にして營口なんかは小さい出入港でしかないから、南滿の産物は固より北滿の荷物も、かなり滿鐵を通らなければ滿洲外に搬出することが出来ない始末であるから、滿鐵は謂はゞ形勝の地を占めて居り、或る程度まで滿洲の運輸上實に獨占事業であつたのであるから、運賃が高くても荷主は泣寝入りせざるを得なかつた。即ち滿鐵に荷物を持つて來るの外なかつた。それで収入は豊か（ヘマナ事をした或る短期間の外）で帳尻も心配はなかつた。茲に於てか資金難と謂ふことはあり得なかつたのである。私なんか二十一年前初めて滿鐵重役となつた時、運賃を新天地開發の爲に下げろと謂つて議論をしたことがあるが、そんなことは通らなかつた。私としては少し謂ひ苦しいことであるが、少し酷評をすれば、當時の滿鐵は獨占事業を幸ひ高い運賃を取つて好い氣分で晝寝をして居たと謂はれても一寸辯解の辭はない。前滿鐵總裁が斯ふいふことを公けに謂ふのは怪しからぬかも知れませぬが、それは本當のことであつたのだ。併し當時朝野を擧げて滿蒙の重大性と滿鐵の使命を忘れ、歴代内閣の如きは滿蒙や滿鐵どころか、内に於て一生懸命内閣の壽命を保たすに唯専念して居た。そして政黨

の如きは唯政權を取るに浮身を脩し、他を外を顧みる邊さへなかつたやうな譯であつたので、滿鐵としては此の自己保全策しか實はなかつたのだとも謂へるであらう。

然るに昭和六年の秋の滿洲事變以後、滿鐵と一般邦人の活動の範圍が何十何百倍にも擴がつて來て、如何なる事でも自由に出来るやうになつて來た。そこへもつて來て北支經濟工作まで飛び出して來たと謂ふ次第で、滿鐵の經濟的活動の範圍と種類が愈々増大して來たのである。それで資金がいくらあつても多々益々辨すで、金はいくらあつても追つ附かない程事業がやれる様になつて來た。茲で一寸注意して置くが、私は昭和十年總裁就任の際ベイせぬことはやらぬと言明致した。そして在任中此の信條を守り續けたつもりだ。併し一例を謂へば、現に國防上、經濟開發上滿洲殊に北滿にどしく、延ばして行つた新線の如き、未開の地に敷設

する鐵道がどれもこれも皆敷設した翌年からベイすると謂ふことを期待した人はなかつたに違ひない。窮極は無論ベイする。若し我々が此の大陸に於て相當な抱負を有つて居るならば、少くとも十年位の眼で看透しを附けて、そして少しは根氣と辛抱心を持たねばならぬと思ふ。近慾では駄目だ、眼前の損得で動く考へなら、大和民族は明日滿蒙からも北支からも手を引いて、一切蔣介石に委せるがよろしい。その代り後は日本の本據が危機に瀕するのだ。果してそれでよろしいか？ 現に日本の直面せる此の環境、對支對歐米の關係、我々は一日でも晝寢をして居る譯に行かないではないか。さあ金が要る、仲々要る。結局活動が出来るやうになつたので茲に資金難といふものが起つて來たのだ。之は當然過ぎる程當然のことではないか、否當然どころではない。斯くの如く我が國の存立を全ふする爲に、又我が民族發展の爲に、將又東亞全局保全といふ一大國是の實現の爲に、

廣範圍に亘つて思ふ儘に躍進することが出来る、それは幾ら金があつても足らぬといふ程に出来る様になしたことは、實はお互日本人として慶賀すべきことではないか。先には金を使はうにも使ふことが出来なかつたが、今は幾らでも使へるのだ。實に愉快ではないか、國家の爲に慶すべきではないか、是が兒玉大將の夢である。後藤新平男が兒玉大將に選拔せられて初代の滿鐵總裁となり、其の夢の輪郭を引きに掛られたのであるが、十年も経たぬ内に我が國民の多くは無關心となり、支那人は恩を忘れて跳梁し、終には滿洲から將に追出されん形勢となつて、事業も進むるに由なく、従つて金も要らなかつた。其の方が今より宜いと謂ふ人が若しありとすれば日本人ではない。滿鐵は飯事をしては居らぬ、其の大使命に向つて全社員を擧げて眞劍に突進して居るのである。幾人の日本人旅客や觀光者が北滿の鐵道を何處迄乗つて歩いたか知らぬが、北滿の鐵道線路の下には幾多の將兵幾多の滿鐵社員の屍が横たわつて居るのである。其の考を有たずに北滿の鐵道に乗つて歩く日本人があれば罰が當る、此のことを國民は知つてくれなければならぬ。今や幸ひに我々が滿鐵創設の使命中の重要部分を稍意の儘に果すこと出来る環境に立ち至つたのであつて、此の時一刻も其の使命遂行を逡巡することは出来ないであります。それには人も要るが金も要るものである。

思はずも青年諸君に語ると謂ふよりも、財界人にでも訴へる様な調子になつてしまつたが、私は要するに、滿鐵の主たる使命は經濟國策の遂行にあることは疑ひないとしても、其の設立の動機や、経緯や、又創立の準備工作や、創設の實際に當られた先輩達の意圖に照らしても、金錢的打算や損得を度外視して國策遂行に任すべきものであり、國民亦全力を擧げて之を後援すべきものであることを謂はんとしたのである。

順序が少し前後したが、實は丁度適當な場所であると考へるので、茲に初代滿鐵總裁後藤新平伯のこと——滿鐵の傳統や滿鐵社員の誇である所謂「滿鐵魂」、即ち滿鐵精神の源泉を知る爲にも逸してはならぬ、後藤伯（當時男爵）の就任前後の事情に就て語ることにする。それには私は新しく稿を起すよりも、自分の舊著「滿鐵を語る」の中から同伯に關する部分を摘載するのが最もよい方法である。考へる。之は何も私が勞を惜しむと謂ふ意味ではなく、其の部分が「滿鐵を語る」の中でも相當重要な箇所であり、且自分で言ふと可笑いが相當に迫力を有つた表現でもあると考へるからである。唯行文が稍々文章めいて居るので、此の本全體としての調子を少し許り破る虞れがあり、青年諸君の或人達に取つては字句も少難解ではないかと思ふが、單り滿鐵社員のみではなく、大陸に志す青年諸君なべての憲章とも謂ふべき、後藤伯の「情由書」が素々漢文調の名文であるのだから、それは已むを得ないとも謂ひ得るであらう。若い人達は國文の勉強をするつもりで読んで下さればいゝと思ふ。

以下一九二頁迄は全部「滿鐵を語る」からの轉載である。

明治三十九年十一月十三日、當時の臺灣民政長官たりし後藤新平男が、滿鐵總裁就任を受諾する迄には、曩に兒玉將軍のところで一寸述べたが次の如き事情があつたのである。漸く滿洲鐵道の經營を決定した政府は其の首腦者の選任につき又一つの難關に逢著した。自選他選の候補者は數名に上り、孰れも當時有數の新進人物であつたが、兒玉設立委員長は後藤男に白羽の矢をたて、又日本の朝野も後藤ならばとの輿望もあり、さては、臺灣では放せぬと謂ふ後藤長官に招電を發したのである。上京した後藤男は、西園寺首相、寺内陸相等から就任方を交渉さ

れたが極力固辭して受けず、兒玉參謀總長また心情を吐露して説破大いに努めた
が容易に承知しない。後藤男の主張するところは「滿鐵經營の中心は鐵道ならざ
るべからず、然るに其の經營の大任に當るべき會社統理の中心點明かならず、一
方に關東都督の監督を受くると共に、他方に於ては外務大臣の指揮に俟たざるべ
からざるが如きは、到底滿鐵總裁として植民地經營の大任を全うする能はず」と
謂ふにあつた。然るに、山縣公等の説得に依り遂に「滿鐵總裁は、關東都督の下
に立つと同時に都督府顧問として外務大臣監督の下に立ち、都督府行政の一切を
與り聽くべし」との條件で就任を肯ずるに至つた。此の事を知己兒玉將軍に其の
毫去前告げなかつた事實を、終生の恨事であると後藤伯は常に言つて居られた。

此の官制は現在、滿鐵總裁が關東軍顧問を兼ねるのと相似て居るが、後藤總裁
去つて後の滿洲が、事變直前迄或は三頭或は四頭政治と謂はれ、事毎に障礙のあ
つた實際に想到する時、就任頭初に於て夙くも來るべき弊害を洞察し、摩擦を未然
に防止して立つた後藤總裁の識量は推賞さるべきであらう。そして就任承諾後、
八月二十二日要路の回覽に供した、「就誠情由書」は、詳さに此の間の事情を語つ
て居る。此の後藤伯（當時男）の情由書なるものは言々肺腑を衝き、所論肯綮
に中り、伯が滿鐵及滿洲經營に關する抱負經綸は固より、臺灣、朝鮮の問題に及
び、吾が殖民政策を論じ、當時の外交に就き痛烈なる直言を加ふる等、立論堂々、
大器後藤伯の面目躍如たるものがある。

而も此の間に、西園寺首相初め、原内相、林外相、寺内陸相、兒玉參謀總長、
佐久間臺灣總督、さては山縣元帥に至る迄總出場の状態で、單に後藤男一身の進
退問題の如きでは全然なく、吾滿洲の經營の中心たる滿鐵の經營を如何にすべき
かに就き、抱負、熱意に於て要路と大分の隔りがあり、且官制上二重監督下に立

つに於ては植民地經營の大任果し難しと謂ふのであつた。

之は、滿洲及滿鐵にとつては實に重要な歴史的記録であり、滿鐵經營の方針となつたものであるから、其の滿洲に關係ある要點だけを抽出して記録的に述べて見る。實は滿鐵創立前後の事情、滿洲經營に對する往時の吾國の意向、ポーツマス條約から小村侯、ハリマン等を加へて、日本の「滿洲大陸經營」を劇化したら、素晴らしいものが出來ると思ふ次第である。

明治三十九年七月二十二日、後藤臺灣民政長官（當時男爵）招電に依り入京、直に原内相訪問、原内相より西園寺首相に會見すべしと謂はれ首相の許に至る。西園寺首相「君を招したのは外でもない。滿鐵總裁に就任してくれ給へ」後藤男「就任如何を決定する前に閣下に御伺ひ致しますが、滿洲鐵道經營の全局はどなたの監督に屬し、統理の中心點は何處にあるので御座居ませう」

首相「監督權は言ふ迄もなく關東都督にあるが、中央政府の責任者は外務大臣である」

此の首相の言を聞いて後藤男は考へた。「滿洲經營は國の重事なり、其の政策上宜しく先づ根柢を一定し、專實の寄すべき所を明にして然る後之が經營を言ふべし、今政府の立意平緩なること此の如く別に構按を費さるゝ所なきものに似たり、是不肖材力の獨り能く堪ふる處に非ざるなり」（原文のまゝ）

本文に明瞭なるが如く後藤男は先づ首相との會見に於て、滿洲經營と謂ふ重要國策を遂行するのに、政策の根柢も定まらず、責任の歸趨も明瞭にしないで置いて、經營を云々するとは滑稽である。今政府が、滿洲經營に對する理解と關心の程度は、冷淡不熱心なもので、別に深い考慮を拂つて居る様子は見えぬ。此んな事では自分の様な者のやり遂げらるゝ仕事ではない。此處で拒絶の意思を固めた

心の動きが看取される。

後藤男「鐵道總裁の任務は重大です。其の適任者が容易に見つからないので閣下も苦心して居られることは存じて居ます。私の様な者は從來商會社の仕事には経験ありませんし、又滿洲鐵道の事業内容、經營の方針等に就ても詳しくは聽いて居りません。彼此と想ひ合せて見ますと、總裁の椅子は私には不適任です。どうか御免を蒙り度いと思ひます」

首相「滿洲經營の人材を必要とするのは刻下の急務で、あれや之やと銓衡を遅らす譯には行かぬ状態にある。君は臺灣の經營では既に幾多の經驗を有つても居るし、今自分が此の重大時機に君を煩して、再び滿洲の難局を切り抜け、新後面を開拓して貰ひたいと希望するのは、自分の見る處では君の努力に依つて、臺灣の方は既に成功を遂げたと思つて居るからである」

ここから滔々數千言、後藤男の臺灣統治に關する意見が述べられ、現況の如きを以つて統治の成功と爲すことの謬れるを具體的、實際的に列擧し且將來の統臺方針に就て所信を披瀝して居るが、それは除く。そして臺灣統治の爲にも現職を離れ難いことを述べて居る。そこで首相は「まあそれはさうだらうが滿鐵の方は再考して呉れ給へ、更に此の問題で兒玉參謀總長に會つてくれ給へ」と謂ふ話になり、同日午後兒玉參謀長と會見

參謀總長「首相は何と言はれたかね」

後藤男「シキリニ私の様な者に滿鐵總裁ははまり役だから出て呉れとの御話でしたので辭退しましたが、未だ御許しがありません、其の上總長閣下に會ふ様との御話で伺ひました。自分の考へでは首相は御自分で裁斷すべきものを讓つて、あなたの口を藉りて私を説服させるつもりではないかと存じますが、私の

辭退するのは不適任だと思ふ以外他意のある譯ではありませんから、是非辭退を御認め下さい」

總長「自分の今の地位は、君の爲に滿鐵就職を勧めるのに適して居らないことは首相閣下も知つて居られる。首相は君を説き滿鐵從來の行懸りに就ては、自分が話し、佐久間總督から君を譲つて貰ふ交渉は山縣元帥がなされる筈である。西園寺首相が君との直接面談で君を説破しなかつたのは、事を慎重に運ぶ爲だつたと思ふ」

一應話を切つて置いてから、さて勸めない筈の兒玉將軍は語氣を強めて言ふのである。

總長「もと／＼滿洲鐵道の經營に就ては君が其の主唱者ではなかつたかね。昨年、既に手紙で種々と意見を聴かせてくれたのも君だつたし、其の後わざわざ／＼滿洲軍總參謀部迄訪ねて来てくれて、懇々と其の事に就て話したのも君だつたと思ふ。其の君が此の機に於て辭退する謂はれがないと思ふ」

と後藤男從來の意見を逆用して、ノツピキならじとせめ立てる。

總長「自分が軍職に在り乍ら、滿洲鐵道調査委員長となり、次いで鐵道會社創立委員長となると、色々と世間は取沙汰し物議を醸したが、時局の重大と其の必要から、敢然自説を主張し、凡ゆる困難を排して裁可を得たのである。其の理由は……（斯く斯くと前掲兒玉將軍のところで述べた大滿洲經營の方針が之から續く）世に滿洲問題に就てはいろ／＼と説をなす者も多いが、著實周密な經營方針を語るものは君より他には見當らぬ。自分は全く君と同意見であるから、帝國將來の政策としやうと思つて、自ら世間の物議を排して此處まで來たのである、自分が非難を顧みず滿洲鐵道創立委員長となつたのは、自分にも聊

か自信があつたからではあるが、一面に又君の意見が自分を驅り立て、此の位置に就かせたのでもある。

君が今、政府の滿洲經營策に就て殖民政策の無中心を咎め、都督府の薄力を嫌ひ、独自の見地に立ち、滿洲の經營があんな事ならば自分が乗り出して力を入れる迄の仕事ではない、と謂ふならば、他の人々は君の道理のある言分に肯くであらうが、自分としては、斷じて君の志と節操と謂ふ點で承知出來ぬ。我輩辱くも聖朝に周旋し、事情を知つて居るものが難局なりと謂ふ理由で回避を許すとすれば、君の平生を辱しむるものではないか。自分は近來厭世の念に堪へず夢寐にも勇退したいと考へて居るのであるが、そんな時機ではないと思ふから、進んで難局に當り、又滿洲問題の適任者を求めて居るのである。今日の日本では大臣たるの人材を得るのは易いが、滿洲問題の爲に一人の人材を得ることは實に困難である。今總ての者が一致して君が適任だと推薦して居る。君が今の時勢を理解して居るなら進んで之に當らなければならぬ。自分は唯鐵道會社の創立をやるだけで、殖民政策の中心に到つては君が起つて之が實踐指導力となれ。自分は君と同意見だから當局に提議したのである。首相閣下も山縣元帥閣下も異議はない。若し滿洲經營上種々の問題があつたら自分は必ず君を援助する。自分は斷じて從來の關係から君を使はうとするのではない。君が若し邦家の爲に進んで此の局に當らうと謂ふならば、自分も亦君の必要に應じて甘んじて自ら君に利用されるのを厭はない」

之程切々たる勸告も亦後藤男を動かし得なかつた。

參謀總長「君が平生事に臨んで大事を取るのには、自分は固から知つて居る。而も、君が大事をとるからこそ良い成績を收め得ることも同時に知つて居る。此の大

事な時に力が足りぬとか、自信がないと謂ふ様な口實を設けて責任を回避することは、もう聞きたくもない」

後藤男「閣下は私の立場を察して居られぬ。人間には出づるも退くも時があり、信するも疑ふも亦相手によりけりです。唯過去の成果とか経験とかを引用して、將來を強ひられることは私も實に迷惑致します。日本にも有識者が多いのですから、其の人々が研究し有能の人物を選任し、其の人が萬一うまく行かぬことがあつたら私が出ませう」

參謀總長「今日の時勢は臺灣占領當時とは違ふ。前憂後患交々臻る時ではないか。一日も愚圖々々して居る時ではない。衆望が君に集まつて居るのであるから、君たるもの成敗を問はず斃れて然る後已むべきではないか」

後藤男はこゝで、參謀總長は初めの程は自分は人事問題に關係せぬと謂ふ様な口吻であつたが、之では首相に代つてまさに自分を説破されるのぢやないかと書いて居る。次いで兒玉將軍から山縣元帥の處へ行く様にと謂はれて往訪、山縣元帥からも就任方を説かれた。―そして此の夜、兒玉參謀總長は薨去された、と後藤男は切々の言をつらねて居る。

佐久間總督からも滿洲が君を要すること、臺灣以上ならば、此方の便宜の爲みに前約を固執しないからよく考へる様にとの返電。二十四日西園寺公と再會見の上辭職を固執した。

首相「自分は君が部下に良い人を得ることが困難だとか、君が事に臨んで憶病だとかの理由で辭意を懐くことには賛成出来ぬ。所謂殖民政策無中心の疑問の様なもの、それだからこそ滿洲問題に君を必要とするのではないか。極端に言ふと君がどうしても此の任を避けたいと思ふならば、色々理由を並べるのに

困しむことはあるまい。然し自分は此の國家の一大事時機に面し、此の重任には君が立つて貰ひたいと思ひ、君が平生の義侠に訴へ、必ず承知して呉れると思ふ以外、外の事は考へても居ないのである」

二十五日には山縣元帥に會見、山縣元帥は、滿洲問題に君が適するや否やと謂ふ様な問題に就ては、もう君と話す必要はない。君に聞きたいのは君の去つた後の臺灣政務の處置である。と謂ふ様な譯で、首相も元帥も殖民政策の中心を後藤男に置き、最早や推薦を辭するに由なく、官制の許す範圍で便宜の途を開くこととなり、更に寺内陸相の要望もあつて後藤男も七月三十一日就職を承諾したのであつた。

之程にして就任したのであるから、其の抱負も並々ではなかつた。其の一部を抜いて見ると、

「―若し官僚政治の流弊此の間に滲入し、殖民政策上無經驗の徒、此の權宜の時局を解せず、濫りに法律官制の具文に牽かれ、枝葉の理論に走り、實務を口舌の間に誤るが如きことあるに至らんか、之寔に滿洲經營の大患なり、今日の姑息政策は、全く事務の如何ともすべからざる處に出てたるものにして、東印度會社の故態を滿洲に再演し得べきものに非ざることは、固より某の了知する處なれども、其の然るが爲に特に當局に望むに、深く此の已むを得ざるの事情を諒し、隱忍堅志以て有終の美を責めらるべきの識度を以てせざることを得ず。某不肖の材を以て俄かに鐵道總裁の選を受けんと欲するに至れるも、斷じて苟且好事の粗心に出でたるに非ざることは、幸に上來敍する處諸公と往復談論の主旨を拵みて、至意を言外に省せらるべし。今や某は諸公の寄屬に感發し、一身を齎して滿洲經營問題の犠牲に供せざるべからざるを自認せり」

「滿韓の經營は、對清關係に於て重

大の利害を有すべきが故に、外務大臣閣下及駐清公使に望むに、篤く某が爲に謀りて便宜を失はしめざらんことを以てせざるを得ず」「所謂殖民政策にして、果して紙上の空論ならば即ち止む、苟も國家重大の事實問題たるより以上は、空理に拘はり議論に東ねられ、觸處相掣累して以て大局を誤つこと、世間往々見る處の外交事弊の如くなるべからず……若し直言することを許さば、從來外務省の殖民政策に於けるや、空疎不振實に久しと謂ふべし」(下略)

尙同三十九年十一月二十六日神田基督教青年會館に於て開かれた創立總會の席上出席株主五千百四十六名に對し次の如く述べて居る。

「本社の事業たるや、其の鐵道のみ就て之を言ふも、關係は頗る廣大である。延長は僅かに七百哩に過ぎないが、世界商業の大動脈の樞要部を占め、東洋否世界實業の便宜に供し汎く内外人の役に立てねばならぬ。

故に本社の鐵道經營方針は、常に我政府並株主各位の意旨に副ふ許りでなく、特に清國人に對して成べく其の協力を邀へる精神であり、清國人の誤解や猜疑は之を解いて、互に協力するつもりである。不肖の短才は之を爲し得るか否か寒心に堪えぬ。

然し本社事業の成敗は獨り本社の利害のみではない、吾帝國國民の榮辱に係はる處であり、世の實業家の幸不幸にもなる。戦争の勝敗のみを以て國民の榮辱を定める譯にはゆかぬ。自分が就職に方つて各方面の後援と同情とを求め、それは、特に一會社の爲に各位を煩すのではなく、各位の希望が此の國家的大事業に對して回避すること、許さないものがある、と信ずるからである。」

明治三十九年十一月十九日、後藤總裁は特に御陪食仰付けられ、後 御座所に

於て拜謁仰付けられ親しく左の御言葉を賜はつた、

南滿洲鐵道の事業は困難にして其の關係する處重大なり充分盡力せむことを望む

尙同年十二月十九日、中村副總裁、國澤、清野、久保田（勝美）、犬塚、田中、久保田（政周）、野々村各理事に内謁見仰付けられ別殿にて茶菓を賜はつた。

明治天皇の吾滿鐵の上を惟はせ給ふ御勸慮の程、まことに畏き極みである。

後藤伯は副總裁以下各重役の選任を一任されて居たから、汎く朝野の俊秀を集めて、日本の滿鐵經營陣を編成整備した。副總裁中村是公氏の四十一、二歳を最年長とし、理事は三十三、四歳から四十歳迄の新進氣鋭、精氣潑刺たる重役陣である。

尙後藤總裁の社員に對するや、大家族主義をとり、就任に際しては「余が此の大なる事業を成し遂げんことを決心するに當り、何の頼むところあるかと問ふものあらば、余は直に會社員たる諸君の心の力なりと答ふべし」と謂ひ、退任に當つても、「余は從來南滿洲鐵道株式會社でふ一大家族の家長を以て自ら任じ、永く諸君の衆團の一員として居らんことを期せしに、今回遞信大臣に任ぜられ、茲に諸君に對して別辭を述べるの已むを得ざるに至りたる事情は、諸君の諒察せられむことを望むところなり」と謂つて居る。

大滿鐵今日の社風は淵源を遠く此處に發して居る。後年（大正十五年）社員會の結成を見、

- (一) 自主獨立の精神を涵養し自律自治の修養を積むこと
- (二) 會社の使命に立脚し其の眞正なる地位を擁護すること

(三) 會社の健全なる發達を基調とし社員共同の福祉を増進すること

の三綱領を掲げ、常に會社の使命に即しつゝ、底力ある運動を繼續し、力強き滿鐵の社風を形成して居ることは、眞に滿鐵独自のものと謂はねばならぬ。從て重役團と社員會とは常に融和協力し、社員は會社の使命と實情を察し、重役は社員會の要望に順みて、談笑裡に諸問題を解決し未だ會つて他の諸會社に見るが如き上下の對立抗争等を惹起したことはない。共に學び、共に修め、共に楽しみつつ、國家の事も、會社の事も、社員相互のことも、圓滿に計り且實踐して來たのである。社員會は穩健中正であり、倫理運動であるが、然し一度國策となり、會社の使命となると堅韌不拔の底力と、彈力を發揮する。會つて昭和五、六年の交支那側鐵道の包圍線その他に因り社業振はず、吾對滿國策萎微退嬰して滿蒙悲觀論、旅大放棄論等の擡頭を見るや、社員會は猛然奮起して自ら對滿國策を検討、研究して凡ゆる部門に亘り滿鐵の全智囊を傾けて、一つの成案を得、吾朝野に提示して「新滿蒙國策」の樹立を要望せんとしたるが如きは其の一例である。恰も滿洲事變の發生ありて成案を得ずして熄んだが、之が經濟調査會の設立を刺戟し、調査會が關東軍と協力して種々の企畫に參じた過程には、斯くの如き社員の自發的奮起があつた（滿洲事變に際しての活躍は別に述べた）他人は滿鐵社員に對して兎角の批評をするが、他に見るやうに、キンチャク切りの様な素ばしつこい人物、眼から鼻へ抜ける様な人物はないかも知れぬが、鷹揚で上品で、信頼の出来ること滿鐵社員の如き他の何處にあるか？ 算盤を弾き乍らも常に國策的判斷を忘れず、會社の特殊使命を忘れず、國家の爲には會社の損得を度外視せねばならぬ場合のあり得ることを知り、其の輕重の呼吸を心得、且會社の爲には己れの利害を顧みぬと謂ふ様な氣合が、誰が教へるでもなく、誰か特別な説法を加へるので

もなくして、自然になだらかに流れる様に會社内を浸して居ることは、滿鐵十四億の資本に超ゆる幾倍の資本であるか計り知れぬものがある。茲に後藤總裁以來の自らなる社風の樹立がある。黨染醇化がある。ローマは一日にして成らぬと謂ふが滿鐵の今日あるは實に三十年一貫不撓の全體的努力があつたのだ。

滿鐵の將來

青年諸君、以上を以て、私の滿鐵に就て諸君に語るべきことは終つたと謂つてもよいと思ふ。何となれば、私は諸君に向つて滿鐵の國策的意義と、傳統的精神とを語れば足りるからである。けれ共、私は序に滿鐵の發達の歴史と、現状と及將來の見透とに對して、ほんの驅走で極く簡略に述べることも、決して無意味ではなからうと考へる。而してそれには少し許り數字を擧げて話すことが具體的で最も解り易いと思ふ。

滿鐵は何と謂つても、鐵道を根幹として使命を果すべく創設された會社である。其の鐵道哩數は大掴みに言つて最初から約七百哩となつて居た。此の僅か七百哩に滿洲事變直前迄踰踏させられて來たのである。それを事變後暫らくして滿洲國有鐵道の委託經營を引受け、それに北鮮鐵道の委託を加へ、更に前述の如く其の後すん／＼新線を延ばして來たのである。そして昭和十一年九月の滿鐵機構改革に因つて、之等三種の鐵道は運営上一元化されることになつた。それでは事變前迄の七百哩が現在即ち昭和十六年初頭迄に何哩になつたかと謂へば、滿洲國建國前の支那側の鐵道が約四千哩、尤も其の中には純然たる支那鐵道とは謂へない東支鐵道即ち北鐵なるものを含んで居る。それにもつて行つて滿洲事變以後滿鐵の手に依て、主として北滿に鐵道を延べ始めた。之は零下三十度、四十度の極寒

時にも尙且工事を進捗せしめたものである。従つて暖い間だけを利用して、ゆつくりやる工事に比して高いものについて居る。高いと謂ふことに就て随分日本に非難もあつた様であるが、已むを得ぬ事情のあることは北滿を旅行し、殊に北方との關係を考量したら首肯することが出来ると信ずる。二十年後に之を完成すれば宜しいと謂ふ譯には參らぬ、全速力を要する。今尙四圍の狀勢上非常な無理をしても、北滿のあの酷寒を冒して命懸けで延べねばならぬのであるが、今日迄に延べて滿洲國側に引繼ぎを致した部分が四千一百軒(昭一五、九末)、其の外に約四百四十軒は工事中であるが、既に事實敷設を了つて或部分運轉もして居るのがある。北滿に於ける鐵道建設に就ては、滿鐵は其のスピードに於てとつくの昔世界鐵道建設史上の最高記録を突破して居るのである。それから現に既工のもので其の軒数は事情があるので言明を差控へねばならぬ。僅か八箇年前迄の七百哩に對して、滿鐵は今日一萬軒餘の線路を支配、經營して居り、且日に月に其の哩數が新線建設に依りて相當なスピードで増しつゝあるのである。

それから滿鐵會社の資本及社債等を掲げると、滿鐵創設の際即ち約三十四年前には資本總額二億圓、内政府の出資一億圓、民間一億圓であつて政府の出資は鐵道及撫順炭礦、其の他附屬事業を引つくるめて評價したのであつた。之が明治三十九年八月一日に決定された資本總額である。それが大正九年の四月に四億四千萬圓に増資されて、次で更に飛躍をして滿洲事變昭和八年三月に八億圓になつたのであるが、昨十五年一月に更に六億圓の増資を行つて、現在十四億と謂ふ巨額に上つたのである。之より變、私の在任中にも既に増資論はあつたのであるが、其の時迄は未だ増資しなくても社債に依て資本を拵じて行ける、又其の方がよいと思つたので政府に乞ふて十一年六月遂に勅令の變更を見るに至り、之に依て社

債募集能力を拂込資本金の二倍に迄擴大して貰つたのである。序ながら附言して置く。

今拂込株金額に就て見るに、政府が三億九千六百萬圓餘、民間が四億六千萬圓である。社債のことを申したが、社債發行能力はそれで十五億一千二百餘萬圓有つて居るのであるが、此の中で既に發行済のものが十三億五千六百萬圓、未發行二億圓強となつて居るのである。滿鐵の財産はと問ふならば、まあざつと三十一億と大掴みに見當つければ宜しい。それだけは叩いてかん／＼して居る財産だ。非常に控目に見積つてあるのみならず山など評價に入れてないものがあり、又鐵道敷設に關する権利等は入れて居ない。若も第二のハリマンがやつて來て滿鐵を買ひたいと謂ふならば、賣買差値として五十億とでも言へやう、四十億圓と謂ふなら無論買はうと答へるだらう。最初、政府が露西亞から引繼いだ全財産を一億圓と見積つたのを當時後藤さんは不都合な高い値段だと謂つて居られたが兎に角一億圓、それから今日は本當にかん／＼に叩いて割引をしても三十一億は優にある。此の一事を見ても此の三十年の間に滿鐵と謂ふものが何れだけ發展したかが窺はれやう。

ざつと世界の大會社を一覽して、資本總額に於て滿鐵よりも大きなのは少數ある。亞米利加合衆國のユナイテッド・ステイールが或は其の最なるものであらう。然し之だけの尤大な資本を擁し、社債を負ひ、之だけの財産を有ち、二十萬餘の社員を使い、そして其のして居る事業は多種多様に亘り、自分の民族どころではない、實に東方諸民族の運命に迄相當深い交渉を持つてると謂ふ様な會社は、今日世界の何處にも存在して居ない。さうして之が三十餘年前、安東縣で見玉大將の頭から生まれたものであるかと想へば、眞に異様な感が生ずるではないか。其

の手本である處の東印度會社は確か存在百五十年位、然し實際活動したのは百年位で潰れて了つたのである。相當偉大なる足跡は人類史上に残しはしたが、疾つくの昔消へた。謂はば遂に失敗して消へてしまつたのだ。然るに我が兒玉大將は其の幽靈を捕へて來つて滿蒙の實際に當嵌め、姿を變へて現世に甦らす魔法師の役を務められたのだ。而して起死回生の術が餘りにも效き過ぎて、何人も當時夢想だにしなかつた程度迄發達した。之は一に 明治大帝の御靈の御導きであり、御加護であると私は信じて居るのである。確かに人間業ではない。

之を更に方面を變へて言へば、滿鐵は我が民族の運命のパロメーターであると謂へやう。小さく言つてもが、東北部亞細亞に於ける大和民族の經濟的發展のパロメーターである。結局此のパロメーターの下る時は、我が民族が下り坂に向ふ時である。我が民族が下り坂に向はぬ限り、パロメーターは下らぬ。滿鐵が過去三十餘年間にや、お、う、な、し、に驚異すべき大發展を爲したのは、それは唯大和民族の大發展を記録したまでのことである。大和民族が尙上向きの運命にある以上、滿鐵が此の後と雖も、唯飛躍又飛躍の一途を辿るのみであることは勿論である。今日之を疑ふ人は即ち大和民族それ自身の運命を疑ふ人である。そんな人は早く日本人を止めて何處かの國に轉籍するが宜しい。之はつい平素の所論に踏み込んでしまつたが、本筋に歸つて、滿鐵發展史に特に參考となる收支の數字を指摘しよう。明治四十年、即ち滿鐵の第一年度の収入は驚く勿れ、一千二百餘萬圓で、支出一千萬圓、益金が二百萬、それで終りであつた。それが段々と増加して來て、ずつと以前であるが國澤新兵衛氏が副總裁をして居られた時に、滿鐵が二百萬圓の貨物を運んだと謂ふので、大祝賀會を大連で催したと謂ふ話がある。其の頃二百萬圓運ぶなんて言ふことは、最初誰も豫想して居なかつたものらしい、それが

既に六千萬圓を突破してしまつた。私が大正十一年に故早川氏に隨いて滿鐵に參つた時には、滿鐵の収入は確か私の記憶では一億五千萬圓を上下して居つたのである、益金の如きは其の頃は大概三千万圓位であつた。昭和六年度の収入が約一億九千万圓、益金は一千二百萬圓であつて、収入の上にも悲鳴を擧げて來て居つたのが一轉して、昭和十四年即ち一昨年は貴下方も決算報告で、之は滿鐵だけであるが滿鐵だけの總収入が四億四千萬圓、支出が三億六千餘萬圓、そこで大掴みに言へば益金七千七百萬圓である。更に委託經營をしてる滿洲國鐵道の収入を見るに、昨年度が二億九千餘萬圓である。哩數等から言ふと、ああ謂ふ土地柄で滿鐵とは比較が出来ない程収入は少ないが、之は漸次開發さるゝに従つて増へることは疑ひない。滿鐵と國鐵とを一本にしてみると十四年度の決算に於ては滿鐵で扱つた収入は七億二千二百萬圓、支出は六億五千四百萬圓、差引益金七千八百萬圓である。斯様な譯で右の數字を三十四年前の僅か一千萬圓餘りの収入で、益金二百萬圓に比較すれば、實に隔世の感がしはせぬか。以上述べた處だけで三十餘年の滿鐵發展史は、諸君の眼前に浮ぶであらうと信ずる。滿鐵の現状も先程から話した處で略明瞭となつたことと思ふので、之から直に滿鐵將來の豫想の一斑に就て卑見を申述べやう、之が結論である。

先程來の話で判つて貰つたと思ふが、而して第一章に於ても述べ、又前章の末尾に於ても繰返して述べたが、特に私は重複を厭はずして語るのであるが、我々は最早や此の大陸から引揚げやうにも引揚げられない。大和民族は——滿鐵だけではない——ここ迄大陸に足を掛けて、それで其の足を引くならば參ることは請合ひだ、疑ふの餘地はない。もう何としても唯進むの一途あるのみである。生物と謂ふものは——國家とか國民とか謂ふが要するに生きた人間の集りである、我

我が苟くも生物である以上、國家と謂ひ國民と謂ひ生物の團體である以上、進まない時はもう退きつゝあるのである。麥でさへも芽が出て莖が延びて穂が實つて、枯れて刈入れる迄には、間断なく成長して、そして衰えて枯れて死するのだ。我々の一生も赤ン坊に生れて——貴下方の中には一箇月許り成長を留めて居つたと謂ふ人があるかも知れないが、私は今日迄さう謂ふ人を見たことはない——間断なく發達する。發展が止んだなと思ふ瞬間から直に下坂になつて行く、之が生物を支配する鐵則である。國民も亦然り、我が大和民族は現に東方亞細亞に足を掛けて突進しつゝあるのであるが、我々が進まない時はもう退きつゝあるのだ。一地點に長く止まつて居ると謂ふことは出来ないのである。今日英米を主とした世界の現状維持を以て平和なりとなすは根本に間違つて居る。左様なことはどんな偉い國が現はれて來ても不可能である。神様がお許しにならない、進むか退くか、國際の現状は時々刻々變りつゝある。それを自分の勝手の爲に現状維持と謂ふ平和論等唱ふるから間違が起つて來るのである。大和民族の大陸に於ける行動も進まない時は既に退きつゝあるのであると謂ふことを、諸君もはつきり御認め貰ふ様にお願ひする。

今日、私は外務大臣の地位にあつて、大東亞共榮圈の確立を念願として微力を致して居る。又現に私は泰・佛印間の居中調停の役を買つて居る。南洋は必要である、大いにやらねばならぬ。それなら北守南進でやるのかと謂ふにさうは考へない。北守南進論は盛んに出てゐる、あれは新しく唱へられたのではない。私等の若いときに誰であつたか、確か竹越さんと記憶してゐるが、南洋に行つて歸つて南進論を書かれた。それから南進論が一時盛んになつて何時しか消えた。今日再びそれが頭を擡げたのだ。之又我が民族の躍進的氣運の一つの表れとして、私は決

して異議を挟むものではない。然し南進の上に北守と謂ふ字を今日附けるに至つてはそれは大變な認識不足である。今日は未だ北守南進なんと口輕のことを言ふ時ではない。「北の守り」は果して出來てゐるか、よし假に稍出來てるとしても、曩に指摘した原理で進まなければ守りを全うすることは出來ない。進まぬ時はもう守りを捨てゝゐるのだ、それが生物の原理である。國民の發展は其の國力と環境とに依て其の速度なり方向なりを、手加減する必要は固よりある。然し北の守りは未だ未だ北守なんと謂つて打切る時期は來てない。之から愈々全能力を傾け非常な決心を以て、如何なる犠牲を拂つてもやると謂ふ意氣込みで、尙尠くとも十年は掛ると思ふ、強いて言葉を作れば北進南進だ、何方へでも行ける處まで行く。國力と環境とに鑑みて手加減しつゝ、其の時々何れに力を餘計入れるべきかと謂ふことを決すればよい。繰返して言ふ、今日は未だ北守と謂つて北の方を軽く片付ける時ではない、之からが愈々の處だ。大和民族は之から益々力を揮つて北の滿洲國を本當に立派な獨立國として完成し、五族協和と謂ふ精神に徹底し、其の上に立つて進まねばならぬ。

さて五族協和を基礎にしてさうして我等は何處に行くのか？ 何をするのか？ 我々は先づ東北亞細亞に進む、さうして延ては大亞細亞主義の實現に向はなければならぬのである。現に我々が滿洲國でやつて居ることは實は 明治大帝の御遺策である處の東亞全局安定と謂ふ聖業の第一歩である。それが出來たら更に進んで大亞細亞主義を實現するのである。私は此のことを外務大臣の地位に居つても、世界に向つて公言することを少しも躊躇することは致さないのである。

何故かと謂へば、其の根本は歐米人の如き霸道ではない。霸道ならば憚るが宜い。然し公明正大な皇道宣布に我が民族が従事するのに、世界の譚に向つて憚る

る必要があるであらうか。私は霸道には絶対反対する。皇道宣布の道行きには斬つたり、はつたりと謂ふ様な時に、已むを得ざる道行きの業に魅せられてはいかぬ。り、はつたりと謂ふ様な時に、已むを得ざる道行きの業に魅せられてはいかぬ。征服慾、侵略主義に魅せられた時は、既に大和民族は邪道に入り、遠からず亡ぶ時であると私は思ふのである。我が大和民族は皇道宣布、即ち

天皇の御恩澤を先づ極東全部、次いで亞細亞全部、更に延びて世界凡ゆる民族に溶せしむると謂ふ聖業に従事して、又すべきである。其の爲には先づ第一著手として此の東北部亞細亞の一角に足を掛けたのである。之が私の信念であり、私の主張である。

其の點をもう一つ言ひ方を換へて申せば、今現に第一歩中の又第一歩として、滿洲國で日本人のしてゐることは何をしてるのかと問ふなら、之を押し詰めて言ひ現はすと數言にして盡きる。それは二千六百年前我が建國に際して 神武天皇の御降り遊ばされた建國の御詔書である。其の中で「六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇となさむこと亦可ならずや」と仰せられてあるが、之が即ち建國以來我が大和民族の奉じて居た大イデオロギーである、大精神である。此の精神に依て先住民族も三、四あつたが、漸次高天原民族に融合せられて渾然とした一つの大和民族が出来て日本帝國となり、現に今日此の通存在し、そして有難い萬世一系の皇室を戴いて居る譯である。二千六百年後の今日其の子孫等である我々が、尙此の御詔書を奉戴して大陸に乗り出して、もつと大きなスケールの上に此の御詔書の精神を實現しやうとして居る迄のことである。

そこで滿洲國は五族協和、滿漢鮮蒙民族の國でもあるが、又大和民族の國でもある。誰に憚る必要はない。今言つた二千六百年前の建國の御詔書を奉じて、他

所の國を取らうと謂ふのぢやない。征服しやうと謂ふのではない。そんな各な考へを有つてはならぬ。「八紘を掩ひて宇となさむ事亦可ならずや」之だけの大きな精神を奉じ、漸を追ふて皇道を世界人類に光被せしめたい。其の質は遠ふが稍之に似寄つた支那人の言葉を以てすれば、「大義を四海に布く」と謂ふことである。さて、さうである以上は、滿鐵は之から何をするのか、又如何なるだらうと謂へば、即ち之からも尙經濟的使命の遂行を續ける。そして其の活動の範圍は益々擴がるであらう。其の一面は我が國防の基礎を益々強化するのであるが、唯それだけで、それを敢行するに何も目的なしではない。即ち終局の目的は此の大和民族の使命遂行の一助たるにあるのだ。經濟的活動の半面と謂ふよりか目的は實に茲に存するのであつて、又經濟的活動も獨占的のものでは決してない。或意味に於て我を捨て、我を忘れて滿鐵は突進して行かなければならないものである、と斯様に私は結論して居るのである。

青年諸君、私は滿鐵を語りつゝ、何時しか我が大和民族の興亞大業のイデオロギー論に入り込んでしまつた。そこで章を改めて、此の大切な問題を諸君に訴へたいと思ふ。

第四章 興亞の大業

興亞大業の意義

大陸に志す青年諸君は、何は措いても先づ、昭和日本國民の大使命たる興亞の大業に就て、十分に正しい認識と、堅い信念とを有たねばならぬ。此の意味に於て、私は先づ興亞の大業とは何であるかを、諸君の前に解明して見たいと考へる。興亞の大業とは何か？一言にして謂へば、夫れは 神武天皇の建國の御詔勅に現れた、八紘一字の御精神の實現であると謂ふことが出来る。

夫れ大人おとなの制のりを立つる、義ことわり必ず時に随したがふ。苟も民に利くちやうあらば、何ぞ 聖造ひじりのわざに妨たがはむ。且また當あたるに山林やまを披拂ひらきまはち、宮室みやみやを經營きやうめいりて、恭つとみて寶位たかみくらひに臨のぞみ、以もて元もとを鎮しづむべし。上は則すなはち乾靈あまつかみの國を授けたまふ 德うつくしに答へ、下は則すなはち皇孫すめみまの正ただしを養やしなひし心を弘ひろめむ。然しかして後に六合くわくろくを兼ねて都を開き、八紘あめのしたを掩いひて宇

の使命感が、根據のない自己中心の選民意識や、獨善的な優越感に根ざすに過ぎないものであるが、眞に客觀的妥當性を持った使命感に立脚するものであるかを、如何にして判定するかと謂ふことは、非常にむづかしい問題である。何となれば、其の民族自身の主觀的評價と、第三者たる他民族の見解とは決して一致する筈がなく、従つて結局水掛論に終る外ないからである。私は此の判断の基準となるものが凡そ三ツあると考へる。第一は、其の民族の過去の歴史である。第二は、其の民族の上に現に課せられて居る役割と、夫れを遂行する爲に採用されつゝある手段、方法及其の實績である。第三は、其の民族の内在的な本質的價值とでも謂ふべきもので、其の民族理想が果して人類を普く救済し得る様な客觀的價值を有して居るか、而して其の民族は、此の理想原理を忠實に追求し、實現するだけの眞實性と、實踐力とを持つてゐるか、更に、他民族をして承服せしむるだけの氣魄と精神力を有するかと謂ふことである。

若しも今日の人類が公平無私なものであるならば、此の三ツの標準に照らし、他民族の資格を間違なく判断出来るであらうが、夫々に優越感を持ち、又嫉妬心や猜疑心を持つて居る以上、他民族の絶對優越性や、天與の使命を容易に承認することは中々あり得ないものと考へねばならぬ。従つて、我々大和民族の場合に於ても、此の三種の基準に照らして虚心坦懐に、又公平無私に、冷靜な自己批判を爲すことを怠つてはならないのである。私は滿洲事變以來常に謂ひ續けて來て居るのであるが、日本國民は一人残らず、伊勢大神宮の御鏡に自分の姿を映して、心を淨めて頂き、良心の曇りを取り去つて頂かねばならぬのである。興亞の大業が、我が大和民族の上に課せられた天與の大使命たる人類救済の前奏曲であることを信するならば、我々は何を措いても、先づ己を空しくして、嚴肅に自

らの資格を反省し、力量を検討した上で、敬虔の念を以て謙虚に、勇敢に、而して忍耐強く、此の目的に向つて精進せねばならぬ。大和民族が何等求むるところなく、死身になつて此の高い理想に向つて飽迄も邁進するならば、他民族も擧つて皇道に随喜するの日は、必ず來るに違ひないのである。

大和民族の使命は、窮極に於ては世界人類の救済にあるのであるが、差當り、之を極東に始め、東亞より全亞細亞、更に全世界へと、漸次に其の救の手を伸ばして行かねばならぬ。即ち、大和民族の世界救済の手始めとして、先づ興亞の大業があるのである。支那事變は興亞の大業の道行であり、興亞の大業は、皇道の世界宣布てふ、大使命完遂への過程である。即ち聖戰と謂ひ、興亞と謂ひ、皇道宣布と謂ふも、悉く夫れは同意語に過ぎないのである。

興亞の大業のイデオロギイは何か？ 理想は何か？ 此れは前述の如く 神武天皇の御詔勅の實現であり、天業恢弘である。併し、此の肇國の精神の實現されて行く形式や、天業恢弘の方法は、大和民族の發達の歴史と日本國の置かれた周囲の事情、即ち世界情勢に應じて、種々に變つて來て居るのである。而して、大和民族の歴史を遠く遡つて尋ねると際限はないが、最近の背景を極めて大ざつぱりに述べると、征韓論——日清、日露兩役——韓國併合——滿洲事變——聯盟脱退と謂ふ一連の歴史的事實の必然的歸結が即ち今次の事變であり、今回事變の結論が興亞の大業であると謂ふことになるのである。此の興亞の大業を通じて、皇道は極東から全亞細亞へ、亞細亞から歐米へ、而して全人類へと及ぶのである。皇道を國際的に解釋すれば、夫れは地球上の諸民族、諸國家をして各其の處を得せしむることである。明治天皇は明治元年三月十四日畏くも「億兆安撫國威宣布ノ御宸翰」を賜はつたのであるが、其の中に次の如き有難き聖句を拜するのであ

る。

今般朝政一新ノ時ニ膺リ天下億兆一人モ其處ヲ得サル時ハ皆朕カ罪ナレハ今日ノ事朕自身骨ヲ勞シ心志ヲ苦メ艱難ノ先ニ立古列祖ノ盡サセ給ヒシ蹤ヲ履ミ治蹟ヲ勤メテコソ始メテ天職ヲ奉シテ億兆ノ君タル所ニ背カサルヘシ

此の 明治天皇の聖旨を國際關係に及ぼせば、各民族、各々國家をして各其の處を得せしめ、天の慶福に與らしめることになるのである。又曩に日獨伊三國同盟成立に當り 今上陛下の渙發遊された大詔に「萬邦ヲシテ各其處ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ヲ安シキム」と宣はせられたのは正しく夫れであつて、誠に畏き極みである。而して、繰返して謂ふが、興亞の大業は唯其の序幕に過ぎないのである。若し、大和民族が之に成功することが出来なければ、皇道の世界宣布などは思ひも及ばぬことである。苟も皇道の世界宣布が行はれざる限り、人類は所謂眞の救済と平和の聖光を仰ぐことは出来ないと言ふのが私の信仰である。

我々は徒らに獨り善がりに陥つてはならないが、少くとも歴史を振返つて見て、我々の誇り得ることは 神武天皇御創業以來、否、遠く神代よりして、大和民族は侵略や征服と言ふことを知らない、眞の平和主義の民族であつたことである。日本の歴史には征服、侵略はない。綏撫と同化があるのみである。神代、上古より中世、近世そして現代に至る迄、大和民族の歴史には征服の跡がない。之に反して、西歐諸國民の歴史は終始一貫して侵略、征服の歴史であり、特に近世に於ける西洋史は、血を以て書かれた他民族制壓の歴史である、と言ふも過言ではないのである。

固より、我が大和民族は他民族に向つて絶対に武力を行使しなかつたと謂ふの

ではない。けれ共好んで武を用ひなかつたことは確かである。神武天皇が御東征に於てまつろはぬものを平げ給ふた場合を見ても、先ず使者を立て、忍耐強く利害得失を説き、和を講じ降伏を勧め給ふた後、尙頑迷不靈にして綏撫の道なき者に對して、初めて武力を御用ひになつて居るのである。又橿原に於ける御即位の大典に際しては、敵の降將をして警衛の任に當らせておるでなくなるのである。神功皇后の三韓征伐も亦、我が筑紫の治安を脅かされることを防止せんが爲に、止むを得ずして兵を御進めになつたものであつて、少しも無用なる殺戮の跡がないのである。積極的な外征はたゞ豊太閤の朝鮮征伐があるのみであるが、夫れも直接の原因は明王の我が國體を辨へざるの非禮を膺らさんとしたところにあるのである。而して朝鮮に於ける我が諸將の戦争振りも實に義侠的であつて無辜の民を殺戮する等のことは殆どなかつたのである。

此れと對蹠的なものは東洋に於けるイギリス人の征服である。抑々イギリス人の東洋發展の歴史は何に始まつたかと謂へば、西印度から金銀を積んで歸へる西班牙船の襲撃と掠奪に始つて居るのである。此の海賊や夫れと前後して行はれた奴隸狩りの齎らした、血のにじむだ巨億の金がイギリスを歐洲第一の富國たらしめ、東印度會社を設立せしめ、飽くなき征服の魔手を東洋に伸べしめるもとでとなつたのである。印度に於けるイギリスの征服史は氣の弱い日本人の目を蔽はしめせずには置かない程、悪虐の限りを盡したものであつた。隠謀譎詐と、老幼を選ばざる大虐殺と強姦と、大掠奪の連続である。有名なクライヴやヘスチングス等は、世界の寶庫たる印度諸王室の金庫を空にして東印度會社を富ませたが、同時に彼等自らは、此の二人の傳記者マコーレーの所謂「英國の名の上に、永久の汚點を止むることき方法を以つて爲された」殘虐行爲に依

つて、各々巨億の私財を積んだのである。

英國の飽くなき魔手は更に支那に伸びて何をしたか？ 今夫れに就て多くを語る可き機會ではないから第一、第二の阿片戦争の名を擧げて置くに止める。

此の戦争が終始一貫イギリス側の侵略的陰謀に出でたものであつて、非は悉くイギリスに理は常に支那にあつたことは何人と雖否まないであらう。イギリス人の中にあつても、當時の大政治家グラッドストーンの如きは、「之程不正な、亦永久的不名譽を以て國家を蔽ふ様に企てられたこと、之より甚しき戦争と謂ふものは知らないし、又讀んだこともない。英國國旗は一の破廉恥的貿易を擁護する爲に、高々と掲げられて居る。若し現在支那沿岸に掲げられて居るのは異つたやうに掲げられないならば、吾々は身慄ひしながら、英國國旗の見えない所迄後すさりをしなくてはならぬ」と述べて居る。マコーレーと謂ひ、グ

ラッドストーンと謂ひ、或は又「全印度の富を失ふとも英國の爲にシエークスピアを失ひ度くない」と叫んだカーライルと謂ひ、個人としては明かなる良心を以て正しくものを謂ふ者があつても、國民としてのアングロサクソンの世界政策は終始一貫して外道であり、畜生道であることを、其の東洋侵略史が明々白々に記録して居る。

其の他スペイン、ポルトガル、オランダ、フランス等の、西印度及東印度に於ける發展の歴史は、何れもイギリスと大同小異である。バスコ・ダ・ガマの東方旅行に先だつこと二百年の昔から、遠く南洋に通商路を開き、原住民の主權を尊重しつつ、終始一貫平和裡に發展を遂げて居た日本の商人群を之等と比較して見る時、眞に天地の違ひがあるではないか。然も當時の日本は國內の最も亂れて居た、室町の末期から戦國時代の直後にかけての日本であつたことを

考へると、大和民族の平和性を誇らずには居られぬではないか。勿論彼等は武勇に富んで居り、敢爲の氣象の溢れた冒険者であつた。然も偶々山田長政の如く、武力を役立てた場合に於ても、夫れは正義と仁侠との戦であつたのである。そしてイギリス人が印度の諸王族を騙したり、脅したり、放逐したり、虐殺したりしたのとは反對に、請はれて之と姻戚の關係を結ぶと謂ふ様な、極めて日本人らしい情味の厚い所を示して居るのである。

二百五十年に亘る日本の鎖國時代の夢を驚かせたものは、何時の間にかひたひたと四方から迫つて來て居た、西歐の侵略の手であつたのである。當時既に印度と南洋諸島は征服し盡され、老大支那も亦侵略の毒牙に傷いて植民地化の方向を開始して居た。而して此の西歐の蠶食を免れて、完全な獨立と自由とを失はないで居た國は、獨り皇國日本あるのみとなつて居たのである。平和を愛する、東海の小島國に過ぎなかつた日本が、貧婪飽くことを知らぬ此の西歐帝國主義的侵略の魔手を免れたのは、殆ど全く奇蹟と謂つてよいのである。斯くして、近世に至る迄の東亞は歐米人に隸屬せる世界であり、亞細亞とは此の隸屬せる世界と同義語であつたのである。維新以來我々の祖父並父兄達は、上には萬世一系の天皇を戴き下は萬民心を一つにし力を併せて、一方に於ては、一日も速かに歐米の新文明に追いついて自らの力を養ふことに努めると共に、他方に於ては、歐米の侵略から自國を守り、又極東の平和を護る爲に、幾度か國運を賭して戦ひ戦つたのである。而して今や、我々自身の日本精神が爆發して滿洲事變となり、續いては滿洲建國、聯盟脱退を経て、今次の支那事變に身を挺して立ち、興亞の大業に向つて邁進しつゝあるのである。私は暫く、興亞の大業の背景としての最近の我々の日本歴史を跡つて見ることにする。

浦和灣頭一發の砲聲に、二百五十年に亘る鎖國太平の夢が破られた、日本の發見したものは、實に完全に包圍されたる東洋であつた。而して日本が開國と同時に先づ不可避の必要として感じた事は、自國を守ることが極東を西歐の侵略から護ることであり、逆に極東を西歐の侵略から護ることは、自國の安全を確保する唯一の途であると謂ふことであつたのである。之は實に明治維新の直前から直後にかけて、否應なしに、日本國民の自覺せしめられたところであつたのである。否、既に徳川の中期以降に於て此の事を自覺した先覺の士が幾多現れてゐた。徳川幕府の鎖國は一方的であり、従つて日本の欲すると否とに拘らず、西歐東漸の勢力の餘波は頻りに我が邊傍を脅したのであるから、當時先憂の士は、單に鎖國日本の消極的防禦のみならず、積極的に、大陸に或は海洋に乗出して、以て日本の實力に於て、東亞の安定を確保すべきことを説いたのである。

興亞の大業の背景を日本の歴史に求むれば、遠く神代迄遡るのであるが今、明治以後に限つて之を見ても、征韓論以來日本の動向を支配したものは、東亞全體が其の處を得て居ない、否、不當に壓迫侵害され其の生存を脅かされてさへも居る、之は何とかせねばならないが、東洋を見渡して見て、夫れを爲し得る者は日本以外にない、他は頼むに足りない、獨り日本のみが東洋の保全、東亞の安定の責任者であるとの自覺と、責任感とがあつたのである。勿論、日本國民と雖生物である以上、自衛本能は持つて居る。日本は、自國の利害や生存を全然忘れて、只管、東亞を西歐の侵略から救ふと謂ふことのみを以て自己の責任とし、絶對の愛他主義の立場から、征韓論を唱へ、日清、日露の兩役を戦ひ、滿洲事變に處し、聯盟脱退を敢行し、滿洲建國の大業を企てたと謂ふのではない。私は左様な偽善的な詭辯を以て、強ひて日本の立場や行動を合理化し、又理想化しようとする

は思はない。だが、明治維新以來、日本が、東洋諸民族に其の處を得せしむることと、東亞安定との爲に戦ひ續けて來たと謂ふことは事實である。而して、何故日本が斯かる道を辿つたかと謂へば、夫れは、世界特に東亞の客觀的情勢から謂つても、當時に於ける日本國民の自覺から謂つても、前述の如く、東亞の安定を確保することは日本を守ることであり、日本を守るとは東亞を護ることであつて、大和民族の興廢、存亡と、東亞諸民族のそれとは完全に一致して居たからである。

鎖國の夢から覺めた許りの日本、一方に於ては西歐文明の吸収と追及とに、日も足らざる有様であつた維新初頭の日本、歐米人の眼からは勿論、支那人の眼から見ても、又朝鮮人の眼からさへも、ちつばけな東海の小島國に過ぎない日本が、東洋平和の責任者を以て任ずることは、寔に笑ふべきことであつたに相違ないのだが、當時の日本國民全體とは謂ひ得ない迄も、少くとも明治政府の指導者達は、明らかに其の使命を自覺して居たのである。征韓論の如きものも、單に大院君以下の清國に對する事大主義や鎖國排外政策に對する、一時的憤懣と謂ふが如き原因に依つたのではない。大西郷等の巨眼は、既に西歐諸國の虎視眈々たる野望を觀破すると共に、東洋に於ける英露兩帝國主義の軋轢をも見抜いてゐたのである。既に南洲翁等が此の機逸すべからずとして、極東平和永遠の政策の爲には、國內の物情尙騒然たるの状態にも拘らず、敢然として征韓の帥を出さんとした處にこそ、實に大義の前には怖れを知らざる興隆日本の眞骨頂が見られるのである。此の崇高な使命感と、不退轉の勇氣こそは、實に、今日萬難を排して興亞の大業の完遂に當らんとする吾々昭和日本國民の血管の中に、其の儘に脈打ち流れて居るところのものなのである。

興亞の大業の背景としての日清、日露兩戦役を詳しく語ることは省きたいと思ふ。日清戦役に就ては、眠れる獅子として猶歐米諸國を恐れしめて居た老國支那の無力を暴露し、露骨な西歐帝國主義の支那に殺到する傾向を更に激成し、延いて日本に對する脅威と極東の和平に對する日本の責任とを、却つて倍加せしめたと謂ふことを注意するに止めたい。日露戦役に於て、當時世界最強の陸軍國たり、又歐亞に跨がる魔の白人大帝國として怖れられて居たオロシヤに、小國日本が連戦連勝したる事實により、白人に虐げられたる有色人種と、バルカン始め白人種と雖所謂弱小民族等が、世界到る處異常なインスピレーションを受けるに至つたことが、西歴二十世紀に現れつゝある激變に對して、或は一番大きな精神的温床を成したものであるまいか。又此の戦役に依つて日本は世界強國の班に、所謂一等國として列したのである。

日本は南滿洲鐵道を中心として、初めて大陸に眞の足場を持つことになり、そして關東州の租借と朝鮮の併合とは、日本をして大陸への玄關口を完全に確保せしむるに至つた。日本は今や、單に自ら任ずるとか、さう自覺するとか謂ふのみではなしに、立派に強國の一つとして、東亞の安定保持の責任者たることを、客觀的にも承認せらるゝに至つたのである。そして更に世界大戰の結果、日本は名實共に世界三大強國の列に昇り、東亞の事は大小となく、日本を抜きにしては處理する事が出来ないと言ふ迄に、日本の國際的地位は高められたのである。然るに、其の後歐米殊にアングロ・サクソン系の國々の我が國に對する壓迫と、遺憾ながら恐怖に驅られ、巧利主義に墮し、小慧しさに誤られたる我が國の外交とは相俟つて、漸次この皇國を其の當然の地位より引摺り下さんとした。滿洲事變は即ち之に對する日本精神の反撃であり、皇國日本の眞の姿の再顯であつたのである。

日清戦争 回想

日清戦役以前の日本は、世界の眼から見れば、其の存在さへも知られて居なかつた、と謂つても可い位微力なものであつた。私は、十四歳にして渡米したのであるが、其の翌年即ち十五の時に日清戦争は勃發した。私は少年の日に、遠く異郷の空から、此の祖國の存亡に拘る、運命的な戦争を望んで小さき胸を躍らせた、忘れ難き思ひ出を有つものである。外國人の眼に映じた當時の日本の有りの儘の姿を傳へ、日本は初めから今日の如く偉い國ではなくして、陛下の御稜威と、諸君の祖父達や、父親達の掬まざる奮闘とに依て、當時の微小から今日の偉大を築き上げたものであることを、青年諸君に深く反省し、感佩して頂く資料として、拙著「少年に語る」の數節を、特に採録することゝする。

又本文に記述を省いた日清戦争から日露戦役迄の期間は、興亞大業の背景としての空白を爲すものではなくて、拳匪亂を中心として、非常に重要な契機を藏して居るのであるから、併せ讀んで戴く爲に其の部分も一緒に轉載することゝした。

私は十四の時に今の言葉で謂へばルンペン、此のルンペンはちつと大きくて世界的ルンペンになつてアメリカに渡つた。私の家は御維新後段々潰れて参りました、たうたう私は十四歳の春アメリカに渡つて行つてアメリカでルンペンをやりました。すると十五の年に日清戦争と謂ふものが始まつた。貴下方は學校でもう日本の歴史は大體先生からお習ひになつたと思ふが、日清戦争は、明治二十七、八年にやつたんだ、と謂ふことだけは知つておいでになりませうが、夫れ以上は餘り感じはあるまいと思ふ。

所が明治二十七年に日清戦争の始まりました頃は、世界で日本と謂ふ國は何處に在るのかさへ、知つて居る人は僅しかなかつた。其れは支那とか日本に來た西洋人は知つて居た。中には書物を読んで知つて居る人も多少はあつたらうが、ヨーロッパやアメリカでは、大部分の人は日本と謂ふ國は何處に在るかさえ知らなかつた。私は覺えて居りますが、十四の時にアメリカの小學校、私の通つてた小學校に視學官が來ました。學校の受持の先生が私を呼び出して、日本と謂ふ國に就いて説明しろ、と謂はれて、地圖に就いて説明したことがあるのであります。さうすると、初めて、成程地圖には赤く塗つてある小さな島國があると謂ふ位を認めてくれたらしい。

日清戦争が始まりますと、多くの人は、日本と謂ふ國がある事を知らぬのであるから一體どういふ戦争が始まつたのだらうかと謂ふ譯なのである。さうすると支那に日本と名の附く省が、即ち地方が一ツある、夫れが支那の中央政府に叛旗を翻した、それが日清戦争と謂ふのだ、斯ふ謂ふ話をしてた人もあつた。ヨーロッパで可成りの國際公法學者の其の當時著した書物にもさう書いてあるのがあつたさうです。嘘の様な話だが本當にこんな譯だつた。日本人は始めから俺の國は偉いと思つて自惚れて居るけれども、アメリカやヨーロッパでは、日本と謂ふ國は何處に在るか知らない者が、多かつたと謂ふ有様でありましたが、さてそれからどうなつたか。

私は十五歳でありましたが、子供心にも残念であり心配でもありました。日本と謂ふ國があると謂ふ事を知つて居る者でも、多くは支那と謂ふあの大きな國の脇に海の中にちよこつとした日本の島がある。第一之を見たゞけで是は戦にならぬ、可哀さうに今に支那に非道い目に遭はされるぞと謂ふ觀方であつた。まるで

提灯に釣鐘だ。日本と謂ふ奴は馬鹿な奴で、あんな大きな國にどうして喰つて掛つたかと謂ふ様な話、私は日本人でありますからさうは思はぬが、斯ふ謂ふ米國の中に居ると、子供心にもつい心配であつた。それから毎日新聞を見ると、天津とか上海とか謂ふ所から来る戦争の電報が載つて居る。大概日本軍が負けたと謂ふ電報です。たう／＼鴨綠江を渡る戦の時に、私は餘り心配だから支那人の町に子供ながら行つて見た。それは支那人の町に行きますと漢文で戦争の電報が掲げられて居たからである。今でも覚えて居りますが、鴨綠江の戦は支那の軍が大勝である。日本軍は大部分撃滅された。その日本人の血で「鴨綠江は爲に紅になつて居る、さうしてその鴨綠江の河に充滿して居る日本の將卒の屍、山の如くであつて、爲に徒して渡るべし」と書いてある。えらいことだ支那の兵隊が、日本人の屍で鴨綠江が埋まつて居るので其の上を歩いて渡ることが出来る」と書いてある。是は例の漢文「白髮三千丈」の類とは思ふたが、それでもそれを讀むと餘り好い氣持はしなかつた。そんなに負けた譯はあるまいと思ふが、兎も角それが鴨綠江の戦ひの第一報である。是は少し挿話的のことではありますが、面白いことには、始めは頻々として支那から来る電報が先、日本から来るのは何時でも遅れる、先に支那から来た電報では、何時でも日本軍が負けて居る。二、三日するとやつと、日本から新聞電報が来る。それに依ると支那の電報は嘘と謂ふことになつて居る。そこで後には私共は上海や天津から日本軍がひどく負けたと謂ふ電報が來ると、それは必ず支那の軍隊がひどく負けたと謂ふ事であるとして、安心する様になつた。さう謂ふ様な譯であるが、驚いたのはヨーロッパ人とアメリカ人、日本は其の後連戦連勝、牙山と謂ふ所に於て本當の戦ひらしい戦があつた。是が世界を第一驚かした。それから其の中に從軍記者から日本が勝つたと謂ふ電報が来る。

さうすると、最初に見くびつて居つたゞけに反動を起して、あべこべに極端に走つて、日本軍はすてきに強いと謂ふ事になりました。

或る外國の従軍記者の電報の中に、日本軍の行動は、まるで時計の機械みたよ
うだ、きちつとして一分の狂もなく、きち／＼と動いて居る。之には支那の兵隊
も敵ふ筈がない、と謂ふ様なことが書いてありました。それ位今度は西洋人が驚
いた、數は日本軍は必ずしも多くない、支那の兵隊は却々多い、其の頃の支那の
軍隊は、今から考へると名將軍が海軍にも陸軍にも居つた。海軍なんかは支那の
軍艦の方がすつと大きかつた。日本の軍艦は小さかつた。軍艦の大きい小さいか
ら謂つたら日本は負けるのが當り前、それが勝つ、何遍戦つても勝つ、茲に於て
世界が非常に驚いたのであります、と謂ふと貴下方は直ぐ早合點して、それは日
本の強いには驚いたらうと鼻を高くなさらうが、さうじやない、實は支那が餘
りにも弱いのに驚いたのでです。成程、初め思つたよりか日本軍と謂ふものは強い、
あのどうも小さい身體、脚は曲つて居つて餘り風采の好くない人間だ、併し戦争
をやると存外強い、それ位に感じたが、まだ日清戦争位では日本軍が本當に強い
とか、日本人は本當に偉いとか思はなかつた。あの大きな身體をして居る支那が
餘りにも脆いのでそれで驚いたのであります。それ迄は歐米の強い國でも、支那
を侮しては參りましたけれども、半分は恐がつて居つた、あの大きな國體の國、
その頃でも三億以上も人口があつた、さうして四千年の歴史を有つて居る。歐米
人が未だ野蠻人であつた時代、既に中國人と謂ふものはそれは偉い文明を有つて
居つた。それであるからして此の頃は保守的で頑固で改めぬから餘程遅れては來
たけれども、併し仲々底力のある國であると斯う思つて居た。餘り支那をいちめ
ると元來居眠りをして居る象と同じであるから、此の象が眼を覺して飛び上つた

ら大變だ大事になるかも知れぬぞ、之が當時歐米人の想像してた支那であつて、歐米は密かに半ば恐がつて居つたのであります。所が、小さな日本と太刀打したら、たわいもなく負けた、それぢや是は象ぢやないぞと謂ふ話になつた。眠れる象であると普通謂つて居つたが、之は、どうかと謂ふ話、いや象は象だ、その象が何うして立ち上つて日本と闘つて脆く負けたのだらう、茲に疑ひが出て來た、そこで能く考へてみたら、象は象だけれども足は土で出來て居たのだ。それで立ち上つたら土の足が脆く崩れてしまふのだ、と謂ふ話になつた。即ち歐米人が斯ふいふ事に氣がついた。

之は私が形容して貴下方に話すのではありませぬ。今話した通のことが當時歐米の新聞、雜誌に載せられて居つたのを私は讀んだのである。

國匪事件と日本

さあ、それから大變なことが始まつた。それ迄は餘り支那をいぢめたりなんかするとどんな事になるかも知れぬと思ふて、少々こわがつて居つたのが、日本と戦をして見ればたあいもなく負けたのである。は、あ此の象の足は土で出來て居る、だからてんで立ち上がることが出來ないのだ。それぢや殺してしまはうか、そして皆が寄つて體をバラ／＼に切つて分け様ぢやないか、と謂ふことになつた。

之から貴下方には難しい言葉だが支那分割論と謂ふものが、愈々眞劍に考へ始められたのであります。支那の何處かをブン取らうぢやないか、貴様はあの邊を取れ俺は此の邊を取る。之を切つて分けてしまはうぢやないかと謂ふことになつ

た。さうするとどうも日本はたまらないことになつた。支那には勝つて見たけれども、ヨーロッパやアメリカの強い國が、支那にドン／＼出つ張つて来て、直ぐお隣の支那を殺して、さうして分けてしまひ、そこに自分の國の出張所を出してくれた日には、日本はたまらぬ。日本はさう謂ふ事を起さす爲に戦をやつたので何でもない。支那が餘りひどい事を謂ふて、日本と結んだ條約を無視して朝鮮に這入つて、我物顔をするものだから、然も日本の國を危うくするものだから、已むを得ず之を懲す爲に起つて闘つたのだ。支那が參つたと謂ふので、それで日本は目的を達した。所がそれだけで治まらぬ事になつた。今謂ふた通り歐米の列強殊にヨーロッパの強い國がドン／＼出つ張つて來だした。餘り支那に出つ張つて來たから支那の人達も亦たまらぬ事になつた。これちや殺されてしまふ。どうかさう謂ふ事のない様に、と、かねてから心ひそかに心配してたのは日本であります。併しそれがお隣の支那の人達にはよう分らぬ。

日本は、それから、何とか支那を叩き殺して分けると謂ふことを防ぐ道はないか、と思つて一生懸命盡したのでありますけれども、何しろヨーロッパの強い國の勢は、日を逐ふて盛んになつた。そこで支那の人達も今謂つた通りたまらぬ事になつた。それが明治三十三年の有名な團匪事變と謂ふものになつたのだ。團匪事變とは、難しいことは略して置きますが、一言で謂ふたら、支那人が之ではたまらぬから、支那から白人を追つ拂へと謂ふ運動を盛んにやる様になつた、そこへ迷信家が出て来て、俺達の體には鐵砲は當らぬ、當つても死にやしないと謂ふさうして起つたのが團匪事變と謂ふものです。そして西洋人を見付け次第叩き殺すと謂ふえらい運動が捲き起つたのであります。

此の團匪事變と謂ふものゝ成行き如何では最早今日支那と謂ふ國は地球上に、

地圖の上ではなくなつて了ふた譯である。たう／＼此の騒ぎが激しくなり、北京、今では北平と謂つて居る彼處に各國の公使館が集まつて居る場所があつて、そこを公使館區域といふてるが、其の公使館のある所を圍んで、各國公使達以下外人を塵殺に掛つたのである。

そこで歐米の國々は、兵隊を支那に送つて、一時も早く北京に居る自分達の公使其の他を救はうとした、さうして日本政府に、貴下も仲間に入つてくれぬか、と謂ふ事を謂つて來た。此の時に日本でも此の仲間に入るべきか、入るべからざるか、と相當議論があつたのでありますが、遂に日本でも矢張り日本の公使も居り他に日本人も其の中に居るので、それを救ひ出さなければならぬのみならず、萬一にも各國公使達を救ふことが出來ないで支那人が彼等を塵殺しにする様になつたら、之を口實に、支那と謂ふ國はそれこそ歐米諸國が寄つてたかつて分割してしまふに相違ない、殺してしまふに相違ない。それはさすがに出來ぬと謂ふ考から、日本は支那が憎いので兵隊を送つたのではない、支那を救いたい爲に、兵隊を送る事にしたのであります。さうして日本軍が何時でも第一線に立つて戦つた。

北倉の戦なんといふものは非常に猛烈な戦ひであつた。各國聯合軍が北倉を突破することは不可能と思はれた。その時に日本軍は先頭第一に進んだ、其の後も思つた事でありませんが、歐米の兵と日本兵が一緒になると、何時も日本兵が一番先に行つて一番先に死ぬのである。一方から謂ふと馬鹿なやうに思はれるが、それが私共日本人の正直な偉い所なんです。日本軍が居つたればこそ北倉を突破し、さうして遂に、また各國の公使其の他を塵殺にしない内に、聯合軍といふものが北京に著き得たのであります。もう北京に居る公使其の他は命旦夕に迫つ

た、明日にもやられるかと謂ふ有様であつたのを、やつと間に合つて、さうして之を救ふた。其の時に支那では、皇太后の西太后と謂ふ方が、宮廷の方々を率ゐて西安といふ所に逃げて行かれたのである。

そこで聯合軍が暫くの間北京を占領して居つた。それから此の後仕末の談判が始まつた。此の時の公使が有名な、後に侯爵になられた小村壽太郎といふ人であつたが、此の談判が始まるや、日本の全權として談判に當られた。此の人の談判を通じての一つの大きな考は何であつたかといふと、何とか支那と各國の間に立つて執り做してやつて、支那にひどい傷が付かぬ様に、之が爲に支那が分割される様なことのないやうにと心配されたのである。其の心配の結果のみとは申しませぬが、併し餘程それが力になつて支那は相當ひどい罰金も取られましたし、又此の運動の發頭人と見られた親王さん其の他がひどい罰を受けて、銃殺された人も多少ありましたが、大體に於ては分割もされず、再び起てぬ様な疵も附かずに済んだのであります。

そこで此の團匪事變に就て日本はどうなつたか、世界の人の眼にどう映つたかといふと、始めて白人以外のものが、即ち白人とは顔色の異つて居る日本人が——元來白人は顔の色が白うなければ劣等民族と思ふ癖があるが——世界の歴史始まつて以來初めて、白人に非ざれば人でないと思つて居る其の白人の兵隊共と肩を並べて對等で戦つたのであります。之はえらい事で、少くとも戰場では平等と認められたのみならず、やつて見ると此奴が一番強いと謂ふことを一緒に戦つた歐米の兵隊さん共は思つた。併し其の事が歐米の本國でも判つたかといふと、どうも彼奴は強いぞとは思つたが、また／＼白人より強いとは思つて居なかつた、たゞ前の日清戦争で勝つた時よりも、少しは餘計尊敬する様になつた、人間

らしいと思ひ出した。

それからどうなつたか、支那は兎も角分割はされなかつたが、ヨーロッパの強い國が取りたいものを取らずに居る譯はない。茲に於て、外交戦といふものになつた。兵隊で取る代りに今度は外交で、手練手管で支那の利權を取らう、一例を謂へば、彼處に鐵道を敷設しやう、何れは分割されるのだから、此處か取りたいと思へばそこを取るに都合の宜い様な鐵道線を敷かう、といふ様な運動が次第に激しくなつて來たのであります。當時の日本人は東洋全體の爲に、殊に畏れ多くも我が 明治天皇様は、日本だけをお考へではない、支那を初め、支那以外の國も即ち東洋全體を安穩にしてやりたい、斯ふいふ思召であつた。之がまた日本の大方針で、そこで日本は非常な心配をして來たのであります。(以上拙著「少年に語る」)

民族協和

滿洲事變は、日本の東亞に於ける當然の國際的地位と、近接地域に對する強國の責任とを抜きにしては了解出來ないのである。日露戦役迄は日本は消極的防衛の立場にあつた、と謂ふべきであらう。然るに滿洲事變に至つては、積極的に、日本が東亞解放に乗出したのであると謂ふことが出来る。

日本は、消極的に東亞を護り、自らを守るといふ立場から、一步、否、數十歩も數百歩も踏出して、東亞を西歐の帝國主義的侵略から解放する爲に、飛躍的、積極行動を起したのである。新しき東亞の建設、即ち東亞新秩序の樹立に乗出したのである。と謂つても、日本が積極的に大陸の侵略に乗出したといふのではない。歐米人は、滿洲事變や支那事變を以て、支那に於ける舊來の西歐帝國主義と、

新しき日本の帝國主義との角違であり、衝突であると見て居る。支那自身に於ても亦、日本を以て時間的にも、地域的にも最近の侵略國と誤認し、或は曲解するものが尠くないのである。が、日本の意圖が帝國主義的侵略とは、凡そ縁遠きものであることは、滿洲建國の事實に照らし、又今次事變の處理に關する、第一次近衛聲明以來率直、眞摯に表明された日本の態度を見れば、容易に肯かれることであらう。

滿洲事變は柳條溝事件に端を發したのであるが、それは單にきっかけを爲したに過ぎないのであつた、原因は深く且遠いのである。建國前の滿洲の地は東亞全體の安定から見、極めて厄介千萬な存在であつた。抑々或國家が其の領土に對して正當に主權を主張する場合には、單に古くから自國の領土であつたと謂ふ記録的な事實だけではなしに、現實に實力を以て、其の地域の内外の保安と秩序維持の責に任じ、其の實を擧げて居なければ、隣接國にとつては此の上なき迷惑の種子となるのである。然り而して、事變前の滿洲は、單に日本にとつてのみならず、東亞全局の安定、從つて世界平和の立場から見、斯かる意味に於ての、典型的な危険地帯であつたのである。張家父子二代に亘る地方政權に對しては、中央政府の支配は極めて不十分なものであつた。内に於ては郭松齡の反亂等があり、外に向つては蘇聯と事を構へる等の事があつて、日本としては多くの迷惑を蒙つたし、若し日本國の嚴然たる存在がなかつたならば、日露戰役後に於ても、滿洲の地はどうなつて居つたか解らない運命にあつたのである。滿洲をして事なきを得せしめたものは、支那の中央政府の力ではなくして、實に日本のお蔭であつたことは、否定することは出来ない事實である。然るに中華民國は、ヴェルサイユ條約後に於ける國際政治の風潮に乘じ、歐米の日本壓迫に便乘して、所謂

夷權回收に熱中し、滿洲の地から日本の勢力を驅逐せんが爲に、凡ゆる弄策を事とするに至つたのである。

抑々滿洲の地たる、日清戦役の賠償として、其の一部分は一度日本に割讓された因縁の地である。三國干渉を誘致して巧みに支那はそれを取返したのだが、後に李鴻章・ロバノフの密約なる關取引によつて、支那の政治家から舊露に賣渡されて居たやうなものであつた。それを、日本は十萬の生靈と、當時にあつては國民の負擔に餘る程の、巨額の國帑とを犠牲として、支那の爲に奪回し、保全の實を全うしてやつたと謂ふ、二重因縁附の土地である。若し此の土地を失地と呼ぶ得る國があるとすれば、それは支那ではなくして日本である。否、舊露でさへもが、此の土地に對しては支那以上に權利を持つとも言ひ得るのである。中華民國政府竝に張政權は、滿洲現地に於て、凡ゆる手段方法を以て、不當に日本を壓迫するのみならず、支那全土に亘り、日本を侵略國なりとして、下は幼稚園より上は大學に至る迄、徹底せる抗日教育を施して、純真なるべき第二國民の腦裡に、不惧戴天の仇敵日本なる誤つた、且支那の爲にも此の上なく、不幸の種子である惡觀念を植附けたのである。中華民國は排日の外交政策を強化するの目的を以て、蘇聯に接近し、所謂容共抗日の國是を定め、一方歐米列強の力を誘導して、日本の勢力を大陸より完全に追拂はんと企圖したのである。斯くて日本の生命線たるべき滿洲は、其の生命の安全を脅威する内臟癌と化したのである。斯くの如き情勢の下に於て、偶々滿洲事變は勃發した。此の事變に於て勝利を收めた日本は、滿洲を直ちに自國の領土たらしめても何等差支へない幾多の理由を有して居たにも拘らず、敢へてそれをしなかつたのみならず、保護領にさへもせずして、獨立國たらしめたのである。本國から塞外の地として特別扱ひされてゐた滿洲の

土地柄や、其の大部分が無知文盲者である住民の性質等を考へると、之を領土又は保護領と爲すならば統治のし易い場所であるが、獨立國として指導するとなることは中々面倒な所である。而も日本は敢へて之を獨立國とし、入會地的な滿洲の状態を其の儘に肯定して、茲に五族協和による新國家の建國を見たのである。

五族協和は 神武天皇の御詔勅に示された八紘一字の御精神、我が 天皇政治の傳統たる「統^しらす」の大御心を現代に生かさんとする企てであつて、日本は、此の悠久に亘る傳統的大精神を、二十世紀の世界に實現する手始として、新しき國家滿洲國を創建したのである。日本が、滿洲事變を一轉機として、防衛より積極的な大陸經營に踏出したと謂ふ所以は實に茲にあるのである。滿洲國の建國精神たる民族協和は、其の理想に於て崇高であるばかりではなしに、現實の國際政治の上から見ても、最も健實な實踐性を有する國家原理であることを、今次の第二次歐洲大戰が、現に我等の眼前に於て實證しつゝあるのである。ヴェルサイユ條約に於ける歐米の指導的政治家達は、國際政治の理想主義に立脚すると稱し、所謂民族自決主義を標榜して、歐洲に幾多の小獨立國を拵へ上げたのであつた。此の機械的に急造された民族主義小國家が、如何に砂上の樓閣の如くに儂いものであつたかは、現に我々の知る通りである。彼等は、歐洲に於ける平和の保證として役立たなかつたのみではない、實に第二次歐洲大戰の動因となり、一度び第二次歐洲大戰の勃發するや、新舊多數の小國家の存在は何等英佛側の安全保證にすらもならずして、却つて隨處に聯合軍のアキレスの踵となつたのである。

今日の世界は最早完全なる獨立國家としての小國の存在を許さないのではあるまいか。曾てはローマ法皇の教權下に統一され、一體としての文化を持つた歐洲は、ルネサンスを経て個人主義・自由主義の風潮の擡頭と共に、幾多の近代的國

民國家に分裂し、特に資本主義勃興の波に乗つて益々此の傾向が助長されたのである。然るに此の歐洲の個人主義・自由主義・資本主義を生んだ原始的の力は、同時に又近代科學の急速な進歩を促し驚異すべき多くの近代的發明・發見を爲し遂げて、人類の物的文化の上に大變革を齎したのである。特に蒸氣・電氣・ガンリン等の動力を自由に支配することによつて、二十世紀に入つてから交通・通信等に未曾有の變革を齎し、著しく地球を縮小せしむる結果となつた。即ち世界は或意味に於て、時間的、空間的、物理的には一つとなりつゝあると謂ふことが出来るのである。直ちに世界が一ツにならない迄も、今日の交通・通信のスピードを以てすれば、現に存在するが如き小國の分立は寧ろ非常な障礙であり、ハンデイキャップであつて、少くとも世界は幾つかの少數大ブロックに纏らなければ、不便であり不都合であるばかりでなく、到底立行かないと謂ふ形勢になつて來たのである。

之とならんで現今に於ける生産機關の發達は、物貨の大量生産を可能とし、人口の都市集中を招來し、土地の廣さの割により多くの人口を支へ得るに至つたと共に、スピードのかゝつた大量生産機關の必要とする、原料や動力資源等の確保の爲に、又其の莫大なる生産物の消費市場の確保の爲に從來の領土的配分を甚だ不合理なものたらしむると共に、一面愈々以て多數小國の存在を困難ならしむるに至つたのである。既に久しく資源と市場とに於て獅子の分前を持つた、先進國は益々障壁を高くして之を守らんとし、それを有せざる、或は持つことの乏しき、後進國にして強國たるの要素と氣力とを持つる國は、新しく割り込まんとして、茲に世界不安を招來するに至つたのである。之は、第一次世界大戰の最も有力な原因であつたと謂ふことが出来る。幸か不幸か、第一次歐洲大戰は、所謂持る國

の勝利に終り、持たざる國は、其の代表たる獨逸を筆頭として、益々抑壓の憂目を見ることゝなつたのである。而も底止することを知らぬ新機械の威力は、最早古い人間の精神では支配しきれなくなつてしまつた、より高い理想主義の精神が人類を支配せざる限り、人間は機械の奴隷たらねばならぬ運命の下にある。戦勝國も敗戦國も、共に機械の支配の下に立たされた資源と市場の分配の調整は、新しい機械に適應した新しい精神を以て爲されねばならないが、人間の精神は機械と歩調を合はせて進歩することが出来ない爲に、否、傳統とサイエンスとは常に衝突する爲に、領土と、資源と、市場との公平な再分配は、口に謂ふ可くして、未だ容易に實現すべくもない。而も機械は冷徹であり貪婪である。之に追隨する爲には、曲りなりにも、世界の經濟や、政治や、外交の上に何等かの改變が餘儀なくされる。斯くして生れて來たのが、即ち經濟のプロツク化であり、アウタルキーの思想竝に其の實踐である。

此の意味に於ても亦、從來の國家竝に領土的區劃は不合理であり、之等現存の制度は、文化の物的基礎たる進歩した機械生産に對して、既に久しく不適應の状態に陥つて居るのであるから、當然修正さるべきものなのであらう。唯人間の心と謂ふものは、一度適應した社會の物的條件に固執して、其の條件がとつくの昔に變革されて居るにも拘らず、容易に新しき條件に適應し得ない、厄介な代物なのである。或社會心理學者が喝破したやうに、「若も人間行動の最も顯著な特異性があるとするならばそれは取りも直さず反復性である」のであつて、環境の變化に常に取殘され勝ちのものなのである。人間が十分に此の點に目覺めて、自身自身の創作たる機械文化を自由に支配し得るやうな、聰明な心構を生み出さない間は、恐らく世界に眞の意味の平和はないであらう。第二次歐洲大戰が、何れの

側に勝利に終らうとも、或は何らかの妥協を以て媾和が案外速に成立しようとも第三次・第四次・第N次の世界戦争は引續いて起つて来るであらう。とまれ人間は完全に機械に適合出来ない迄も應急の順應は爲さねばならぬから、世界經濟の上にプロック化が生れて來たのである。而して、日本と支那大陸とは、其の地緣的・歴史的な宿命によりて、又日本が近代工業化された國であり、支那大陸が殆ど全部未開發の國土であること、更に其の天然資源の分布の状態等に鑑みて、國際經濟に於ては、當然日支は一體となつて完全なるプロックを形成すべきであり斯くすることによつてのみ、日本と支那とは共通の繁榮と慶福とに與ることが出来るのである。此の事は、少しく冷靜に物を看る眼を持つ者であり、虚心坦懐に物を考へる理性を持つ者であるならば、容易に肯定せざるを得ない必然的事實なのである。

日本と支那とが唇齒輔車の關係にあると謂ふのは單なる形容ではない。上述し來つたやうな國際政治的・國際經濟的事情を冷靜に検討するならば、此の兩者は相互に離れては其の安全も發展も保證されないと謂ふことは明瞭であらう。日本と支那とは、國防と經濟生活との兩方面から考へて、文字通に不可分離の關係に置かれて居る、日本が衰頽亡滅するならば、獨立國としての支那は、即刻地球上から消去する運命を持つのであり、支那が不統一と劣弱の現状を維持し、半獨立國、半植民地の状態を脱し得ざる限り、弱き隣邦を持つ日本は、枕を高くして眠むることを許されないのである。況や、若しも、歐米の資本主義的帝國主義の勢力を借りて、自己の守護者たる日本を卻けんとするならば、それは支那が自ら手足を殺ぐことであると共に、斯様な惡意を藏する厄介な劣弱國としての中華民國を、隣邦として持續けることは、日本にとつては到底忽び得ざる所である。「兩

降つて地固まる」で、支那事變の結果は日支兩國の關係を正にあるべき状態に置くことゝなるに違ひない、否、さうあらしめねばならない。手つ取り早く言へば、日支兩國が虚心担懷共に圖つて雙方の自發的合意により一國家を形成するところが、東亞の安全と繁榮とを確保する所以であるとも考へられないことはない——現に歐洲の弱點は、彼の小大陸に大小幾多の國々が各國境を固め、關稅障壁を高くして居ることにあり、其の反對に米國の強味は、彼の廣大な北米大陸に四十八洲が一國を成して、國境無く、關稅の障壁を有たざる點にあることに鑑み、幾多の歐洲聯邦論の生れて居ることを、我々は大きい參考とせねばならない——人間が理性の判斷のみで動く純然たる合理的存在であるならば、それも出来るかも知れない。だが、人間は合理的存在である以上に、感情的・本能的な存在である。日支同文同種が、久しく唱へられて居るにも拘らず、兩國民は歴史・傳統・言語・風習・宗教等を異にする、尙その上に獨立國としての面目もあるので、兩國が一國家を形成すると謂ふことは不可能である。それが假に可能であるとしても、必ずしも望まじきことではない。要は日支兩國が各獨立しながら、速に不可分一體の同盟國——國防・産業・經濟上の同盟國となることである。特に兩國は思想一體の同盟國とならねばならぬ。此の點に關しては特に中華民國人上下の反省を求めたいと思ふ。滿洲國が、日本と不可分一體の同盟國を形成することにより、如何に政治の能率を高め、産業の發展を遂げ面目を一新して、三千萬民衆の慶福を増大せしめたかに刮目せんことを切に望む次第である。私は思うてここに到る時、常に佛者の所謂業ごふをしみじみと考へさせられるのであるが、不幸にして滿洲國が差當り日本の眞意を誤解し曲解する支那國民を、抗日・排日に驅り立てる要因、又は口實になつて居ることは、辭むべくもない事實である。併しな

がら、何と謂つても解りよい中華民國人のことであるから藉すに時を以てすれば、此の新國家の實績と、其の東亞安定勢力としての役割と、日本の何等野心のない清淨潔白さ等を看取することが出来るやうになることを、私は確信する。其の曉には、滿洲國は、逆に日支兩國を繋ぐ、大切な楔の役割を務めることになり、日支兩國人の心の化合を助ける、觸媒の作用を爲すものとなるであらう。是れ即ち、私が支那事變は滿洲事變の續きであり、興亞の大業は滿洲建國の延長であると謂ふ所以である。

日・滿・支の關係

興亞の大業が滿洲建國の延長であるとの私の主張に對して、隣邦人の誤解のないやうに特に念を入れて謂つて置かねばならぬことは、日本は滿洲國を日本化し支那を滿洲國化せんとするが如き意圖を有するものではないと謂ふことである。日本の望む處のものは、一日も早く支那が近代國家として統一されることである。日本は終始一貫支那の自主獨立を望み、且現に過去數十年來、生命かけで其の保全を援護し來つた唯一の國である。遺憾ながら、支那は今日迄近代國家としては統一されて居ないのである。が、併し今や其の氣運には向つて居るのではないからうかと思はれる。日本は誠心誠意夫れを援助せんとして居る。汪精衛氏を首班とする新中華民國を極力支持しつゝあるのも其の爲である。今次事變の收獲は最悪の場合に於ても少くとも支那が初めて、新しい意味の近代的な統一國家になると謂ふことであると私は信じてゐる。大國と謂ふのみで、眞に統一の實を持たなかつた舊支那が、完全に統一された鞏固な生氣溢るゝ新支那を産み出すことが出来るならば、我々日本人の企圖する興亞の大業にとつて、眞に重要な基礎の一部

分が出来るのである。そして茲に日滿支一體の新秩序が形成せらるゝであらう。吾人の新しき支那に對して要求する處のものは唯一つである。それは新支那が孤立せる弱小國（版圖の大にも拘らず）とならざることである。

而して、さうならぬ爲には、新支那は其の成立に初めから日滿兩國と一心同體となつて、東亞の安定に任ずるの責任を取らねばならぬ。其の限りに於て、日滿兩國と有無相通じ、長短相補ふ同胞愛・連帶意識・相互扶助の精神を持たねばならぬのである。即ち新支那は、近代國家として統一さるゝ過程に於て、直ちに、同時に東亞新秩序の一環として組織されねばならぬ。

日滿支三國を打つて一丸とする東亞新秩序、それを樞軸とする大東亞共榮圈體制は、彼のヴェルサイユ會議の生んだ國際聯盟の如き、空虚な夢幻的存在であつてはならぬこと勿論である。五十幾國が平等の権利を持つ、國際聯盟と謂ふが如き非現實的なる組織を以て、一切の世界紛争、乃至國際問題を處理せんとすることは、理想論としては別問題であるが人類發達の現段階に於ては結局「バベルの塔」に終るべきユートピアに過ぎないのである。私は年來此の事實を指摘し警告し續けて來たのであるが、現に國際聯盟はあの態たらくになつたではないか。日本は東亞新秩序の指導者、大東亞共榮圈の事實上の盟主として、自己の實力と責任とに於て、内外に對して飽く迄も大國としての權利を主張し、且其の實を擧げなければならぬ。即ち國際聯盟の設計者の甘き空想にも拘らず、今日の世界には大國の勢力範圍なるものが嚴然として存在するのであつて、何國にせよ、若し他の大國の勢力範圍に鏃を入れ來るならば、結局戰爭を招來せねば已まないと謂ふのが、遺憾ながら國際情勢の實際に立脚した結論である。大國としての日本の勢力範圍たる大東亞共榮圈に對して、筋道の立たぬ他國の介入が行はるゝが如き場合

があるとしたならば、日本は逡巡するところなく斷乎として、之を排撃し、以て東亞防衛を完うするの覺悟を持たねばならぬ。が、それと共に、或はそれ以上に、日本として努めねばならぬことは、飽く迄も滿支兩國國民を信賴し、彼等を誘掖指導して、一日も早く、相共に責任を分か合ふことの出来る、強力なる同志國民たらしめるやうにすることである。何となれば、善き指導者は一切の權利と責任とを獨占する代りに、出来るだけ之を分與し得るやうな良き同志を發見し、訓練し得る者でなければならぬからである。而して此の同志の結束は、高き共同の目的を持つ時に於て最も鞏固である。日本は滿支兩國をして其の各の安全と繁榮との爲に、日本の力に頼らしむると謂ふだけでは足りない。利害の打算のみに基づく結合の紐帶は甚だ脆弱である。滿支兩國をして、共同の高き目的に向つて邁進する同志又は協力者としての誇と、責任とを持たしむることが、日滿支三國をして眞に一心同體たらしむる力である。然らば、此のより高き、より大いなる共同の目的、共通の使命とは何か？ それは先づ第一に、日本が滿支兩國と相携へて、大東亞の諸民族を、西歐帝國主義の制壓と搾取から解放することではなければならぬ。

私は今更白人禍を唱道したり、人種戦争を使賊したりしようとするやうな醉興人ではない。否、私は總べての偏見を忌む者である。けれども、世界人口の僅かに四四パーセントを占むるに過ぎない今日の白人種が、過去四世紀の間に、アメリカ・オーストラリア・オセアニア・アンリカ而して亞細亞の大部分を征服し、原住種族を殆ど奴隸化して、地球の七一パーセントを支配下に置いて居る事實を、我々はどうして坐視し得るであらうか。東亞民族・全亞細亞民族・全世界の有色人種は、確に其の處を得て居ないのである。此の不自然と不正とは、斷じて許容

さるべきではない。日滿支三國民の責任は實に重く、使命は甚だ高いのである。日滿支三國民は、爾餘の亞細亞同胞民族の不幸な運命を直視し、外侮の甚だしきを反省せねばならぬ。兄弟塔に闕いて、貴重な人命と、武器と物資との消耗を續けることを、出来るだけ速に止めねばならぬ。私は自分の立場上からも、外交問題には出来るだけ觸れないことにして居るが三國民が深く反省するならば、自らそこには道が拓かれることを確信する者である。

以上、私は全東亞民族・全亞細亞民族・全有色人種の解放てふ、高く大いなる目的の爲に、日滿支三國が血の結盟を爲すべきことを説いたのであるが、それは決して新しき人種戦争を示唆するものでないことは、豫め斷つて置いた通りである。私は有色人権が現に不當なる制壓を蒙つて居るが故に、其の解放を叫ぶのであつて、地を換へて、白色人種が奴隸化されて居るならば、人道と正義の名に於て、其の解放を求めることに躊躇しないのである。だが、人種間の差別待遇の撤廢を求めるとか、東洋民族を西歐の桎梏から解放するとか謂ふことは、單に自國、自民族の利害のみを思念するに比すれば、其の理想が高大であると謂ふことは出来ても未だ何といつても消極的であつて、眞に崇高偉大なる、日本皇國の大理想たることを誇るには足りないのである。皇國日本の大理想は、實に世界全人類の救済にあるのである。此の大理想の旆の下に、東洋精神文化の名に於て、滿支兩國を會同せしめ、相携へ相盟んで、新世界文化の建設に邁進せんことを誓ふに至つて、三國の締盟は眞に金剛不壞たるを得るのである。

皇道による世界救済

西洋を物質文明、東洋を精神文化の國として、判然と區別するのは非科學的な

分類である。何れの文明、何れの文化と雖精神と物質の兩面を有せざるものはない。唯だ、十九世紀に於て其の頂點に達した近代の西洋科學文明が、極端なる機械論・物質主義に墮したことは否定出來ない。而して、此の西洋の近代的な科學文明に對して、日本文化の傳統的特徴が精神主義にあることも亦、辭むべからざる事實である。更に西洋人が物慾旺盛であるのに對して、日本人が物慾に恬淡であること、西洋人が個人主義であるのに對して、日本人が家族主義であること等も、之を拒むことが出來ない。日本人と滿支人との間には、同じ東洋人と謂つても大いに民族心理的性格を異にするものがあるにはあるが、其の精神生活の共通な色調に於て、見逃すべからざる共通の東洋的特異性が認められる。特に西洋に於て殆ど亡滅したかに見える、忠孝の道德的情操の如きに至つては、滿支人の間には未だ其の根源の失はれてゐないと謂ふ證據を見出すのである。然り而して、今日の世界空前の行詰りを招來し、人類史上未曾有とも謂ふべき危機を誘發したるものは、實に此の西歐人の物質本位の科學文明であり、物慾主義であり、自由主義であり、個人主義であるが故に、之を救済し得る唯一の原理があるとすればそれは皇道の中に於てのみ見出され、汎くは東洋精神の中に於て見出さるべきであらう。

皇道に由る世界救済こそ興亞の大業の核心であると信するが故に、私は諄い様であるが敢へて重複を厭はずして、此の點を今少しく詳説して置きたいと思ふ。今や日本と謂はんよりも、東亞と謂はんよりも、實に世界を擧げての、有史以來未曾有の大變局に直面して居るのである。非常時は常に日本だけではない。東亞だけではない、眞に世界人類を擧げての非常時であるのである。先年私が政黨解消を提唱して全國を行脚した時にも、獨り日本のみの非常時ではない、實に世界

を擧げて空前の變局に臨んで居るのであると謂ふことを説き、其の對策を質しつゝ、自分の意見をも述べて廻つたのである。支那事變が起つた、世人動もすれば日支の問題と謂ふ點に、餘りにも重點を置いて考へる傾があるが、私は一面より看れば、之も世界空前の大變局の一ツの症狀でしかなくと思ふ。遠からず歐洲大戦が勃發し、恐らく延いては第二の世界大戦に導いて行くのであらうと、私は此の數年來豫言し警告して居たのであるが、遂に一九三九年九月兎も角第二次歐洲大戦が勃發した。日本は未だ此の大戦に介入して居らぬとも見得るのであるが、結局の處直接か間接に之に捲き込まれずには濟むまい。否、現在、已に世界全體が事實之に捲き込まれて居るのだとも謂はれないことはない。米國の如きは事實上早く既に交戦國の一つである。否、現に國家の全力を傾倒して援英政策を實行して居るのである。唯兵隊を歐洲に送らないだけである。

煙硝の臭や大砲の音がせぬと戦争と思はぬ人があるかも知れないが、達觀すれば煙硝の臭がしないから戦争ではない、平時即ち平和であると思ふことは餘りにも皮相の觀である。前回の世界大戦の起る前には激烈な經濟戦が行はれた。偶々それが煙硝の臭のする戦争形式に變つたに過ぎない。而して、ヴェルサイユ條約に依つて其の結末をつけたと或人達は思つたのであるが、私から見れば形こそ變つたが本質的には依然「戦争」が繼續して居たのである。例へば實際上今日の戦争の一番大きな原因である經濟戦は、今回の英佛對獨戦争の直前に於て、前回の歐洲大戦の前に比して一層猛烈に行はれて居たのである。一昨年九月兵器に依る所謂戦争の始まる迄、實にヴェルサイユ條約以後戦争は實質的には熄んで居なかつたのである。然らば、斯かる悲惨なる戦争（經濟戦をも含む）の根本原因は何かと謂へばそれは五十年來の驚くべき大發明と、人間の慾望殊に物慾とである。

若し歐米人が今少し物慾に恬淡であつたならば、而して五十年來の前代未聞の發明、發見がなかつたならば、或は二十年前の世界大戰も、今回の歐洲戦争もなかつたのではあるまいか。

歐洲を主流とする現代文明は、唯狂暴的に發明・發見に慕進し、且人間の慾望、特に物質慾望を最も激しく刺戟し募らせつゝあるのである。其の結果が經濟戰を彌が上にも激成し、延いて暴力戰、即ち普通吾人の呼ぶところの戦争に迄延び行かshめて居るのであつて、本質に於ては經濟戰も暴力戰（俗に謂ふ「戦争」）も、其の間何等差はない。普通戦争の主要原因は經濟戰であると言はれて居るが、私は經濟戰は煙硝の臭こそせぬが、本質的には所謂戦争と稱するものと同じであると思ふ。此の二者は原因結果の關係にはなくして、唯少し顔形の變つた兄弟分、否、同一人である。

歐米文明は、一面に於て熱心に戦争防止を力説しながら、他面戦争の主要原因たる物慾に就て、有效なる匡正方法を講じてゐない。否、却つて之を刺戟して已まぬ。それでは所謂戦争は防止出來ぬことだけは明らかである。而して、慾は人の心の中に在るのであるから、精神的に之を克服すべきであるに拘らず、物に重點を置き、軍隊の數量や、武器の利鈍等に就て如何程論議しても、それでは到底目的を達し得る見込はない。之等は實のところ戦争の原因ではない、寧ろ戦争に伴なふ症状とでも謂ふべきものなのである。斯くの如く、心からではなく物の側から戦争を克服しようとするのが、物質偏重に墮したる歐米文明の遣り口であつて、それでは所謂戦争と謂ふものの止まる望はないと私は思ふ。況や、武備を張り其の威力に訴へて世界平和を確保しようなどは、政治屋の謔語にあらずんば、暴力戦争準備の口實としての價值しかない言葉である。精神方面から、人類の慾

望特に物質的慾望を匡正する角度から問題を取扱はねば、平和確保といふ問題は所詮物にならぬと信ずる。而して更に、殆ど時間と空間とを抹殺せんとする前代未聞の科學的大發明・大發見それ自體と其の結果と、人間の傳統に繋がる感情と生存條件との調和と謂ふ如き、根本的諸問題の處理解決を企圖せずしては、到底望はあるまい。私は數十年來、現代文明は遠からず亡び行く運命のものではないかと謂ふ感想を懷き、さうした角度からも世界形勢の推移を眺めて居るのであるが、文明人の物慾は愈々募り、發明と發見は彌が上にも飛躍しつゝ、經濟戰は目を逐うて激烈となつて來た。それに我意、我執を押し通す爲に用ふる暴力的手段方法は、科學の發達につれて空前の威力を發揮し來り、殊に兵器は以て人類自らを壓殺するに足る底のものとなつたのである。ところで、道心は之に反比例して益々微かになつて來た。如何なる事にでも躊躇しない。人類は有史以來、未だ曾て斯かる危局に直面させられたことはないと思ふ。或は文明人間相互の殲滅戰は必至の運命ではあるまいか、とさへ考へさせられるのである。「さうに相違ない、最早助からぬ運命だから、まあ没落殲滅の日の來る迄、少しでも多く人生を樂しむがよい、それ以外に手の下し様はない」と謂ふならば、何をか謂はんやであるが、私は人間としてさう考へて宜しいかどうか疑ふ者である。よし現代文明の没落、文明人の滅亡が眼前に迫りつゝあると感じても、私は一個の人間として左様な運命を免れる爲に最後の一瞬迄努力すべきではなからうか、之が人間として生れた義務、否、生物としての本能ではなからうかと思ふ。何だか哲理じみて來て、青年諸君には難解ではないかと思ふが、之は人間として反省すべき大切な點であるから、よく味つて頂きたい。

或は歐米人から見ると自惚も程があると笑ふかも知れぬが、没落の途を急ぎつ

つある現代文明を匡救し、人類をして滅亡から免れしめ得る民族が此の地球上に在りとするれば、それは獨り我が大和民族のみであると謂ふのが、十六歳の頃から私の信念である。併し、萬が一大和民族も所詮此の聖業には堪へぬと謂ふならば、最早現代文明は没落の運命を免れぬと信ずる。併し、大和民族はそれに堪へる。之が真に我が民族の天から課せられた使命であると謂ふならば、大和民族が全人類に負ふところの義務は實に重且大なりと謂はねばならぬ。宜しく一大勇猛心を起し、不退轉の決意を以て、遠謀深慮、全人類に對する大慈悲心を發揮しなければならぬ。

興亞の大任と吾等の覺悟

私は此の皇國の世界救済の大使命に想到する毎に、常に青年のやうな精神的興奮を感ずるので、一氣に結論を吐いてしまつたやうな事になつたが、尙加へて語りたと思ふ。それは、以上の如き人類の救済に迄及ぶ興亞の大業に當る資格が、果して、現に見るが如き爲體ていたいの日本人に、あるであらうかと謂ふ疑問に就てである。今日迄の日本の歴史は、明らかに過去の大和民族が有資格者であつたことを示して居る。今日の我々はどうか、大に反省して見なければならぬ。

我々が反省すべきことの第一は、國民としても、個人としても、私利我慾、私心我執を去つて居るか、無我になり、無私、無慾になつて 天皇に歸一し奉つて居るかどうか、と謂ふことでなければならぬ。歐米人を物質主義、個人主義と貶して居りながら、自らが我利我慾の虜になつて居りはせぬか。日本人も亦果して謬れる個人主義、自由主義の弊に陥つては、居ないか。日本精神の、神髓たる忠孝に目覺めて居るか。此の非常時に直面しながら、國內の人心は果して真に完全に

統一され居るであらうか。私が嘗て、政黨解消を唱へつゝ、全國に行脚を試みた最大目的の一つは、總へての對立を一掃し國民輿論の統一に力を致すと謂ふことにあつたのである。兎も角政黨は形式上一應は解消され、今や、全國民と政府、軍官民を一體として結合すべき新政治體制が生まれんとして居るが、我々は其の基礎の上に強力に統一された國是・國策・國論の樹立を、痛切強烈に希求して已まない。歐洲戦局の見通しを、しかと付けることは困難であるが、少くとも今日迄の経過に於ては、獨逸の電光石火の攻撃と、其の連戦連勝の戦果とは、眞に驚嘆に値するものがある。と同時に、佛は既に敗北し、英は抗戦に大童になつてゐるが、其の立遅れは蔽ふべからざる事實である。而して、此の獨逸の成功は、武器と戦術の優秀もさることながら、専ら精神の力であるとは、ヒットラー總統の世界に誇るところであり、又佛の敗退は、謬れる自由主義と小黨分立に基づく國內の不統一に因由するとはレイノー首相やベタン老首相の率直に認むるところである。英國は英國で、久しき傳統を誇つた自由主義の國是をかなぐり捨て急速に徹底的に總動員體制を整へ、以て獨軍の本土上陸を防止せんと焦つて居るのである。萬邦無比、純粹完全な全體主義の國體を持ち、畏くも現御神と齋き奉る 天皇を上に戴く日本國民が、其の人心の統一に於て上下の一致協力に於て、無私奉公の精神に於て、將た又國策の確立の不動に於て、假にもナチス獨逸に劣るが如きことあらば、昭和の民は、何を以て父祖の靈に對することが出来るであらうか。國民一人残らず、天地神明の御前に額づき、畏れ戦いて魂の入替を願はなければ、興亞の大業の完成はさて置き、祖國を危殆に陥れることすら、絶對にないとは保證し兼ねるのである。

興亞の大業を賦課された我々日本國民は實に猛省一番を要する。總べての個人、

總べての黨派、すべての派閥は、残らず其の自己本位を徹底精算し、隨神の絶對無私に還元し、今上陛下の大御心のまにまに國論を統一し、内に於ては昭和維新を斷行して、眞に強力なる革新體制を整へると共に、外に向つては狐疑逡巡を排し、追隨外交の傳統を揚棄して、東亞の守護者、文明の救済者たる自信の下に、堂々と世界の危局に處さねばならぬ。日本が、此の斷乎たる決意、嚴然たる信念、強靱なる實力を中華民國並其の他の東亞諸國に對し、又歐米に對して示し得ざる限り、支那事變處理・東亞新秩序建設、乃至大東亞共榮圈樹立の望は絶對にない。況や文明の救済に於てをやである。立看板や、ポスターや、掛聲によつて大事の解決された例は、日本には未だ會てない、否、何處の國にもそんなことはあり得ないのである。

以上は、興亞の大任を擔ふ日本國民が、今日直に敢行せねばならぬ重大要件を説いたのであるが、隣邦同胞に對しては、我々は眞の兄弟愛を以て臨み、苟も傲慢不遜の態度を示してはならぬ。現代の中華民國人のやうに不幸な國民は、世界に多くはゐないと謂ひ得るのである。彼等は世界稀なる古く長い文化の傳統を持ち、それを誇りとする優越意識の極めて強い民族である。而も少くとも過去百年間の支那の外交史は、屈辱と敗退との歴史である。そして、彼等自身の間違つた意識によれば、既に述べたやうに、時間的にも地域的にも、最近の侵入者は日本であると思つて居るのである。それが無根據であらうとも、彼等はそれを信じ、彼等の或者は日本をやつつける爲ならば如何なる犠牲を拂つてもよいとさへ考へて居るのである。更に彼等は昔から日本人を東夷と呼び、倭奴と稱して劣等視し來つて居るのである。彼等は舊家の者が成上り者を見るが如き眼を以て日本人を見るのである。而も彼等は維新以後七十年間に於ける、日本の驚くべき躍進發展

と國力の伸張とを見て、驚歎する一方非常なる脅威を感じ、日本に對しては被害妄想患者的な弱小意識を持つて居るのである。従つて、總べての中華民國人が俄に雙手を擴げて我等を歓迎すると考へる日本人があるとするれば、それは餘程自惚かお人好しだと謂はねばならぬ。現在のところ、彼等は一般に日本人を恨み、憎み、疑つて居ると考へることが常識である。従つて我々日本人は、常に大國民の襟度を以て彼等に對し、敢へて優越を誇示することなく、彼等の僻みや猜疑心を勞つてやるだけの雅懐と親切心を持たねばならないのである。そして、日本人は常に個人としても國民としても、寔に尊嚴に値するものであり、軍人も、官吏も學者も、商人も、日本人たる限り信頼するに足り、力とするに足る人間であることを、實行を以て彼等に體認せしめねばならない。

中華民國人に對して兄弟愛を持つことの必要を私は説いたが、それにもまして大切なることは、信を彼等の腹中に置き、興亞の同志として彼等を對等に扱ふことである。中華民國人の心を勞れと私の謂つたのは、つまり此の信頼と對等扱ひによつて、彼等の自尊心を傷つけないやうにすることを意味するのである。それと同時に、我々に假にも彼等の前に自らを卑下し、彼等を甘やかしてはならぬと謂ふことにも注意したい。日本人は、外人に對する場合、ともすれば謙讓を通り越して、自己卑下に陥る癖がある。支那を訪ふ日本人は、學者も俗人も、口を開けば直ちに日本は文化に於ては支那の弟子であるから、何とかして學恩を返さねばならぬと謂ふやうなことを謂ふのである。日本の文化が支那に負ふものあるは事實であり、千年以上も前に日本が支那の弟子であつたことも亦事實であるが、日本の文化は大和民族の創意から生れた独自の文化であつて、支那人からの借りものではないのである。よい加減な其の場限りのお世辭を謂つて、彼等の自惚や、

自大思想や、保守主義に油を注ぐことは、良き友人としては絶対に慎まねばならぬことである。支那は實に之等の缺點の爲に今日の衰運を招いたのだと謂ふことを忘れず、彼等の短を戒め長を伸ばすやうにするのが、眞に彼等を受する所以である。

それと共に、日本は國家として強い武力を持ち、歐米に優る科學を持ち、良質の文明を持ち、品格の高い社會生活を持ち、何れの點から見ても歐米諸國に立優つた文化國民であることを示さねばならぬ。と謂ふことは見せかけるのではなくして、それを總べての點に於て、日本は一日も速に歐米の何れの國に比しても數等優る實質を備へた國家となり、國民となることが必要であり、國を擧げてそれに邁進せねばならないのである。

特に日本人の徳性が世界に冠絶せるものであることを知るならば、支那人は自らにして其の徳風に靡くのである。

尙、上述の如き日支間に於ける融和と結合の關係は、獨り日支間に於て要請されるばかりでなく、廣く日滿支と南洋諸國をも包含したる、大東亞諸民族間にも植付けられねばならぬことを痛感する。蓋し是れは實に多年東亞に加へられた歐米勢力の桎梏から東亞を解放し、進んで大東亞の發展興隆を成就せしむる基本條件だからである。東亞が久しく歐米勢力の桎梏下に、其の搾取を甘受しなければならなかつた大きな原因の一つは、過去の日支關係に於ても見らるる如く、東亞民族が東亞民族たるの共同意識を缺き、互に排斥争闘を事として居た點にあるのである。正に其の第一歩を踏出した東亞新秩序建設運動は、政治的に經濟的に將た國防的に、白人種ブロックより東亞を獨立興隆せしめんとするものであるが、此の大事業がさう簡單に成就すると思ふならば、それは大きな思ひ違ひである。

我々は今後幾多の盤根錯節にぶつつかることを覚悟せねばならぬ。而も事の成就すると否とは東亞諸民族の心構次第にあると思ふ。換言すれば東亞共同意識の育成が何物にも優つて先行さるべきである。我々は此の點に於て、東亞諸國間に於ける各民族の融和結合運動、乃至文化並教育の隔意なき交換運動が、飛躍的に展開せられんことを希求して已まない者である。是れ實に我國と中華民國間の新協定に於て、特に文化提携の強調された所以でもある。繰返して謂ふ、東亞民族の心の問題に觸れずして東亞の安定興隆はないと。

最後に、興亞の大業完遂に對しては、歐米を總舉げにしての妨害と抵抗とが一應は豫想されることを忘れてはならない。興亞の大業は、歐米列強をして謂はしむれば、亞細亞の反逆であり、大東亞の新秩序は歐米本位の舊秩序の破壊である以上は、利害相反することは明白だからである。私としては飽迄も、斯かる考の甚だ淺薄にして、來るべき世界全體の新秩序も亦詮するところ諸國民・諸民族の解放と謂ふ八紘一字の大精神によらなければならぬ事を悟らしめ、窮極するところ大東亞共榮圈の建設により、彼等も却つて利するところ多き所以を納得せしめなければならぬと思ふのである。併し、歐洲大戰が如何なる形に於て收まるとしても、押寄せて來るものは、少くとも歐米某々國の妨害であり對抗であるに違ひない。勿論日本が孤立無援に陥り國際場裡から掃出しを喰はざる爲め外交工作は必要であるし、又外交上其の餘地は十分あると思はれるが、否現に日獨伊三國同盟の成立により、歐洲にある兩友邦は、大東亞に於ける日本の指導的地位を認めただのであつて、之は私の口からは謂ひ難いが、我が外交の一つの成功であると信ずるが、東亞に關する限り我々は一切の外力を頼みとすることなく、假令世界を舉げて反對し來つても、日本は敢然として、肇國の理想たる八紘一字の大義を字内

に布く第一歩として興亞の大業完成の初志を貫徹すると謂ふ覺悟と、全世界を敵としても戦ひ抜くといふ底の用意とが、日本國民に絶對必要である。

私は、興亞の大業の完成の爲には、日本は全世界を敵としても戦ひ抜く覺悟がなければならぬことを説いたのであるが、それは歐米に對して東亞から締出しを喰はせると謂ふことを意味するものではない。東亞の新秩序が、歐米人の誤解するが如く、支那大陸乃至大東亞共榮圈内に於ける日本の經濟的獨占を意味するものであるならば、支那事變の聖戰たる所以を誇ることも出來ず、興亞の大業を誇ることも出來ない。それは歐米の帝國主義に換ふるに日本の帝國主義を以てしただけのことであつて、日本が歐米の物慾主義を露骨に學び、東亞をして物慾相打つ修羅場たらしむることである。それでは皇道を世界に光被せしむることも、人類を救済することも望めないのである。日本は、東亞新秩序の最低條件として舊來の歐米資本主義の支那制壓を徹底的に排除し、進んで全東洋に於ける白人制覇の粉碎を期するものではあるが、將來に於ける彼等の節度ある經濟發展や、大東亞圈内に於ける資源開發への合理的な協力迄を拒否するものであつてはならないのである。否、大東亞共榮圈内に於ける豊富な資源の開發には、大に歐米諸國の協力を必要とするのである。我々は利己主義・物慾主義・自我中心主義の歐米の世界征服の不正不義を惡むが故に、東亞を奴隸として繋ぐ鐵鎖のある限り、之を斷截せざるを得ないのであるが、既に之を摧破し去つて、總べての東亞民族に其の處を得せしめた後に於ては、決して、歐米の物慾主義的獨占を學んで大東亞圈内の何處にも不自然なる障壁を築くことをしてはならないのである。大東亞の新秩序に於て、我等は、天然資源と世界市場との公平なる配分は如何にあらねばならぬかを、世界に向つて正しく教へる用意を持たねばならぬ。人類全體の福祉の爲

に、地球上の限られたる土地と資源とは、如何に正しく配分され利用開發されねばならぬかを示し得るものは、精神主義・厚生本位の東洋經濟の原理あるのみだからである。而して、斯くの如き道義に基づける新東亞經濟體制の確立により、日滿支は勿論、南太平洋を含めた大東亞共榮圈内に於ける、東亞諸民族の生産力は急速度に躍進し、流通部面は飛躍的に擴大して、東亞諸民族の生活は空前の向上線を辿ることとならう。又斯くて東亞の諸民族は、茲に始めて長き植民地の繁縛から開放されたる、眞の物質的基礎を獲得するに至るべきを確信するものである。而して斯くなつてこそ歐米も此の圏内から恒久的に眞の利益、從來に比して幾層倍、幾十倍するやうな利益を享くることが出来るのである。

思ふに、斯のやうな各民族の道義的結合は、實に人類史發展の一大時期を劃する動向であり、世界秩序再建の方向を暗示するものである。此の場合各民族國家は其の存在理由を失ふのではなく、寧ろ反對に夫々の自立的存在と發展とが尊重され、其の確乎たる基礎の上に協同關係が個性化され、眞に強靱な道德的紐帶を得るのである。從來民族の血の神話と獨逸民族の絶對性を説いて居たローゼンベルグの如きも、今や歐洲協同體論を強調し、獨逸の現實並將來の政策も亦、全體主義から協同主義への轉向を示さんとして居るのは、東亞新秩序の建設乃至大東亞共榮圏の樹立に慕進しつつある我國としては、注目すべき事柄と謂はねばならぬ。歐洲協同體が獨逸により如何に實現さるべきかは問ふところではない。日本としては、先づ以て、唯皇國日本に於てのみ其の實現の可能なる眞の全體主義、即ち暴力や強制によらざる「萬民が心の底から喜悅し悦服して 天皇に歸一し奉る」と謂ふ、世界に一あつて二なき全體主義の實現たる國內體制を一日も速に整へ、東亞新秩序の建設乃至大東亞共榮圏の樹立に邁進し、世界に先驅して新秩序

の建設を指導すると謂ふ大抱負大覺悟がなければならぬ。

以上大略ながら、興亞の大業の由來・意義・對策等を、日本の維新以來の大陸發展の史實と、世界の大勢とに照らして略述したのであるが、顧みて我等の祖國が今や空前の危局に臨んで居ることを思ふ時、眞に深い憂を抱き堅い決心を持たなければならぬことを痛感する。餘りにも大膽な豫斷であると評せられるかも知れないが、私は或は此の二三年を世界人類（一定水準以上の現代文明人の綜合を指す）の運命（其の運命の輪郭若くは基礎）が決せられるのではあるまいかとさへ考へるのである。即ち文明國の一として現に地球上に國をなせる日本の運命、更に東亞の運命も亦、一般世界の運命に繋がりにて決せられることは免れまい。私は我が國民に今少し此の點を本當に把握して貰ひたいと思ふ。兎に角斯やうな感想を廣きつつ茂が現下の國情を見る時、眞に深憂を抱く者は私のみではあるまい。現に見るが如き此の國の爲體で、一體此の空前の世界大變局に善處することが果して出来るであらうか。私は運命論的若は信仰的には然り、出来るだらうと答へるが、唯それだけで以て泰然自若として晝寢することは私の爲し得ないところである。寧ろ憂を先にする義務がお互にあると思ふ。唯日本だけではない、實に有史以來の世界全人類を擧げての空前の大變局にあるといふことに、我が國民殊に私が其の上のみ常に望を懸ける青年諸君が一日も早く覺醒し、此の自覺の下に舉國天に沖する火柱となつて、興亞の大業に向つて邁進せんことを切望して已まない。光は東方からである。

第五章　み　民　吾　れ

眞の日本人たれ

青年諸君、甚だ不十分乍ら、以上四章を通じて私は大陸に志す諸君に對して平素の所感の一端を披瀝したのである。何分にも、御承知の如く私は今重大な外交のことに日夜鞅掌して居り、如何にせば自分に與へられた職域に於て、蹇々匪躬の誠を致し、以て　今上陛下の御恩遇に膺へ奉り、又少しでも國民の期待に添ふことが出来るかと、唯だ一意専心、文字通りに寸刻を吝んで勉強して居る次第であるので、十分に想ひを練り、文章を整へると謂ふやうな餘裕を、甚だ遺憾乍ら全くもたないのである。従つて前後重複——尤も私は、之だけは是非諸君に忘れて貰ひ度くないと考へる基本問題に關する限りに於ては、意識的に殊更に、繰返し、繰返し語つたのであるが——の箇所もあり、行文が不統一に流れたり、部分

部分の繁閑の調節がうまく取れなかつたりしたことを、自分でも氣づいて居る。だがそれらの形式上の不備にも拘らず、私の所見なり志だけは曲りなりにも、間違ひなく表したつもりである。今は非常時である、形式の整備は他日に期して、青年諸君が、私の微衷のあるところを汲んで下さるならば幸甚である。

偕て私は大陸に志す青年諸君に對して、私の謂ひ度いことは、大體に於て述べ盡したと信するのであるが、全體の結尾として茲に改めて、青年諸君に訴へ度いと思ふことは、諸君は眞の日本人たれと謂ふことである。大和民族の血を辱めざる日本國民たれと謂ふことである。上に萬世一系の天皇を戴いて只管に皇謨翼賛、臣道實踐に努めて來た、諸君の父祖に恥じざる昭和の國民たれと謂ふことである。青年諸君、諸君が大陸に志すのも、其の究極の目的は、繰返して説いたやうに、神武天皇以來歴代天皇の大御心を奉じて、普く世界人類の上に皇道を光被せしむるにある。其の手初めとして、先づ滿洲國の完成を援け、新しき中華民國の隆興を助長し、更に全亞細亞民族を解放すると謂ふ、我が大和民族の使命達成に貢獻せんが爲であるに相違ないのである。さうである以上は、諸君は先づ何は措いても、諸君自らの脚下を照らして日本及日本人とは何ぞやと反省して見なければならぬ。はつきりした日本人たるの自覺に立ち、謬りなく大和民族の使命を把握して、其の日本人たるの本質を磨き使命に耐へ得る者として自分を磨き上げると謂ふことが諸君にとつて何よりも第一のつとめでなければならぬと信する。青年諸君、それに就ても私の思ひ出すのは、彼の萬葉集の中犬養宿彌岡麿の詔に應ずるの歌である。

み民吾生ける驗あり天地の榮ゆる時に遇へらく思へば

私は思ふ、何時の世も 天皇の治めす世である限り、日本國民にとつて天地の

榮ゆる時ならざるはないのであるが、吾々昭和の日本國民は日本の歴史に於て最も光榮に充ちた聖代に生れ合せたことを欣び、且誇らねばならぬと謂ふことを。吾々は日本の歴史始まつて以來曾つてなかつた空前の國難に直面し、何れの時代の國民も味はなかつたやうな試練を嘗めて居る。寔に危急存亡の秋であるときへも謂ひ得る。それだけに私は光榮の時代であると謂ふのである。使命が大なれば大なる程苦難も亦大きいのである。苦難が大なれば大なる程勝利も亦大きいのである。勝利が大なれば大なる程光榮も亦大きいのである。否、何れの時代の私達の父祖達もが課せられなかつたやうな苦難を、吾々が今負はされて居ると謂ふ事實其のものが、實に直に昭和國民の光榮であるのだ。而も諸君、既に私が前の章に於て述べたやうに、長くも 今上陛下の下に、昭和の聖代を將來に向つて負ひ行くものは諸君青年であつて、吾々成人ではないのである。而も諸君 今上陛下の御聖徳の高く尊く、且盛んであらせ給ふことを拜して、私は、甚だ恐れ多いことであるが、 今上陛下こそ、寔に人類史上空前未曾有の危機を、御救ひ遊ばすに應はしき 聖天子に在しますことを確信するのである。此の大君の下に、空前の國難を突破し、而して人類文化の破滅を救ふ、何れの時代、何れの民族が曾つて斯くの如き光榮を負はされたか？ 斷じて先蹤を見ないのである。「み民吾れの生ける驗」^{しるし}を誇り、之に感激すべきものは實に諸君昭和の青年でなければならぬ。

青年諸君、諸君は何を措いても先づ我が國體の精華を惟ひ、我が國體の有難さに感佩しなければならぬ。と謂へば諸君は私を以て、餘りにも當り前な平凡陳腐の言を竝べるものとなすかも知れない。が諸君よ、日本の國體の有難さは味はへば味ふ程底を知らないのである。そしてそれは萬世一系の 天皇の國と謂ふ平凡

なる事實に歸するのである。何れの國民もそれ／＼に祖國を誇らざるものはなく祖國を愛せざる者はないのである。そして其の祖國愛の爲に死ぬと謂ふことも亦日本國民のみの專賣特許ではないのである。現に蒋介石の陣營に於てすら、多くの支那青年は祖國の名に於て笑つて死んで居るではないか。又第一次歐洲大戰に於ても、各交戦國の青年は、我れ遅れじと國難に赴いて、戰場に闘ひ死んだのである。特に英國に於ては、學窓にあつた貴族や上流階級の子弟はペンを捨て、立つたのである。彼の有名なイートン中學の生徒迄が從軍して多くの戦死者を出して居るのである。特に當時の首相アスキスの令息の如きはオックスフォードであつたか、ケンブリッジであつたか、はつきり覺えて居ないが、兎に角大學創立以來の天才を誦はれ、父親以上に政治的將來を期待されて居たのであるが、彼も亦惜まれ乍ら勇敢な戦死を遂げたのである。現外相イーデン氏も其の兩人の兄を前の大戦に失つて居るのである。

日本國民として世界に誇り得るものを一ツ一ツ検討して見ると、此の祖國の爲に死ぬことや、愛國心の一ツの例に於ても明かであるやうに世界に兩つなしと謂ふものは一ツとしてないのである。其の中に在つて唯だ萬世一系の 天皇が上に在して、此の日本國を治めすと謂ふことだけが何處の國にもないのである。北畠親房卿も「神皇正統記」の筆を起すのに

大日本は神國なり。天祖始めて基を開き日神長く統を傳へ給ふ。我國のみ此の事あり、異朝には其類無し。此の故に神の國と謂ふなり。

と謂ふ意味深い數行を以てして居られるのである。當時異朝とは主に支那や朝鮮を指して謂はれたものであらうが、此の事實は世界の何處にもないのである。古い文化を誇り得る國はある。けれども皇統連綿として二千六百年の間、一君萬民

の誇りを繋ぎ得た國が何處にあるか。否な管に皇統が久しいと謂ふのみではない日本の國の有難きは、天照大神以來神代の歴史は申す迄もないが、神武天皇以後歴代の天子様が、御自と國とを一にし給ひ、民を慈み給ひ、國の榮えと民の福祉のみを念じ給ふて、尊き一身のことを忘れ給ふ御仁徳と、臣民の天子をお慕ひ申上ぐることに赤子の如くであると謂ふ事實の上にあつたのである。

何れの朝の何れの天子様と取り立て、申上げることが出来ないほど、歴代の天子様は臣民を見ること赤子の如くに在りましたのであるが、御詔勅の傳つて居る天子様の場合には、其の大御心が御詔勅の中などによく表れて居るのである。

神武天皇に就ては既に述べたが、崇神天皇は

惟ふに、我が皇祖諸の天皇等、宸極を光臨すことは、豈一身の爲ならむや蓋し人神を司收へて、天下を經綸めたまふ所以なり

と仰せられて居り、第十六代の仁徳天皇が高臺より民家に煙なきを覽給ふて、三年間課役を停め給ひ、再び高臺より煙の立ち上るのを御覽遊ばして「朕既に富めり。豈愁有らむや」と仰せられたのに對し、課役の御停止により、皇室の御生活が實に貧しきものでおはしたところから、皇后「何をか富めりと謂ひ給ふ」と御問ひ遊ばされたのに對して

其れ天の君を立つるは、其れ百姓の爲なり。然らば則ち君は百姓を以て本と爲す。……今百姓の貧しきは、則ち朕の貧しきなり。百姓の富めるは即ち朕の富めるなり。未だ百姓富みて君の貧しきことは有らざるなり。

と仰せ給ふたことは餘りにも有名である。更に第二十一代の雄略天皇は「義は乃ち君臣にして、情は父子を兼ぬ」と仰せになつて居る。

ひとり上古の世のみではない。歴代の天皇は、國難あれば身を以て代らんこ

とを祈念し給ひ、民に憂ひあれば一身の憂ひとして只管宸襟を惱まし給ふたのである。國靖く、民富める時は國の爲、民の爲に皇祖皇宗の御加護を御感佩下さるのである。近くは 明治天皇御一代の御事蹟を仰ぎ見る時、吾々國民は悉く大御心に對して唯々恐懼感激するのほかはないのである。而して青年諸君、吾々は今御年齒漸く壯におはして而も御德彌高くまします 今上陛下を上戴着居るのである。今上陛下の吾々臣民に對し給ふ大御心を窺ふことの出来る御日常の御逸話は數限りもないが、私は茲に宮内省帝室會計局長官木下道雄君によつて語られた「軍艦榛名後甲板上に拜する聖なる一瞬の光景」と題する講演の全文を茲に紹介し度いと考へる。木下君は本文の事實のあつた昭和六年には宮内大臣官房總務課長として行幸事務を主管されて居たのであるが、此の一文の如く 今上陛下の御聖徳の一端を拜するのに絶好の資料であると信するので借用することゝした次第である。

榛名艦上の聖容

本日天長節奉祝の嚴肅なる式にお招きに預り 陛下御左右の御事につきまして、私の拜し得ましたことの一端をお話する機會を得ましたことを光榮に存じます。私は 陛下の御民の一人として、此の時代に生きることの譬へがたき喜びを實例を擧げて皆様と、もに頌ちたいと思ひます。話は拙いのですけれどもどうか意のあるところをおさとり下さつて、ほんたうに此の大御代に生きる喜びと想ひとを深くし、各其の業に勵む決心を一層堅めらるゝならば、之こそ天長節に當り、私共から 陛下に差上ぐる何よりの御慶びの印でありませう。

只今からお話することは私が他人から傳へ承つたことではなく、私が現に此の眼で偶然拜しました一つの聖なる光景、それは鹿兒島灣上夕闇に包まれた軍艦榛名後甲板上、あたりに入なく聲なき一瞬の光景に就てゞありまして、私は我が日の本のおのづからなる姿を、此の時ほどあり／＼と眺めたことはないのではありません。

お話の本筋に入るに先だち、私は一つの隨筆を皆様にご紹介して置かなければなりません。

私の同窓に三宅正太郎と謂ふ方があります。今大審院判事をして居られる人であり、其の人が昨年一つの隨筆ものを出版されました。其の本の中に「宮城前」と謂ふ一篇があります。其の内容はと申しますとドイツ東プロイセンの或る裁判所に背勤めてゐた一人の老判事が、昨年旅行の途中日本に立ち寄り、

一日舊友の三宅君を訪ねました。或る日二人は相携へて宮城奉拜に出掛けたのでありますが、丁度事變中のことであり、宮城前の廣場には、風にひらめく日の丸の旗、鳴り響く勇ましいラッパの音、多勢の人が雜沓し、出征の若い人達は親兄弟や友人に圍まれて、おごそかに頭を垂れ、宮城を拜し、心からのお別れを陛下に申し上げてゐる。其の雜沓の中で、三宅君達二人は一生の中でも滅多に遭遇することのないやうな感激に胸を打たれて、此の眞剣な場面を眺めて居つたのですが、ふと見ると群集を少し離れた所に三人連れの親子が祈つて居ります。出征する兄と其の妹と父親の三人、今しがた田舎から東京驛についたのでありませう。旅の荷物を傍らに置き、遠慮勝ちにお濠の玉垣の側近くへ寄つて一心に祈つて居る所です。此の光景を先程からだまつてデット觀て居つたドイツの老判事は、聲をのんで、そつと三宅君に尋ねました。

「皇帝陛下はあの城の窓から此の光景を御覽になつて居らるゝのか」

と。お濠の向ふに聳える白壁の櫓の窓を見上げて、かう尋ねました。察するところ老判事は、民衆のかくまで敬虔な態度は、陛下が御覽になつておいでになる前でなければ見られる譯がないと謂ふ考へが浮かんだのでありませう。其の瞬間に三宅君の頭に閃いたことは、眼を瞋らせ腕をふるつて民衆の前に獅子吼する獨裁者の姿でした。又さうしなくては國民の心をとらへることの出来ない國と、我が日本の國體との著しい相違でありました。三宅君は決然として「否」と答へながら、世に又と比類なき我が國體の有難さに感泣して、再び謹んで宮城を拜したと、かう謂ふ話の一篇であります。

陛下が御覽になつておいでにならうが、御覽になつておいでになるまいが、日本國民の忠誠には變りはない、それが日本の國體の尊い處であると言ふのが「宮城前」の骨子であると思ひます。

私が之からお話いたす事柄は三宅君の「宮城前」に對する應答とお考へ下さつてよろしいのです。三宅君にお會ひいたしたならば、是非此のお話をしたいと思つて居りますが、未だその機會がなく、皆様に先にお話することになつてしまひました。

昭和六年の秋のことではありますが、熊本に於て陸軍特別大演習が陛下御統監の下に行はれまして、私も供奉の一員としてお供して参りました。大演習終了後陛下には鹿兒島市に行幸あらせられ、御歸りはそこから軍艦榛名で海路を横須賀港へと向はせられました。

十一月十九日、御乗艦時刻は午後四時過ぎ、御召艦は日没と共に錨を上げ、縣民の熱誠なる奉送裡に櫻島を後に鹿兒島灣を静々と南下して行きます。

間もなく夕食の時刻がまわりましたので、私共供奉員一同は食事を致して居りましたが、私は海上の様子が氣に懸りましたので早く食事を済ませて皆より先に後甲板に馳せ上りました。

後甲板と申しますのは、軍旗の立つて居る後方の甲板で、かなり大きく大きな大砲を備へ付けてあるあの甲板を謂ふのです。榛名では最後方の司令長官室が陛下の御座所に當てられて居りまして、それは後甲板の真下に位置して居りますが司令長官室からは後甲板へ専用の階段が通じて居りますので、陛下には何時でも隨時御自由に後甲板にお出ましが出来るやうになつて居りました。後甲板には御乗艦中と雖も何等特殊の裝飾はなく、一個の海圖の机と數個の脚附の望遠鏡と簡単な椅子が五、六脚あるのみであります。陛下は此の後甲板が殊の外お好きで、御用のおありにならない限りはと申し上げてもよろしい位いつもこゝにお出まし遊ばされます。

さて、お話が前に戻りまして、後甲板へと急いだ私は陛下はまだ御食事を御済ませ遊ばされぬであらうと思ひながら、別の階段を馳せ上つたのです。もはや日はトツブリ暮れ、月はなく海上は眞暗で、甲板上には小さな電燈が只一ツ灯つてゐるばかり、電燈の下ならとにかく、少し離れたら人の顔もよく判らぬ位の夕闇に甲板は包まれて居りました。

甲板には誰もまだ出て居らぬとばかり思ひ込んで馳せ上つた私は、思ひ掛けなくも間近な夕闇の中に只御一人陛下の御後姿を拜したのであります。右舷の手摺り近くに海の方をお向きになつて直立遊ばされ、今し方望遠鏡から御手を離させられたかに拜し、長くも御右手を舉げさせられ、何者にか御舉手御會釋の御姿であります。思はず私も陛下の御覽遊ばされる方向を遙かに凝視致し

ましたが、夜闇の外何も見えません。直ぐ私は側の望遠鏡に眼をあてました。時刻から推し測つて艦は未だ依然として鹿兒島灣内を南下してゐる筈です。そして艦の航路は灣の中央線に當りますから、左舷大開の海岸にも右舷薩摩の海岸にも六哩離れてゐる筈です。そんなことを考へてゐる中に段々眼が慣れてきて、レンズにうつる山々のぼんやりした姿をとらへることが出来ました。艦は今薩摩國指宿の沖合の邊を航海して居るのでありませう。尙も眼を凝らして覗いて居りますと、其の山々の下に海の色と陸の色との境に海岸線が見える様になりましたが、其の海岸線一帯に赤い灯の流れが連綿として果しなく續くのが見えます。更に又少し小高い所に、何丁おきかに點々と海岸一帯連續して、大きな火のかたまりがぼうつと煙を上げてをるのが見えて來ました。此の時初めて私は萬事を了解したのであります。

遙かあの海岸地方に住む人達が、今頃は御召艦が自分達の村の沖合を御通過になるに相違ないと思つて、夜分艦影を拜することは出来ませんけれども、山々には篝火を焚き、老いも幼きも悉く海岸に立ち並び、手に手に提灯松火を振りかざして、海上遙か 陛下在しますと思はるる方向を伏し拜んで、心からなる奉送迎を申し上げて居るのです。陛下は今し方望遠鏡で之をお察し遊ばされ只御一人間い海上の甲板の上から、遙かに此の村人達に御會釋を賜はる處であつたのであります。

彼方の海岸に立ち並ぶ無数の人々の中で、誰か此の有難き大御心を仰ぎ知るものがあります。私は改めて軍艦榛名の山のやうな堂々たる姿を仰ぎ見かへしたのでありますが、海岸からは此の巨體も僅かに二つ三つの灯火としか見えないであらうと、眞に残念に思ひました。ああ何とかして 陛下の大御心を傳

へる術はないものか、無線電信を打つても今篝火を焚いてゐるあの人達の耳に迄届くのは恐らく明朝になりませう。そこで私はせめてもと思ひまして、艦長にお願ひして艦全部の探照燈に點火し、數條の光芒を以て左は大隅、右は薩摩の山や海岸一帯を隈なく撫で廻して貰つたことでありました。

之が軍艦榛名の甲板上でゆくりなくも拜した眞に感銘深き一瞬の光景であります。海上數哩を距てて陸から海へ、海から陸へ闇を貫く一筋の眞心の光。拜する者は期せず　陛下御擧手の尊影。　陛下又御言葉もなく闇に向つて應へ給ふ。嗚呼何たる莊嚴な光景でありませう。

毎年今日私共は「光遍き君が代を」「惠遍き君が代を」と天長節の歌を唄ひますが、此の歌の詞は決して決して唯の形容詞ではありません。私共は皆大君の御光を、又御惠を知らずしていただいて居るのであります。此の事は日本國民たるものが常に心に銘して居らねばならないと存じます。

私は勤務上毎日宮城に參入致しますので、二重橋前に幾百千の國民が熱いお祈りを捧げて居る光景に屢々接するのでありますが、其の度毎に私の想ひは狂はんばかりに燃えて、過ぐる夜の鹿兒島灣上の聖なる光景を追つて行きます。皆様は「國民は祈るもの　陛下は祈られ給ふ御方」と、輕々しく思つてはなりません。日本國中　陛下の御祈こそ最大最深のものと、恐れながら申し上げなければなりません。遠き古の神代より天津日嗣の御位を代々繼々に受け繼がせられ、我が國治しめす日夜の御苦心は、只管祈りに祈りて止まぬ御生活とならざるを得ないものと、恐れながら拜察致します。殊に今日の如く内外の情勢が容易ならぬ時代にありましては尙更のことです。

國の爲、民の爲一刻たりとも大御心を休め給ふ御時なき　陛下に、せめて今

日の天長節の日にでも、ほんたうにごゆつくりと御休息を御願ひ致したいものです。然しどうすれば私共の此の願は叶ふでせうか。どうすれば大御心を安んじ奉ることが出来るでありませうか。其の方法は唯一つ私共國民が一人残らず正しく逞しい人間となり、陛下が一番御心配遊ばさるる方面を自ら進んで擔當し、挺身奮闘各其の業に邁進して「私共が居りますから 陛下どうぞ御安心下さいませ」と申し上げることが出来るやうにするより外に途はないのです。此の奮闘こそ、最大最深の 陛下の御祈に添ひ奉る私共の祈に外ならないのでありませう。

天長節の此の佳き日に當り、軍艦榛名後甲板上の光景を皆様にお傳へ致しますと共に、自ら省みて私共が 陛下の御民として 陛下に御誕生日の御祝ひの詞を申し上ぐる資格がほんたうにあるか、ないかについて、お互に眞剣に考へなければならぬと思つて居ります。

み民吾れ生ける驗あり

青年諸君、事實は何ものにも優る雄辯である。誰が此の 今上陛下の大御心を拜して感激せざる者があるであらうか、日本國民の一人としてあり得るであらうか。吾々は實に「み民吾れ生ける驗あり」と涙を以て、聲の限り、心の限り絶叫し度くなるではないか。殊に木下君のお話の中の獨逸と比較して貰ひ度いのである。獨逸は伊太利と共に吾々の同盟國の一つである。そして私は、獨逸人が世界に餘り類のない優秀な民族であることを信じ、亦歐洲大戰後の彼の再起不能と謂ふ可き悲惨な状態の中から立ち直つて、今日殆ど歐洲全土を席捲せんとする勢を示しつつある、現代の獨逸國民を心から尊敬するものである。特にヒットラー總

統が微賤より身を起し、意氣沮喪せる戦敗國民を提げて、天下無敵のナチス獨逸を築き上げた、彼の卓抜無比の指導性に對して唯だ驚嘆の外ないものである。

ヒットラー總統は確に偉人であり英雄であるに相違ない。彼にして英本土上陸に成功し得たとしたならば、彼は大ナポレオンすらも爲し得なかつたことを果たすのである。英米人にして總統の人物評をなす者が、彼を以て變質者の如く征服狂の如くに描くのも亦無理がないほどに、彼は傑出して居るのである。獨りヒットラー總統と謂はず、伊太利のムッソリーニ首相、或は蘇聯のスターリン、又は重慶に敗殘の餘勢を保つ蔣介石すらもが、夫々に傑れた國民の指導者であることを私は認める。固より彼等をして彼のやうに大きな指導性を發揮させて居るのは、夫々の國に特有な國家的危機、又は所謂「政治精神病理的」とも謂ふべき國の内外の事情があるからでもある。併し乍ら彼等の中の或者は必ず後世に名を留めるやうな英雄であり、百世に一人の傑物であることは疑ふべくもないであらう。それにしても彼等は終に一代の英雄たるに止まるのである。彼等の傑出した人間性、彼等の驚くべき統御力、彼等の強毅無類の意志力等々は、彼等の個人的生命と共に消滅せしむるには惜しいものであるが、而もそれ等は一世の風雲見たる彼等の肉體的生命と共に、惜まれつつ消え去るほかなき者である。畏れ多いが日本の天皇が皇統連綿として歴代惟神の御皇徳を繼承し給ひ、臣民に對して世々御仁慈を垂れ給ふとは天地霄壤の差があるのである。神武天皇の「天業恢弘の詔」に於て、既に其のことが示されて居るのを仰ぐ時、實に思ひ半ばに過ぎるものがあるではないか。即ち

皇祖皇考、乃ち神、乃ち聖にして、慶を積み、輝を重ねたまひ、多く年所を歴たり。天祖の天降りまして、以て今に逮ぶまで一百七十九萬二千四百七十餘歳

なり。

とある。此の數字にとらはれる必要はないと思ふが、神武天皇に到る間迄に既に久しきに亘つて「代々の御先祖方は神ながら聖人の徳をお備へになつてゐたので、恩恵を萬民に施し、人智をすすめ、皇威を四方に輝やかして、天孫降臨以來實に何千萬年と謂ふ數へきれない長い間國民をお治めになつて居られた」のだと神武天皇は仰せになつて居るのである。噫皇室の恩愛斯くの如く深く且長くして君臣の別亦自ら正しき國が世界の何處にあるであらうか。

次に我々臣民は、無限に遠い父祖の時代から、天皇の御仁徳に應へ奉つて、天皇を畏み仰ぎ奉ること父の如くし、天皇を慕ひ奉ること赤子の母を慕うが如くにして來たのであり、而も恩愛に狎れて君臣の分を忘れると謂ふ事が無かつたのである。吉田松蔭先生は講孟餘録の中に於て、

天下は一人の天下に非ずとは之支那人の語、支那は則ち然り。神州に在ては斷々として然らざるものあり。謹んで按ずるに、我大八洲は皇祖の肇め給ふ處而して萬世子孫に傳へて天壤と共に窮り無きもの、他人の覬覦すべきに非ず。其の一人の天下たる亦明かなり。請ふ、必無の事を設けて以て其の眞に然る處を明にせん。本邦の帝王にして或は桀紂の虐あらんも、億兆の民は唯當に首領を並列し、厥に伏して號哭し、仰で天子の感悟を祈るのみ。不幸にして天子震怒し、盡く億兆を誅し給はゞ、四海の餘民復た子遺あるなく、而して後神州亡ぶ。若し尙一民の存する有らば、又厥に詣つて死す。是れ神州の民なり。厥に詣つて死せざれば則ち神州の民に非ざるなり。是時に當り湯武の如き者、放伐の舉に出でなば、其の心仁なりと雖、其の爲すところ義なりと雖、決して神州

の人に非るなり

而して神州の民尙何ぞ之に與らんや、故に曰く天下は一人の天下にして、其の一人の天下に非すと謂ふは特に支那人の語のみ。普天率土の民皆天下を以て己が任となし、死を盡して以て天子に仕へ、貴賤尊卑を以て之を隔限と爲さず、是れ則ち神州の道なり。

と訓へて居られる。此の書は先生が野山の獄中に於て同囚に「孟子」を講ぜられた折の産物であるが、革伐放伐の項に到つて、先生の烈々たる皇國臣民道の信念が、言句を衝いて迸り出る状が、眼に見る様である。先生は又「余は罪囚の餘にて他人に接すべき身に非ざれ共、其の獨り自ら志す處は、皇國の大恩に報ひ、武門武士の職分を勤むるにあり、此の志は死すと雖、吾敢えて變らず」とも語つて居られるのである。

私は、松蔭先生の絶對臣道觀に觸れる毎に、常に思ふのであるが、斯くの如き高く亦強き國民的情操を、三千年の久しきに亘つて養ひ上げ、父子代々永久に承け繼いで來た大和民族の血は實に尊く有難いものではないか。天皇の御徳と共に、日本人が兩つ無きものとして世界に誇り得るものは、實に此の父祖傳來の忠孝一本の國民的情操でなければならぬ。松蔭先生が「我皇室に限つて絶對にあり得ない事であり、左様な假定を設ける事さへも畏れ多い事であるが、我が國の臣道をはつきりさせる爲に假設を立て、若しも我國に桀紂の様な悪虐の天子が出られたとしたら、之を御諫め申し上げて御採り上げにならねば、臣民は一人残らず誅に服して死ぬのだ」と謂ふ先生の教へは唯の理窟ではなくして、夫れは日本國民の斯くあるべき真情を示されたものである。

ヒットラーが如何に傑れた指導者であつたとしても、獨逸國民の士氣を鼓舞し

て勇往邁進させる爲には、常に國民の前に姿勢を大きく曝らし、雄辯廣辭を連ねて咆哮し續けて居なければならぬのである。我國の如く君は九重の奥深く在りて常に民を思ひ、民の爲に祈らせ給ひ、民は山野に、海洋に、事務室に、教場に工場に、或は戦陣の中に在つて、常に大君を思慕し奉り讃仰し奉り、天皇に歸入し奉つて、其の間絲毫の隔たりも無いと謂ふのとは自ら趣きを異にするのである。

大陸に志す青年諸君、私が諸君に對する贈り度いものは、何を措いても此の日本の二つの誇りである。諸君は大陸に於て益々諸君の中なる日本的なるものの本質を究め、層一層夫れを磨き上げねばならぬ。私は前に述べた様に、少年夢多き日にアメリカに渡航し、十四の時から異郷他民族の中に在つて、つぶさに辛酸を嘗めたが、其の爲に却つて自らを照らし、日本を正しく觀る事の出來た事を、今向幸であつたと考へて居るのである。諸君は尠くとも渡米當時の私よりは年長の人達であつて、自他を比較して物を見る事も一層良く出來るに違ひないと考へる。翼くば諸君は日本人たるの誇りを高く、亦正しく持し乍ら、大いに反省し修練して頂きたいと思ふ。

然り諸君は、諸君の祖國、諸君の家、諸君の血の傳統に對する誇りを有たねばならぬ。「大伴の遠つ神祖（おんかみ）の其の名をば大來（おほき）自主（みづかみ）と負ひ持ちて仕へし職（しやく）海行かば水漬く屍山行かば草むす屍大君の方にこそ死なめ願りみはせじと言立（ことたて）て、ますらをの潔き其の名を……」云々とは大伴の家持の長歌の一節である。其の家持は一族の一人が他人の讒に依つて罪を得、官職を奪はれた時に憤慨の餘り

ひさかたの、天の戸開き、高千穂の岳に天降りし、すめろぎの、神の御代より櫛弓（くしゆみ）を、手握りもたし、眞魔矢を、東み添へて、大久米の、ますら猛雄を、

先立て

に始まり

天の下、知らしめける、すめろぎの、天の日嗣と、つぎてくる、君の御代御代かくさはぬ、あかき心を、すめらべに、極めつくして、仕へ来る、祖おやの司つかさどと言立てて、授け給へる、うみの子の、いや繼々に、見る人の、語りつぎでて、聞く人の、鑑にせむを、あたらしき清きその名ぞ、おほろかに、心おもひてむなごとも、親の名断つな、大伴の氏と名に負へる、猛夫の伴に終る長歌に、二首の反歌

敷島の和の國に明らけき名に負ふ伴たぐの緒心つとめよ

劔太刀いよとぐべし古にさやけく負ひて來にし其の名ぞ

を添えて、一族を諭し勸まして居るのである。神代より武を以て皇室に仕へ奉り代々祖先の名を辱めなかつた大伴氏の傳統の誇りと、其處から湧き出づる自信と氣魄とが脈々として流れて居るではないか。諸君、傳統の誇りを失つてはならぬ。私が特に滿鐵を語り、滿鐵魂を以て夫れを結んだのも、常に滿鐵社員の志氣を支へて居るものが、此の滿鐵の傳統への誇りで有る事を知るからである。大陸の經營の第一線には、久しきに亘つて其の實力を蓄へた滿鐵をして立たしめよと謂ふのが私の持論であるが、滿鐵の實力の内容を分析して、其の中に於て最も重要であり、且力強いものは、私の見る處では、滿鐵社員の中を貫く此の傳統の誇りであり、滿鐵魂の自覺であると信ずるものである。

大陸に志す青年諸君、私は一日の長の故に、諸君に種々と忠告し、助言し度いと思ふ事は必ずしも尠くはない。けれ共志を立て、大陸に進出せんとする諸君に老婆心から出る細かい注意を加へて見ても仕様がな、私は多くを語る事を欲し

ない。諸君は唯日本人たるの誇りを傷つけず、男としての義理を缺く事なきを期して貰ひ度いのである。諸君は年少氣鋭である。大いにやる可し、やり過ぎて可なりである。けれ共粗暴と眞の勇氣とを混同してはならぬ。青年大陸開拓者の先達であられた荒尾精先生は明治十九年二月、二十八才の時、陸軍中尉として渡支され、漢口に樂善堂を開き、同志を糾合せられたのであるが、目的を「世界人類の爲に第一番に支那を改造せんとするに有り」と高く定め、次の如き同志心得書を起草して居られる。以て諸君の自戒とすべきである。

「外部に活躍する者の任務は廣く天下に人材を求め、又支那全般の事を調査探求して之を綜合大成するにある。而して人物の標準を君子に置き、其の第一は道を修めて全地球を救ふ、第二は道を修めて東洋を興す、と謂ふに有つて彼の大言壯語する豪傑者流は同志の潔しとしない處である」

最後に一言する、諸君は未だ人生修業の途上にあり、未完成である事を忘れてはならぬ。青年の時代は修養鍛錬の時代である。大成への過渡期である。小さく納つてはならぬ。従つて諸君は勞を吝み、難を避け、犠牲を厭つてはならぬ。何となれば、夫等のものは悉く諸君を鍛冶する火であり、水であるからである。諸君はそれと同時に青年時代は單に老成への一過程としての意味を持つのみでは無くして、それ自體として亦一つの立派な目的である事を忘れてはならぬ。諸君は健全に、而して正しく諸君の青春を楽しまねばならぬ。諸君に感覺の欲を充たすのみの安價な享樂に耽ける事を勧めるのではない。それは固く戒めて、諸君の心身を潔く強く保たねばならぬ。そして諸君は何時皇國の爲生命を獻げても悔ひを残すこと無き様、常に充實した一日々々を有たねばならぬ。そして何時でも喜んで皇國の爲、人道の爲に死に得なければならぬ。松蔭先生は子弟の死生の道を問

ふに答へて「死生の悟が開けぬと謂ふは餘り至愚故詳に謂はん。十七、八の死が惜ければ、三十の死も惜し。八、九十、百になつても是で足つたと謂ふ事なし」として、醉生無死の無價値を教へて居られる。私は決して諸君に生を輕んぜよ、と謂ふのではない。自重大成に名を藉りて怯懦に陥る事を惜しむのである。諸君は常に死生を超越し、而も 天皇陛下の爲に、亦兩親兄弟朋友の爲に、諸君の身心をいたはりつつ、大いに大陸開拓の爲に奮闘されんことを、私は衷心から熱望して歇まないのである。

後記

滿鐵總裁として在任四ヶ年に亘る松岡先生の偉大なる業績を記念するため、滿鐵社員會に於ては、幾多の計劃が考案されたのであるが、松岡先生の精神を、大陸に志す青年諸君に普及徹底せしむることが、最も應はしき紀念事業なりとして、松岡先生に之が著述を御願ひした。爾來一ヶ年、松岡先生は身邊極めて御多忙の中に、訪歐御出發日の三月十二日、漸く脱稿された。その結果生れたのが本書である。

滿鐵社員會は、此の松岡先生の著書を獨り滿鐵社員及びその關係者のみにて専有すべきではないとして、我が社の請を許容され、本書の出版頒布を第一公論社に一任された。吾等は滿鐵社員會の御厚意に深く感謝し、社員會の意を體しこの事業の遂行に専心してゐる次第である。

尙ほ本書第四章 興亞の大業の項の大部分は、當局の許可を得て文部省教學叢書中の松岡洋右先生著「興亞の大業」の記事を引用せるものであることを附記し併せて深甚の謝意を表するものである。

第一 公論社